

旧石器時代の女性像と線刻棒

Female Figurines and Batons Engraved with Sexual Symbols
in the World Palaeolithic Age

春成秀爾

HARUNARI Hideji

①序 説

②後期旧石器時代前半の女性像

③後期末～晩期旧石器時代の女性像

④後・晩期旧石器時代の線刻棒

⑤後 説

図版 旧石器時代女性像集成

【論文要旨】

ユーラシアの後期旧石器時代前半、オーリニャック期の約40,000年前に出現し、グラヴェット期の約33,000～28,000年前に発達した立体女性像は、出産時の妊婦の姿をあらわし、妊娠・安産を祈願する護符の意味をもっていた。しかし、グラヴェット期後半の約24,000年前に女性像は消滅する。そして、後期末～晩期旧石器時代マドレーヌ期の約19,000年前に線刻女性像や立体女性像が現れ、その時期の終わり頃の約14,000年前に姿を消す。

日本では、大分県岩戸遺跡出土の石製品が女性像とすれば約25,000年前で、もっとも古い。愛媛県上黒岩遺跡から出土した立体女性像の石偶は14,500年前で、その後、13,000年前頃には三重県粥見井尻遺跡の土偶があり、縄文早期以降の発達の先駆けとなっている。

後期末～晩期旧石器時代の立体女性像は、フランスのロージュリー＝バス型、ドイツを中心とするゲナスドルフ型、ロシア平原のメジン型、シベリアのマイニンスカヤ型、日本の上黒岩型と粥見井尻型、相谷熊原型を設定することができる。ロージュリー＝バス型はアングル＝シュール＝ラングラン型の岩陰の浮彫り女性像に、ゲナスドルフ型はラランド型の岩陰の線刻女性像またはホーレンシュタイン型の板石の線刻女性像に起源がある。

ゲナスドルフ型の立体女性像は、腹部のふくらみはなく、乳房を表現した例は少なく、妊婦をあらわしているようにはみえない。しかし、ラランド型の線刻女性像に先行するベック＝メルル型の線描女性像は、妊婦の姿をあらわし、さらにラ＝マルシュ型の線刻女性像は出産時の妊婦を表現している。ゲナスドルフ型の立体女性像も、妊婦を記号化した表現と理解するならば、後期末～晩期旧石器時代の立体女性像も、後期旧石器時代前半の立体女性像と同様、妊娠を祈り出産を願う呪いに使った可能性が大きい。その背景には、最終氷期の極相期がつづくなかで世界的に人口が減少していた、あるいは不妊の傾向が顕著にあらわれていたという事情があったのであろう。

ユーラシアには男根形の象牙に記号化した女性器を表現した男女交合の象徴物がある。ロシア平原のメジン遺跡の旧石器人は家屋内で、羽状文を施したマンモスの頭骨、下顎骨、肩胛骨を女性器にみたて、牙製の男根形拍子木でたたいて一種の音楽を奏でていた。立体女性像を妊娠・出産にかかわる護符とみるならば、それは妊娠あるいは出産を促す呪いの演奏であろう。上黒岩遺跡出土の棒状の石に羽状文や三角形を彫った線刻棒も、同様の目的をもって使用していた可能性がある。

【キーワード】 上黒岩、旧石器時代、線刻棒、女性像、妊娠・出産、ユーラシア

①……………序 説

愛媛県久万高原町上黒岩遺跡の1962年（第2次）—1970年（第5次）の発掘調査の間に、縄文草創期に属する石偶（石製の立体女性像）と線刻棒（棒状線刻礫）が出土した〔江坂ほか1967〕。発掘から約40年たった2009年、上黒岩遺跡の発掘報告書の刊行が実現し、筆者は石偶と線刻棒の記載と考察を担当した〔春成2009〕。上黒岩遺跡の石偶13点のうち大多数は9層から隆起線文土器を伴って出土した。4次調査時に6層から無文土器に伴って1点出土しているけれども、9層の石偶が転移している可能性を否定しきれない。線刻棒は、9層から1点、6層から1点出土した。のこの1点は7～6層から出土したが、発掘区が不明であり、本来の層は6層か9層か判断しかねる。炭素14年代の較正年代は9層が約14,500年前、6層が約12,000年前であるから、ともに更新世末、ヨーロッパの晩期旧石器時代のマドレーヌ期とアジール期に対比できる。

この論文では、上黒岩石偶についての理解を深めるためには、ユーラシアの後・晩期旧石器時代のヴィーナスとも呼ばれる立体、線刻、線描、浮彫りの手法をとる女性像⁽¹⁾についての認識が必要と考えて、以下の課題を設定する。1) ユーラシアおよび日本列島の後期および晩期旧石器時代の女性像に表現されている諸特徴を十分に把握し、その実態を型式として把握する。2) それにもとづいて、女性像の型式と時間的変遷との関係を明らかにする。3) 上黒岩遺跡と時期的に近い16,000年前を前後する晩期旧石器時代の立体女性像の起源に関する仮説を提示する。さらに、4) 上黒岩遺跡から出土した線刻棒の線刻と破損・敲打の痕跡に関して、ヨーロッパやロシアの旧石器時代の線刻や線描をもつマンモスの牙や骨と比較して、その用途について推定するとともに、女性像との関連を論じる。

以上のような課題を追究するには、第一に個々の女性像の正確な年代を把握しておくことが前提である。しかし、実際には年代的位置づけが困難な資料がある。その原因の一つは発掘または発見の年代が古く伴出遺物との関係が十分に明らかなでない例が少なくないこと、もう一つは炭素14年代が示されているばかりでも女性像そのものを測定したものでないことである。

本論文では、女性像を出土した遺跡の炭素14年代の測定結果を尊重し、C. ギャンブルおよびO. ソファァーが整理した炭素14年代〔Gamble 1982 : 95, Soffer 1987 : 342〕、C. コーエンが著書に示している女性像の炭素14年代〔Cohen 2003〕、C. ヘックが1993年に集めた晩期旧石器時代の女性像の炭素14年代〔Höck 1993 : 310〕などを参考にして較正年代をだして使用する。1遺跡でいくつかの測定値がだされているばあいは、女性像の型式的特点にもとづいて適当と判断する年代を採用する。ヨーロッパの後・晩期旧石器時代の細分と各時期の年代についてはO. イェリスらが提示している較正年代〔イェリスほか2009〕を用いる。そのうえで、地域別に女性像の編年的配列をおこない、最終的にユーラシアの女性像の編年を試みる。なお、更新世と完新世の境界は11,700年前と定められており、ヨーロッパでは晩期旧石器時代の終末をここにおいているので、日本の縄文草創期（約15,500～約11,500年前）も晩期旧石器時代の一つの地域的変異として扱うことにする。

このような後・晩期旧石器時代の大陸側の資料を解析するさいの第二の前提は、綿密な観察にもとづく女性像の正確な実測図が揃っていることである。しかし、現状はまったく不十分であるので、

この機会にユーラシアおよび日本列島の女性像および関連資料の集成図を作成し、研究の基礎を固めておくことにした。掲載した図は、公表時の原図が不正確であったばあいや、加工した形状を図にあいまいに表現してあったばあいは、写真にもとづいて修正を施した。写真はあるけれども図がないばあいは、写真から図をおこした。いずれのばあいも、造形的特徴を鮮明に示すことに努め、また、これまであいまいにされてきた完成品と未完成品との区別にも注意を払った。

なお、日本列島に関しては、ユーラシアの中石器時代または初期新石器時代と年代的に併行する縄文時代早期の土偶の図を加えて、その後の発達を展望できるようにした。その作業には原田昌幸の集成図〔原田 1997〕を利用して描いた。

筆者が実物から直接描きおこした図はごく少数であるので、それら以外は正面形、側面形、背面形との間に矛盾が存在するなど、精度には自ずと限界があることを断っておきたい。

②……………後期旧石器時代前半の女性像

現在知られている世界最古の女性像は、後期旧石器時代初めのオーリニャック期（42,000～32,000 年前）の初め、約 40,000 年前のドイツのホーレ＝フェルス（Höhle-Fels）例である。高く突出した乳房と性的三角形・陰裂の表現によって明らかに女性をあらわしている（図版 2-31）。

38,000 年前のオーストリアのガルケンベルク（Galggenberg）出土の結晶片岩製の「踊るヴィーナス」は、扁平な人物像の右側の 2 つの突出部を、上にあげた左手と乳房とみればこれも女性像である（図版 3-35）。

オーリニャック期後半のヨーロッパの立体女性像は、35,000 年前のブラッサンブイ例（図版 1-1～8）のように頭部、乳房、腰部を比較的写實的にあらわした例から、34,000 年前のヴァインベルク例（図版 2-32）のように胴部と乳房だけの著しく抽象的にあらわした例を含んでいる。その後、ヨーロッパ・ロシア平原では後期旧石器時代前半のグラヴェット期（33,000～24,000 年前）・パヴロフ期（東ヨーロッパのグラヴェット期）に女性像を盛んに作っている。ロシア平原のばあいも 29,000～26,000 年前のコスチュンキ、ガガリーノ、アヴデーヴォ遺跡の女性像までは乳房は大きく垂れ、腹部も大きく膨らみ妊婦の表現とみてよいが、これらの系譜をひくシベリアの 28,000～24,000 年前のマリタ遺跡の女性像は、立体感を失い扁平化しており、最後は乳房や腕を省略した簡便化した表現になっている（図版 10-112～128）。この時期の女性像はすべてヨーロッパ・ロシア平原・シベリアの北緯 55 度～40 度の範囲から見つかっている（図 1）。それ以北は氷床地帯、以南の西アジア・アフリカからは 1 点も見つかっていない。女性像は後期更新世後半の氷期に寒冷地で発達していることがわかる。

後期中頃のソリュートレ期（25,000～23,000 年前）～バデグール期（マドレーヌ I 期、23,500～20,500 年前）の立体女性像の実例は知られていない。

まず、後期旧石器時代前半、オーリニャック期～グラヴェット期・パヴロフ期のヨーロッパとロシアの女性像をみていく。後期旧石器時代の女性像は個体差が大きいこと、出土点数が少ないことのために型式分類しようとするれば、1 型式数点のものから 1 型式 1 点のものまでである。ここではフランス・イタリア、オーストリア・チェコ、ロシア平原、シベリアの地域に分けて、この時期の女

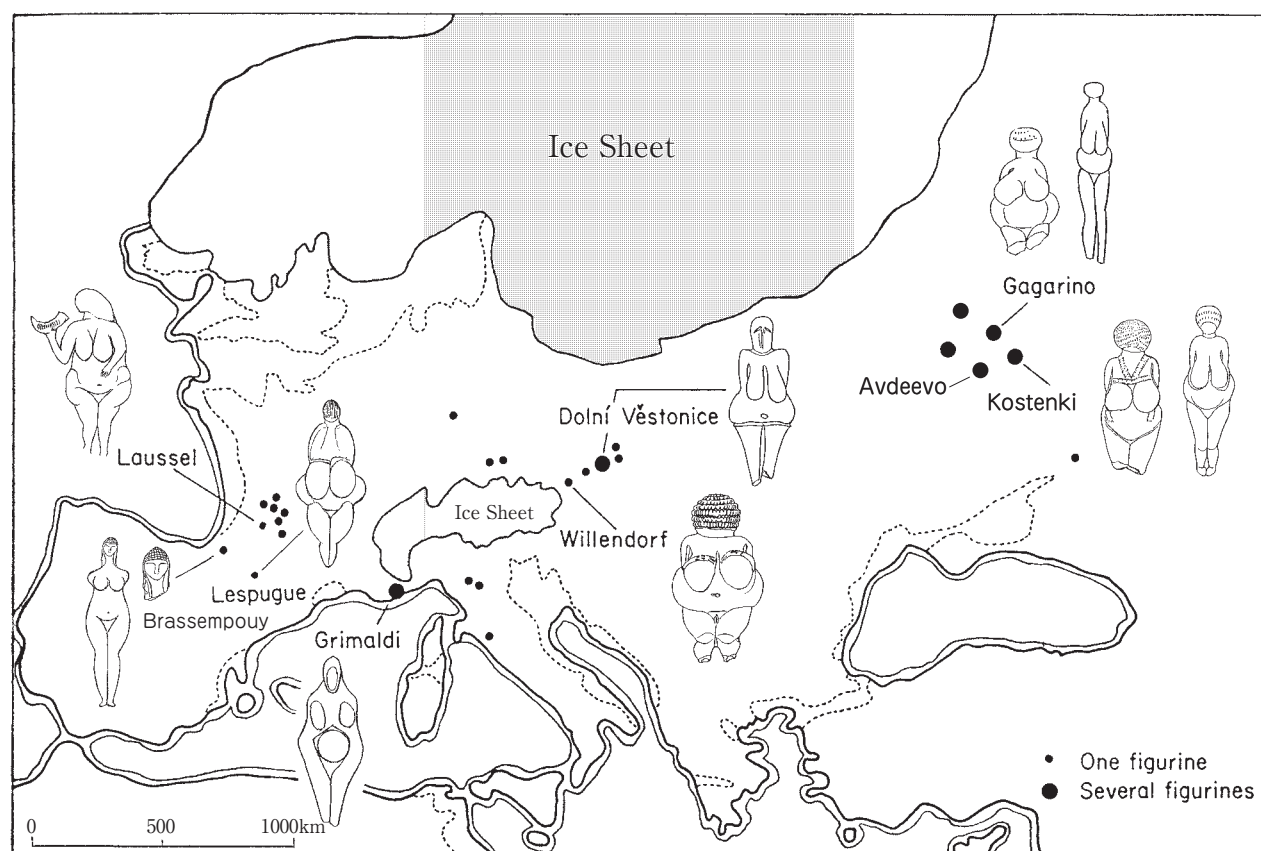


図1 ヨーロッパ・ロシア平原の後期旧石器時代前半の女性像の分布（[Champion *et al.* 1984]の女性像の図をさしかえて作成）

性像とその型式変遷をみておきたい。ここで用いる立体女性像の大型品は高さ19cm以上、中型品は高さ16～8cm、小型品は高さ6～2cmのそれをさしている。

1 フランス・イタリアの立体女性像

フランス中部のガロンヌ川とドルドーニュ川の流域を中心とする地域と、イタリアのジェノヴァ湾岸からイタリア半島基部の地域からは、女性像が集中的に出土しており、形態的にも共通するところが多いので、フランス・イタリアを一つの地域としてとらえることができる。ブラッサンブイ、レスピュグ、モンバジエ、グリマルディ、サヴィニャーノなどの具象的な女性像と、少数であるがセリエ、トラシメネなどの抽象的な女性像の2系譜が認められる。

F1 ブラッサンブイの女性像A～B類

フランス南西部のランド県のブラッサンブイ（Brassempouy）岩陰から1894年に工事中に見つかったあとE. ピエットが発掘した計8点のマンモス牙を研磨して製作した女性像である（図版1-1～8）[Piette 1895]。C. ギャンブルは伴出石器群を上部ペリゴール期とする。C. コーエンは前28,000年としているので、較正年代は35,000年前で、オーリニャック期である。

A類 頭巾をかぶった女性と解釈されて「カプーシュ夫人」（*Dame à la capuche*）の名をもつ

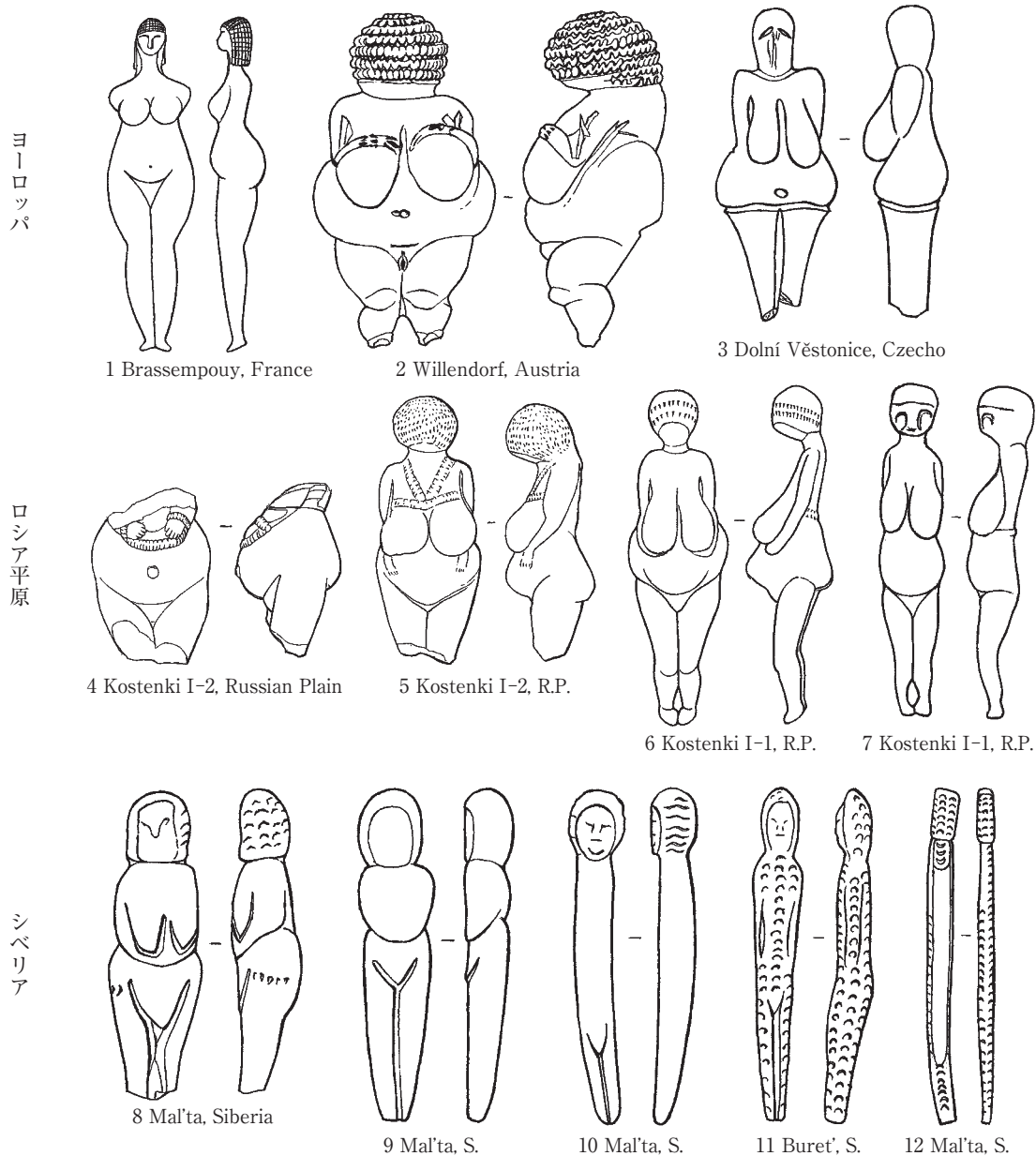


図2 ヨーロッパ, ロシア平原, シベリアの後期旧石器時代前半の代表的な立体女性像 (縮尺不同, 1は復元図)

象牙製の頭部破片(図版1-1)や、丸々とした乳房と尻が梨の形を連想させるところから「梨」(Le poire)の通称をもつ胸部破片(図版1-3)が著名である。

「カプーシュ夫人」の頭部の格子目の沈刻表現は「頭巾」とする見方もある。しかし、長く伸ばした髪を数百本単位で束ねて途中に団子のような結び目をいくつもつくったドレッド・ロックス(dread locks)の髪型の表現であろう。前髪は額の位置で終わり顔をおおうことなく、目・鼻を立体的に刻出しており、旧石器時代の女性像のなかではもっとも写実的な顔面表現となっている。

胸部および脚部の破片では、体形の表現は写実的であって、乳房の位置は高く、その形は丸く、

腹部まで垂れ下がっておらず、尻の形・大きさ、脚の形・長さも自然であって、旧石器時代の女性像のなかではもっとも美しいプロポーションをもっている。「カプーシュ夫人」の復元高は21cmの大型品である。腹部は、「梨」ともう1例では丸く突出している。乳房の下に横帯をめぐらせた状態を表現した例がある(4)。大型・中型品の一部(3・6)は妊婦をあらわしている可能性がある。

「カプーシュ夫人」の髪型はその後、簡略表現となってヴィレンドルフやコスチエンキ・アヴデーヴォの女性像に継承されるから、女性像の髪型はきわめて重要な構成要素といえる。

B類 高さ4.9cmの小型品(7)で、これだけでは妊婦をあらわしているとはいえない。細身で乳房の表現はないが、性的三角形の表現はある。

F2 レスピューグの女性像

フランス南西部のオート＝ガロンヌ県のレスピューグ(Lespugue)岩陰から1922年に出土した立体女性像である(図版1-9) [Saint-Perier 1922]。ギャンブルによると上部ペリゴール期、コーエンは前23,000年としているから、較正年代は29,500年前、グラヴェット期前半である。

マンモスの牙を研磨して仕上げた高さ14.7cmの大型品、全体の形はルロワ＝グーランのいうダイヤモンド形の典型を示している。これを立体形としてみれば、少し扁平な紡錘体であって、側方に著しく張った丸く巨大な尻が全高の中央に位置し、紡錘体の中心をここにおいている。巨大な乳房は腹部を完全におおうまで垂れ下がり、その上に細い前腕をのせている。乳房が著しく下垂している結果、胸部はきわめて薄くなっている。

髪は直毛状に表現し、頭の後だけでなく顔も完全におおっている。

背面には尻の下から始まり踵の上まで達する長い逆三角形の前垂れ状の浮彫りがある。その上縁は2本線で水平に区切り、三角形のなかを約10本の縦線で充填している。これについては、他には例がなく腰囊説やエプロン説がある。しかし、この浮彫りは、後面だけにあり前面から側面にかけては存在しないので、エプロン説は成立しない。また、上縁は尻の上にないので腰紐をしめることはできない。性器は完全に露出し、尻を覆っているわけでないので、腰囊説にも無理がある。

この位置に横帯をしめているとみることができる例は、チェコのドルニ＝ヴェストニツェとバヴロフに存在する。ただし、前者の5例のうち4例と後者の1例はレスピューグとちがって、横帯の表現は前から後ろまで全周している。しかし、関連がないとは断言できない。

この図像を理解するのに、この女性像全体の形態についてみると、乳房が異常に垂れ下がっているために腹部の面積がせまくなり、その直下の性的三角形すなわち陰阜が占める面積もせまくなっている。その一方、この女性像は上下対称に加えて前後対称を意識した特異な形態に仕上げている。女性像の前面の性的三角形を後面に移し拡大してあらわし陰毛まで表現して強調したとみるのも、一つの解釈である。ただし、そのばあいは、三角形の下端が脚先まで達して三角形が長すぎるのが難点である。また、陰毛を表現している女性像は、旧石器時代のユーラシアでは1例も見つかっていないという問題があり、この図像の解明は今後とも重要な課題である。

F3 ペチアレの女性像

フランスのドルドーニュ地方のペチアレ(Péchialet)洞窟から出土した女性像1点である(図版

1-10) [Delporte 1979]。ギャンブルは上部ペリゴール期？，デルポルトはマドレーヌ期とする。

象牙製，高さ6.0cmの小型品で，細身で体形は自然である。乳房の表現はなく，尻は丸い。ブラスンパイ B 類と共通するところがある。

F4 モンパジエの女性像

フランス中部のドルドーニュ県モンパジエ(Monpazier)から 1970 年に出土した石灰岩を研磨して作った女性像である(図版 1-11) [Clottes et Cerou 1970]。クロッテらによると，ペリゴール期という。

高さ 5.5cm の小型品で，丸い腹部と丸い左右の尻を極度に突出させているので，側面形はく字形を呈する。乳房は垂れ下がっているが腹部ほど突出しない。性的三角形の位置いっばいに縦長の楕円形を大きく彫って外陰部をあらわしている。旧石器時代の女性像で外陰部を露わに表現している例は，他にはヴィレンドルフ出土品があるだけで，きわめて珍しい。頭部の表現は球形に左右に 2 つの穴をあけて目を表現しただけの簡素なものである。クロッテらは，腹と尻の異常な突出からグリマルディ出土の 1 点と輪郭が類似していることを想起している。頭と乳房を省略するとセリエ例にも似ている。

F5 マス＝ダジルの女性像

フランスのトゥールーズ県のマス＝ダジル(Mas d’Azil)遺跡から 1888 年に発掘された女性像 1 点である(図版 1-14) [Piette 1895 : 142-143, Pl. IV, Delporte 1979]。マドレーヌ期という。

旧石器時代女性像で唯一の馬歯製，高さ 5.2cm の小型品である。上半身だけで下半身は彫っておらず，切歯の原形をとどめているので，未完成品の可能性がある。目鼻を立体的に表現し，乳房を長細く表現しているが，豊満さはない。

F6 シルイユの女性像

フランス中部のドルドーニュ県シルイユ(Sireuil)遺跡から 1900 年に出土した女性像 1 点である(図版 1-12) [Breuil et Peyrony 1930]。コーエンによると炭素 14 年代は前 25,000 年，較正年代は 31,500 万年前である。

不透明オレンジ色の方解石を研磨して製作した中型品で，頭部を欠損した現高 9.2cm である。両腕を前に差し出し，膝の位置で両脚を曲げた女性像としては異例の形状をもっている。ただし，フランスのロージュリー＝バス出土の線刻骨板(図版 12-178)の妊婦のように寝た状態におくと，この女性像は腕を上にあげ，両膝を立てていることになり，そのようにみたほうが理解しやすい。一定の写実性をもっており，やや上向きの小さな乳房と臍の凹みの表現もあり，肩までかかる髪の毛の表現も少しのこっている。腹部は丸く突き出しており，妊婦の表現と見ることもできる。性的三角形は自然な表現であって，強調はしていない。

他の多くの女性像が立位をあらわしているのに対して，シルイユ型は寝位をあらわしているところに形態上の決定的なちがいが生じていると考えたい。

F7 セリエの女性像

フランス中部のドルドーニュ県テュルザックのセリエ(Cellier)岩陰から 1959 年に発見された女性像 1 点である(図版 1-13) [Delporte 1959]。テュルザックの名で呼ばれることも多い。コーエンによると炭素 14 年代は前 22,000 年、較正年代は 29,000 万年前である。

不透明白色の方解石製、高さ 8.0cm の中型品である。セリエ例は、これまで、シルイユ例の側面形と重ねて上下を決め、頭部から上半身をつづけて形づくり両膝を曲げた状態をあらわしており、シルイユ例の退化形態と解釈されてきた。頭部の細かな表現はなく、突出した腹部から延びる先端が丸く尖っているだけである。両脚の間に下に向かって突きだした棒状の造形については男根説もある。しかし、膣から出産する赤ん坊の姿をあらわしているようにもみえる。この例ほどではないが、股間に短い突起をもつ縄文中期の山梨県釈迦堂遺跡の土偶は、出産の光景をあらわしたものと解釈されている [山田 2008: 129]。しかし、筆者は以上のような不自然な解釈をとらず、ドイツのホーレ＝フェルス例やヴァインベルク例を参考にして、上下・前後を逆にして、従来の脚を乳房、尻を腹、腹を尻とみて、細長い頭部と 1 本化した下半身をもつ女性像と理解したい。

11 グリマルディの女性像A～D類

イタリア北西部の地中海沿岸、フランス国境に近いグリマルディ(Grimaldi)洞窟群のうちマントン(Manton)洞窟から 1883 年に出土した女性像で、すべて研磨して仕上げた小型の石製品である(図版 2-15～27)。昔からよく知られているのは 7 点である [Reinach 1898, Piette 1902]。しかし、それら以外に 6 点出土していたことが後に判明している [Pales 1972, Bisson and Bolduc 1994]。いずれも小型品で大が 6cm、小は 2cm にすぎない。コーエンが示している前 22,000/17,000 (?) 年の炭素 14 年代の較正年代は 29,000～23,000 年前であるけれども、形態的な特徴はより古いことを暗示している。私は 30,000 年前頃と推定する。

乳房と尻が異常に突出した 1 例は、研究史のうえでは E. ピエットにより旧石器時代の人類の身体的特徴すなわち脂肪鬱結症 (steatopigous) を示す標本として扱われたことがある。

A 類 (15・16・18・19・20) 正面観は細身であるけれども、腹部が半球形に大きく突出し、尻も半球形に突出した例と、尻の突出が著しくない例がある。乳房はさほど大きくなく、性的三角形の表現は自然である。後頭部は尖り気味、目鼻の表現はない。この型式は 5 点ある。完形品でも高さは 6.1cm、4.7cm で、小型品である。15・16 は暗緑色の蠟石製、他も蠟石製品である。

B 類 (17・24・25) 17 は乳房の位置は低いが、頭部、乳房、腹部、尻とも自然な大きさと、女性像としては自然な形である。頭部の目鼻など細部の表現はない。メノウ色の蠟石製、高さ 4.9cm。

24 の「腕のない女性」(the armless lady) は高さ 6.76cm、25 の表面を赤色土でおおわれた「赤色の女性」(the ocher lady) は高さ 7.5cm。これらもこの型式に含めておきたい。

C 類 (21) 頭部だけの破片。目鼻をはっきり表現している。髪は格子目にあらわしており、ブラッサンパイと共通する。

D 類 (26・27) 装身具にした小型品である。

26 の「一対」(the couple) の名称をもつ例は、高さ 4.7cm、身体を背中合わせにした形にして、頭部に紐孔をあけている。片方は女性、他方は人ではなく獣と推定されている。

27の「双頭の女性」(the two-headed lady)の名称をもつ例は、高さ2.75cm、紐を通して垂下するために孔をあけた結果、頭が2つあるように見えるのであろう。

12 サヴィニャーノの女性像

イタリアのアドリア海の奥部、ポー川流域のサヴィニャーノ(Savignano)から1923年に出土した1点の女性像である(図版2-28)[Graziosi 1923]。ギャンブルは、伴出石器群を不明としている。

蛇紋岩製、高さ22cmの大型品である。頭部は尖った三角形に形づくっているが、乳房より下は写實的に作ってあり、はなはだ不釣り合いである。大きな乳房と膨らんだ腹部の位置は正常、性的三角形の表現も自然、尻の突出は少し強調しているが、頭部以下に不自然さは感じられない。腹部を正確に中位においたダイヤ形で、前後を入れ替えると乳房と尻が入れ替わる上下対称形になるように作っている。グリマルディA型と同様に、頭部は抽象的な表現ではなく、頭巾状の被り物がかぶった状況を、より抽象的にあらわしている可能性も考えてよいだろう。前腕の表現はあいまいで、左腕は乳房の上にのせているようにもみえるが、右腕ははっきりしない。

13 キオッツアの女性像

イタリアの半島基部ポー川流域のキオッツア(Chiozza)から1940年に見つかった女性像1点である(図版2-29)[Degani 1940, Graziosi 1943]。

石灰岩製、高さ20.3cmの大型品である。頭部は球形、乳房は低く長く垂れ、尻から脚にかけてはくびれが弱く、全体に研磨加工が不足しているために、鈍重な印象を与える。

14 トラシメネの女性像

イタリア中部のトラシメネ(Trasimène)湖畔の遺跡から1935年に出土した1点の蠟石製の女性像である(図版2-30)[Graziosi 1939]。女性像とも男根とも、あるいは両性具有ともされてきたものであるが、ドイツのヴァインベルク例との比較から、筆者は上下を逆にしたうえで女性像と認める。

方解石製、高さ3.4cmの小型品である。頭部は最初からなく、2つ並んだ半球形のふくらみで乳房をあらわし、その右横の高まりを腹部にあてているようである。素材の形状に規制されて左右非対称の形状になったのであろう。

ヴァインベルク、シルイユ、セリエ、トラシメネの女性像はいずれもグラヴェット期のなかでも古い年代を示しているので、抽象化した表現であることを理由にこの系列を新しいと考えることはできない。⁽²⁾素材に共通して方解石を選んでいることとあわせ、ドイツ、フランス、イタリアには、写實的に表現した系列と共存していたと考えるほかない。

2 ドイツ・オーストリア・チェコの女性像

この地域はドナウ川流域で、オーリニャック期までさかのぼるホーレ＝フェルス例やガイケンベルク例が出土し、立体女性像誕生の地の可能性がある。グラヴェット期では、ヴィレンドルフ例、ドルニ＝ヴェストニツェ例などヨーロッパの代表的な資料を出土している。別にヴァインベルク

例のような系列を異にする抽象的な女性像もある。

G1 ホーレ＝フェルスの女性像

ドイツのウルム近郊のホーレ＝フェルス(Höhle-Fels)洞窟から2008年に発掘された旧石器時代最古の女性像である。オーリニャック期、約40,000年前の女性像である(図版2-31)[Conard 2009]。

象牙製、高さ6.1cmの小型品である。頭はなく、その位置に半環状の小さな吊り手をつくりだしている。前に突きだした大きな乳房をもち、両腕は乳房を下からもちあげるかのような位置にある。尻は後ろに突き出していない。ふくらんだ腹をもち、逆台形に近い性的三角形の表現は顕著である。腕、腹や脚には横方向の線刻がある。単なる文様というよりも、彩色、入れ墨、そして帯の表現の可能性が強いだろう。

女性像の形態としてはマッシーヴさを感じさせるこの例が、現在のところ世界最古の女性像の位置を占めている。

G2 ヴァインベルクの女性像

ドイツ南部バヴァリアのマウエルン(Mauern)のヴァインベルク(Weinberg)洞窟から1948年に発見された例で、マウエルンの名で呼ばれることが多い(図版2-32)[Zotz 1955]。ツォッツが報告した炭素14年代を較正すると34,000年前、オーリニャック期末を示している。

石灰岩製、高さ7.2cmで、オーカーで赤く塗ってある。これまで左右2つの半球形の高まりを尻とみなし、やや長く太い上半身とひじょうに短く薄い下半身をもつトルソとする一方、半球形を睾丸の表現と解釈して男性器の表現とするS. ギーディオンのような見方がある。しかし、旧石器時代に睾丸まであらわした男性器の例は、他にはまったく例がない。

より古いホーレ・フェルス例を参考にして上下を逆さにすると、尻は乳房の表現になり、このほうが説得的であると筆者は考える。腹部の浅い凹みは陰門の象徴、薄い「頭部」は吊り手の名残りであろう。底面の凹みは肛門の表現であろうか。

A1 ガルケンベルクの女性像

オーストリアのガルケンベルク(Galgenberg)出土の結晶片岩製の人物像は「踊るヴィーナス」の愛称をもっている。炭素年代の較正年代は約38,000年前である。高さ7.0cm。扁平な人物像の右側の2つの突出部を、上にあげた左手と乳房とみればこれも女性像である(図版3-35)。

A2 ヴィレンドルフの女性像A～B類

オーストリア東部のドナウ川沿岸のヴィレンドルフ(Willendorf)遺跡の9層から1908年に見つかった女性像1点と1927年に見つかった1点である[Felgenhauer 1956-1959]。コーエンによると、炭素14年代は前24,000年、較正年代は30,500年前、オッテが1981年にしめしたヴィレンドルフⅡ遺跡の8層の炭素年代25,800年前を較正すると35,000～28,000年で、それより新しい8層直上の9層の年代を30,000年前頃と推定する。

A 類 旧石器時代の女性像のなかでは、レスピュグ例とならんでもっとも著名な一つである(図版3-38)。石灰岩製、高さ10.5cmの中型品。

頭部は松毬状の球形で、髪型は楔形の小さな刻みを上下から斜交い^{はすか}にいれ、それを連ねて鋸歯形(ジグザグ)にした同心円形の突線を正面では7段、後面では9段重ねて、頭の全面、顔にいたるまでおおいづくしている。ブラッサンプイでみたドレッド・ロックスの髪型が文様として変形したものであろう。目鼻の表現はない。腰の高さ近くまで垂下した巨大な乳房のうえに両肘の位置で曲げた前腕をのせる。手先は2本の沈線をいれて指をあらわし、細い前腕の両手首には鋸歯形(ジグザグ)の腕輪の形を彫っている。

胴は幅の割に短く、腹部の脂肪過多の表現は著しい。脚は太く短い。

性的三角形をあらわしたうえで外陰部を木の葉形に立体的に表現している。女性器をここまで写實的にあらわしているのは、旧石器時代の女性像ではこの例だけである。

B 類 石灰岩製、高さ19.0cmの大型品(図版3-39)。頭部は大きすぎ、上半身よりも幅が広い。両腕の表現も頭部、上半身、下半身とも彫刻が不十分であって、未完成品の可能性が強い。A類のような肥満体でないことは確かである。

C1 ペトルコヴィツチの女性像

チェコのオストラヴァ市にあるペトルコヴィツェ(Petrkovice)遺跡の住居跡から1952/53年に発掘された女性像1点である(図版3-37)[Klima 1955]。H. デルポルトやギャンブルはグラヴェット期とする。

石炭製で、現存高4.5cm、頭部と脚部を復元すると8~9cmほどの細身の中型品である。スマートな体形で、乳房は高い位置にあり、大きく垂れることはない。腹部と尻の突出は控えめであって、釣り合いのとれた女性像である。性的三角形は沈線で表現し陰裂も1本の縦線であらわしている。この型式は他に類例は知られていない。

年代はそれほど古いとは考えられていないが、形態的にはオーリニャック期のブラッサンプイやエリセーヴィツチの女性像に似ている。

C2 モラヴァニーの女性像

チェコのモラヴァニー(Moravany)遺跡から1930年に出土した1点の女性像である(図版3-40)[Barta 1972]。コーエンが示している炭素14年代を較正すると30,000年前である。

象牙製、現存高8.1cm。頭部は欠損、体形は自然である。大きな乳房は上腹部まで垂下、腹部は垂れているが、尻の突出は普通である。のちに取りあげるロシア平原のコスチェンキC類に近い。

C3 パヴロフの女性像A~C類

チェコのパヴロフ(Pavlov)遺跡は、ドルニ=ヴェストニツェ遺跡に近接するパヴロフ文化の標識遺跡で、1952年に女性像が3点出土している(図版3-41~43)[Klima 1957]。クリマが1957年に報告した炭素14年代を較正すると30,000年前、オツテが1981年報告したパヴロフII遺跡の2点の炭素年代を較正するとどちらも30,000万年前である。

A 類 1 点は完全品で高さ 5.1cm の小型品 (43)。頭部から上半身は一体化して作っており細部の表現はない。下半身は両脚をあらわす分割線はあるが、前か後ろかははっきりしない。

B 類 頭部の破片 (41) は現存高 2.0cm。列点を同心円状に 5 段めぐらせて髪をあらわし。目鼻の表現はない。

C 類 下半身の破片 (42) で土製品である。現存高 5.1cm。性的三角形の表現や尻の突出はない。尻の下に位置に、斜めの連続刻みをもつ太い帯をめぐらせている。

C4 ドルニ=ヴェストニツェの女性像A～E類

チェコのブルーノのドルニ=ヴェストニツェ(Dolní Věstonice)遺跡から 1924～1979 年に、粘土で造形したあとと窯で焼いた動物形の土製焼成品が大量に発掘されている(図版 4-45～69)[Absolon 1949, Klima 1957, Vandiver *et al.* 1990]。そのなかに、女性像が少なくとも 14 点(A 類)ある。K. アブソロンは、黄土を素材にしてマンモスの骨粉を混和材に使い脂肪を混ぜてこねていると報告したが、現在では動物質の混和材の使用は否定されている[清水 2010: 113～115]。他にマンモスの牙製の乳房をつけた棒状品 1 点(B 類)、二股のフォーク形 1 点(C 類)、乳房だけを単独に造形した装身具 8 点(D 類)、頭部だけを写實的にあらわした 1 点(E 類)が出土している。

クリマが 1957 年に報告した炭素 14 年代の較正年代は 30,500 年前、オッテが 1981 年に報告した 3 点の炭素 14 年代を較正すると 34,000 年前、32,000 年前、30,000 年前である。コーエンは次に示す A 類を前 24,000 年、D 類を前 23,000 年前としているので、較正年代はそれぞれ 31,000 年前、29,500 年前となる。

A 類 土製焼成品で破片を含めると 14 点以上出土している。高さ 11.5cm のほぼ完存している中型の 1 例(45)の頭部は突起状、両目をへ字形に配置しているが、鼻・口の表現はない。頭頂部に田字形に 4 つ施している刺突点は、髪をあらわしているのであろうか。他の頭部だけの破片には、目の表現はなく 4 つの刺突点だけの例、それも省略した例まである。頭部と目の表現は特異であって、抽象的にあらわしたとみるのが普通であるが、頭巾状のものをかぶっている状態をあらわしている可能性ものこしておいたほうがよいだろう。

正面から見ると上腕を表現しているが、前腕の表現はない。背面には尻の上に 2 本 1 対でへ字形の沈刻がある。背面を正面として見ると、この沈刻は上腕を下げ前腕を乳房にのせているように見え、正面からみたレスピュグ例に驚くほど近い。この型式では、前腕を背面にまわして尻の上にのせている状態に表現していることになる。背面の同様の沈刻は他に 2 例ある。

腹部の臍の位置にある穴は臍であろう。正面では腹部のすぐ下、背面では尻のすぐ下の位置を水平に太い沈線を 1 本めぐらせている。その結果、正面には性的三角形の表現がまったく存在しない。同様の表現は他に 3 例がある(49・56・58)。うち 1 例は 2 本の刺突文の帯で、同様の意味をもたせていたのであろう。この沈線はバヴロフ例を参考にすると、膨んだ腹の下にめぐらせた帯紐すなわち腹帯の表現であろう。なお、1 例だけは、この沈線の下に V 字形の沈刻をいれて性的三角形をあらわしている。

B 類 両端が鈍く尖った棒の中ほどに左右の乳房だけをつけた高さ 8.7cm の中型品(59)で、大きな乳房の表現は写實的といってもおかしくないが、頭から足の先まで 1 本の棒であらわすという

抽象的な表現は特異である。棒には、乳房の上方にも下方にも水平ないし傾斜した線を何本も彫り込んでいる。また、乳房の下縁には短線を並行に彫っている。この型式は、この1点が見つかっただけである。

C 類 左右の乳房だけを立体的にあらわし、背面に孔をあけた半環状の突起をつけた小さな装身具である (60～67)。左右の乳房の中間に上向きの短い突起をつけている。1例に、乳房の付け根に2本の沈線、下縁に何本もの刻みの短線を彫っているのは、帯の表現かもしれない。高さ2.3～0.5cm、幅2.8～0.7cmの大・中・小あり、一連にして使ったものであるらしい。B型の下半部を除き、上半部を短くすることによって、この型式は生まれたのであろう。この型式はこの遺跡の8点だけである。

D 類 両脚を開いたフォーク状、または人字形であって、頭部や乳房の表現はなく、高度に抽象化した女性像である (68)。高さ8.6cmの中型品で、上端に穿孔して垂下できるようにしている。この型式はこの1点だけである。

E 類 高さ4.7cmの頭部だけであるが、本体から剥落した頭部である可能性も想定して、一つの型式として設定しておく (69)。象牙製、面長の顔で、髪、目・鼻・口の表現は立体的かつ写実的であって、男性とみなされ、「先史時代のレオナルド・ダ・ヴィンチ」の愛称をもっているけれども、男性と断定できるほどの根拠は見いだせない。

ヨーロッパの女性像の変遷

以上に記述したヨーロッパの女性像を炭素14年代の校正年代と形態的な変化から5段階にわけて諸遺跡出土の女性像の位置づけを試みておく。年代はおおよそを示してある。

	フランス	イタリア	ドイツ・オーストリア	チェコ
40,000 年前				
I			ホーレ＝フェルス	
35,000 年前				
II	ブラッサンブイ		ヴァインベルク	ペトルコヴィッチ
32,000 年前				
III	シルイユ	グリマルディ	サヴィニャーノ	ドルニ＝ヴェストニツェ A 類
30,000 年前				
IV	レスピューグ	セリエ	ヴィレンドルフ	パヴロフ モラヴァニー
28,000 年前				
V		トラシメネ	ドルニ＝ヴェストニツェ B・C 類	

ここに例示した女性像は、それぞれ個性がつよく、1点だけで類例が他に知られていないとしても、1型式と認めて相互の関係を追究していくのが賢明であろう。すなわち、ホーレ＝フェルス型、ブラッサンブイ型、サヴィニャーノ型と型式名称を与えることにしたい。

このように編年してみると、ヨーロッパでは次のような傾向を指摘することができる。オーリ

ニャック期までさかのぼるⅠ段階のホーレ＝フェルス型は頭部を作りださず乳房とふくらんだ腹部をもつ女性を象徴的に表現していたのが、Ⅱ段階になると、より簡略化して乳房をもって女性を象徴的にあらわしたヴァインベルク型になり、そのあとⅢ段階のシルイユ型、Ⅴ段階のトラシメネ型と数は少ないが、その系統をグラヴェット期の終わり近くまでたどることができる。

ブラッサンパイ系統は、ホーレ＝フェルス系統に遅れて出現する。頭部、大きな乳房、大きくふくらんだ腹部、性的三角形の表現、突出した尻が著しい特徴であって、一定の写実性をもっている。Ⅱ段階のブラッサンパイ型や、ペトルコヴィッチ型では乳房は半球形に近く胸の位置にあって高く、垂れていない。しかし、Ⅳ段階のレスピュグ型になると巨大化した乳房は尻の位置までさがってくる。そして、ドルニ＝ヴェストニツェ B～D 型がこの段階あたりにくるとすれば、棒状の胴部に乳房だけをつけたり、フォーク状にしたり、乳房だけにしたりして、完全な女性像から遠ざかっている。腕の表現は腕の位置は、Ⅲ～Ⅳ段階には、上腕を下にさげ前腕を肘で曲げて乳房の上に両手をおくのが主流である。装身具の着装は、Ⅱ段階のブラッサンパイ型に腹帯の着用が認められ、Ⅳ段階のヴィレンドルフ型に腕輪、ドルニ＝ヴェストニツェ A 型に腹帯が多く示されている。後者では、腹帯は下腹部から尻の下にまいている。女性像の大きさは、Ⅱ～Ⅴ段階までは比較的中型品が多く、Ⅰ段階以来、小型品も併存している。

以上のように整理すると、ヨーロッパではグラヴェット期の女性像はⅢ～Ⅳ段階をピークにしてその後は衰退し、年代的にはグラヴェット期中頃、28,000 年前頃に女性像の歴史は閉じていることを認めなければならない。

3 ロシア平原の女性像

この地域はドン川とデスナ川の流域付近で、コスチェンキ、ガガリーノ、アヴデーヴォ、エリセーヴィッチが代表的な遺跡で、1 遺跡あたりから出土した女性像は豊富である。コスチェンキ遺跡群の石器群は、Ⅰ遺跡 5 層→オーリニャック期→Ⅳ遺跡 2 層→Ⅰ遺跡 1 層→Ⅷ遺跡 1 層の順に編年され、Ⅳ—2 層～Ⅰ—1 層・アヴデーヴォがグラヴェット期併行、Ⅷ—1・エリセーヴィッチがソリュートレ期併行と G. ボジンスキーは考えている [Bosinski 1990 : 6]。

R1 コスチェンキⅠの女性像A～D類

コスチェンキ(Kostenki)遺跡はドン川の西岸にあり、1879 年の最初の発掘以来、S.N. ザミャートニン、P.P. エフィメンコらによって発掘がつづけられた。文化層は 5 層からなる。1 層のⅠ号住居跡から出土した完全品から小破片まで象牙製品 63 点、石灰岩製 1 点の女性像が 1958 年の P.P. エフィメンコの報告によって著名であった(図版 5-73, 図版 6-74～78, 図版 7-83～88) [Efimenko 1958]。その後、1987 年に隣接するⅡ号住居跡の発掘によって大型精巧な石灰岩製など 3 点の女性像がさらに加わった(図 3)(図版 5-70～72) [Praslov 1993]。それ以外にも 4 点以上の出土があり、小破片もすべて 1 点と数えると、この遺跡からは 70 点以上の出土をみている。ボリスコフスキーが 1984 年に報告したコスチェンキⅠ遺跡の炭素 14 年代を校正すると、29,000 年前、29,000 年前、28,000 年前、27,000 年前、26,000 年前があり、年代幅が存在するようである。コーエンはⅠ号およびⅡ号住居跡出土の女性像の炭素 14 年代を前 22,700 年としているので、校正年代は 30,000 年前、

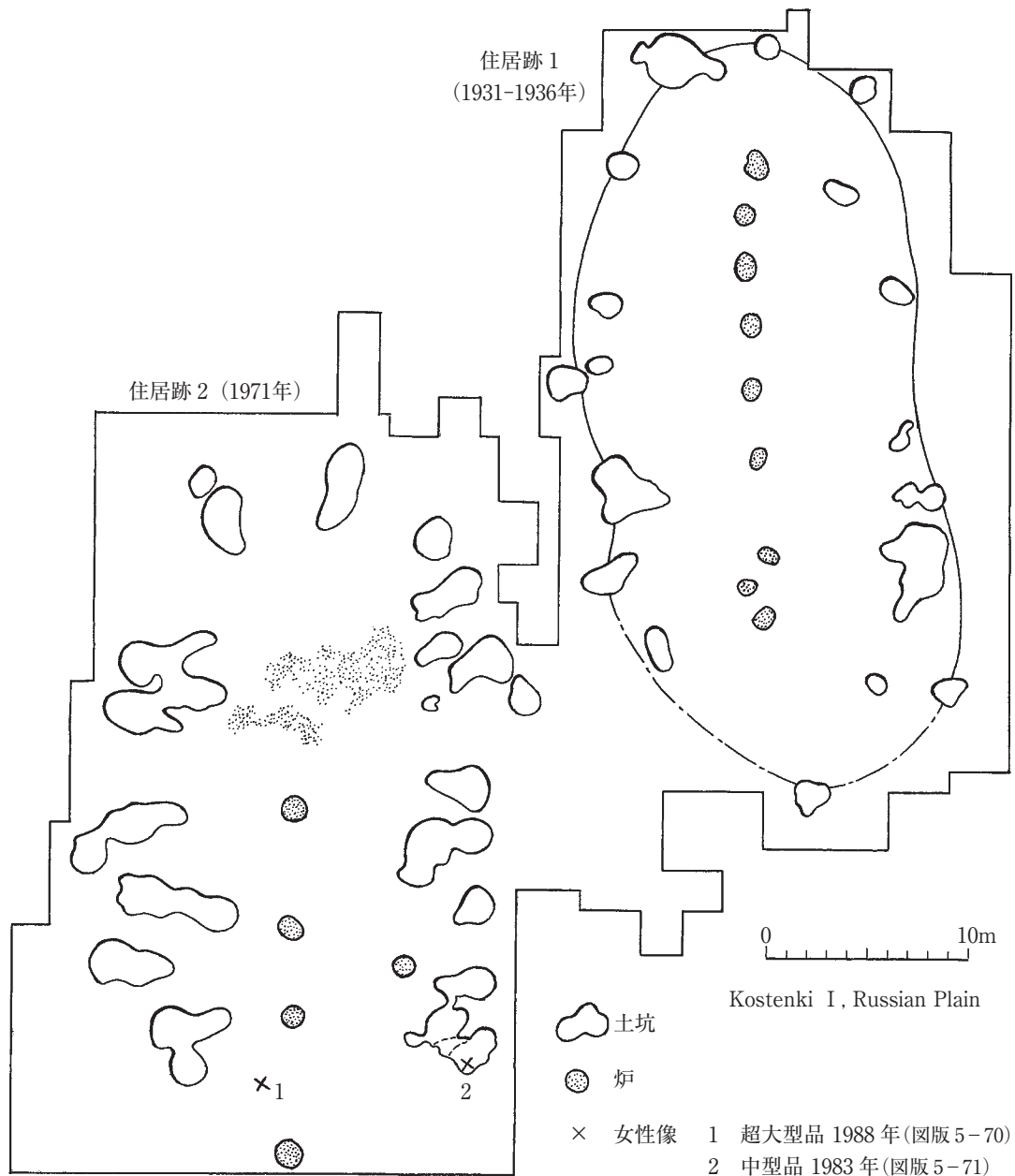


図3 コスチェンキ I 遺跡の住居跡 1・2 と女性像の出土位置[Praslov 1993]

グラヴェット期前半である。

A 類 コスチェンキ II 号住居跡から出土したもっとも写実的な 1 点である (70)。石灰岩製で、頭部から乳房の個所は欠失している。手首に腕輪をつけ、両手首を 1 本の帯でつないで捕縛している状態を忠実に表現している。帯は編んで作っているようである。胴は短い。腹部は大きく丸く張り臍はとびだし、臨月の女性をもっとも写実的にあらわしているといえる。性的三角形の表現も自然である。復元高 35cm の超大型品である。

B類 同じくコスチェンキⅡ号住居跡から出土した写實的な1群である。1点は石灰岩製で、高さ16～17cmの中型品である(71)。

頭部は、前方に突き出した球形で、顔面から後頭部まで刺突文状の点列でおおっており、目鼻口耳の表現はない。乳房の下に前腕から手をさげている。乳房の上の位置で2本の帯を背中までまわし、その帯を胸も背中も別の帯でV字形に吊っている。帯は編んで作っているようである。胴は短い。腹部は大きく丸く張り、妊娠中の女性を写實的にあらわしている。性的三角形の表現は自然である。足先は欠失している。

コスチェンキⅠ号住居跡から出土した石灰岩製、高さ17.6cmの未完成大型品(73)もこの類に含まれるだろう。そうであれば、Ⅱ号住居跡とⅠ号住居跡との年代差は、それほど大きくないことになる。

なお、石灰岩製の頭部の高さだけで7.4cmを測る破片がある(82)。顔に相当する個所を一部だけのこして、のこり全面に格子文をていねいに彫って髪をあらわしている。これを、他と同じ体形として復元すると高さ40cmに達する巨大な超大型品である。旧石器時代の女性像は小さいというイメージを一変させる例であって、他の小・中型品とは使い方がちがうのであろう。

象牙製の小型品(72)は高さ4.6cm、背中にX字形に襷かけし、胸は不鮮明であるが、乳房の上の位置に水平に帯をしめ背中にまわす一方、頸からV字形に吊っているようである。頭部は、髪と顔の間に段をつけて目を彫った顔を表現している。

C類 コスチェンキⅠ号住居跡から出土した一群で数は多い。いずれも、象牙製品で、復元高で示すと18～12cmの大型～中型品である。B類にくらべると肩幅がせまく、胴は少し長くなり、乳房は著しく長く垂れている。

両手を乳房の下で合わせた例、両手の先は不鮮明におわる例がある。両手首を帯でつないだ状態の表現があいまいになっているのだろう。手首に腕輪を表現しているのは1例だけである(75)。乳房の上の位置に水平にしめた帯を背中まで水平にまわした例(74・75)、尻の上の位置に水平に帯をしめた例(74・75)、頸から胸にV字形に帯をあらわし、その帯を後ろは頸にかけ一方、尻の上の位置に水平に帯をしめた例(77)がある。垂れた乳房の下に水平にしめた帯は省略したのであろう。帯には刻み目の表現があるから編んで作っているのであろう。腹部は大きく丸く張りだし、尻は幅広いが突出度は小さく、やや垂れ気味である。性的三角形は大きな腹部の下で目立たない。頭部は、前方に突き出した球形で、顔面から後頭部まで刺突文状の点列を2～3周めぐらせており、目・鼻・口の表現はない。

D類 コスチェンキⅠ号住居跡からは他に女性器だけの造形品が7点出土している(図版11-146～152)。石製の磨製品で最大例が高さ3.8cm、幅5.6cm、厚さ2.4cm、最小例は高さ2.4cm、幅3.2cm、厚さ1.8cm、平面は半楕円形で直線形の底面にかかる個所に縦長の半円形の凹みを設けて陰門をあらわし、側面形は山形をなしている。P.P. エフィメンコやZ.A. アブラモワは陰門を上にもっていき、A. ルロワ＝グーラン、G. ボジンスキーやA. マーシャックは陰門を下にもっていく。私は岩壁画との比較から後者が妥当と考える。女性器だけで女性像とは言にくいけれども、ドルニ＝ヴェストニツェの乳房だけの立体像を女性像として扱ったので、これも女性像の極端な省略形として扱い、D類としておきたい。

R2 コスチェンキⅧの女性像

コスチェンキⅧ遺跡はコスチェンキⅠ遺跡近くのテリマンスカヤにある遺跡で女性像が1点出土している（図版7-89）[Plaslov *et al.* 1982]。コスチェンキⅧはソリュートレ期前半と併行し、炭素14年代は前18,000年、較正年代は23,000年前であって、後期旧石器時代後半に属する唯一の例である。

マンモス牙製、現存高7.6cmの中型品である。頭部は欠損、乳房は胸の高い位置に小さく表現し、両腕は乳房の下、腹部の上位におき、腹部は大きく突出し、膝はつよく曲げている。座った状態または寝て膝を立てた状態をあらわしている点で、コスチェンキⅠ遺跡のすべての女性像と大きく異なる。

R3 ザライスクの女性像A～B類

ザライスク(Zaraisk)遺跡はドニエプル川とドン川にはさまれた地域にあり、2005年の発掘で2点の女性像が出土している（図版7-90・91）[Amirkhanov 2007]。

A類 肩幅と腰の幅の差が小さく、肩幅の広いがっしりした女性の印象を与える。乳房の表現は微弱である。コスチェンキ例が脚を閉じているのに対して、この類では脛から下は完全に開いているのが大きな違いである。アヴデーヴォB類と同じ型式である。象牙製、高さ17.3cmの大型品である。

B類 象牙の先端近くを利用して、頸の凹み、後頭部から肩への凹みと尻から大腿部への凹みをつくることによって女性をあらわしているけれども、おそらくアヴデーヴォ例のような女性像の未完成品であろう。高さ7.3cmの中型品である。

R4 ガガリーノの女性像A～D類

ガガリーノ(Gagarino)遺跡はドン川の東岸にあり、1927～1968年の間の5回の発掘で10点の女性像が出土している（図版8-92～99）[Tarasov 1979]。ボリスコフスキーが1984年に報告した炭素14年代を較正すると35,000年前と26,000年前である。

A類 腕を肘の位置でくるりと曲げて乳房の上にのせ、前腕は上に向けている（94）。1例だけである。乳房は大きく、腹部と尻も大きく膨らんだ女性像である。髪は自然にカールした状態に表現しており自然である。両脚は膝から下が開いている。高さ5.7cmの小型品。

B類 大きな乳房が垂れ下がり、両腕は前腕が乳房の下に隠れた状態である（93・98）。肩幅は広く、腹部と尻も大きくふくらんでいる。両脚は膝から下を広げている。1例は復元高9cmの中型品、もう1例は高さ12.7cmの中型品である。1本の素材から2点を製作中に放棄した長さ14.7cmの1点（99）もこの類にいる。

C類 長身でやや細身、乳房は大きく腹部にかかる位置まで垂れている。腹部と尻は十分に張っている（92）。高さ7.2cm、B類を細身にした型式である。

D類 乳房と腹部が一体化し、それにやはり左右の脚が一体化した下半身がついた復元高6.4cmの小型品である（95）。

R5 アヴデーヴォの女性像A～B類

アヴデーヴォ (Avdeevo) 遺跡はデスナ川とドン川にはさまれた地域にあり、1948～1949年のヴォエヴォドスキーとロガチェフの発掘で8点の象牙製の女性像が出土している (図版8-100～104, 図版9-105～107) [Abramova 1967]。ボリスコフスキーが1984年に報告した炭素14年代を較正すると27,000年前, 25,000年前, 24,000年前, 23,000年前, 22,000年前, 20,000年前などである。コーエンは炭素14年代を前20,000年としているので、較正年代は26,000年前である。

A類 コスチェンキC類に等しいが、高さ9.8cmで少し小さい(101)。巨大な乳房に短い腹部をもついかにも豊満な1例も、この類に含まれる(107)。1点の未完成品(104)はA類であろう。

B類 ガガリーノC類と相似形であるが、尻の突出はほとんどなくなっており、扁平である(100)。高さが17.0cmの大型品である。

C類 A類を扁平にして腰の幅もせまくなり、全体に萎縮した形態である(102)。

D類 肩幅と腰の幅の差が小さく、肩幅の広いがっしりした女性の印象を与える(105・106)。乳房の表現はほとんどないか、まったくない。コスチェンキ例が脚を閉じているのに対して、この類では脛から下は完全に開いているのが大きな違いである。象牙製、高さ17.3cmの大型品である。

R6 ホティリョーヴォの女性像A～B類

ホティリョーヴォ (Khotylevo) 遺跡はモスクワ南方のクリミヤにあり、1967年以後の発掘で2点の象牙製の女性像が見つかった (図版9-108・109) [Soffer 1987]。O. ソファーが1985年に示した炭素14年代の較正年代は30,000年前, 28,000年前がある。

A類 高さ6.8cmの小型品(108)。背中を丸め、巨大な腹部が下に垂れ、著しく変形した体形をもっている。

B類 復元高12.5cmの中型品(109)。頭部は極端に小さく、乳房と尻の位置はほぼ同じ高さまで下っており、これも形態的には異様である。フランスのレスピュグ例の影響があるのかもしれない。

R7 エリセーヴィッチの女性像

エリセーヴィッチ (Eliseevitchi) 遺跡はデスナ川の西岸にあり、1935年の発掘で1点の女性像が出土している (図版9-110) [Polikarpovich 1940]。Z.A. アブラモワが1967年に記した炭素14年代の33,000年前を較正すると38,000年前である。なお、文化期として設定されているエリセーヴィッチ期 [Bosinski 1990: 79] はソリュートレ期後半で、24,000年前である。

マンモス牙製、現高17.8cm、復元すれば21cmの大型品である。全体形は頭部を欠失、上半身と下半身は4対5の割合で均整がとれている。上半身は細身で乳房の位置は高く、下半身は脚が太く、尻から大腿部は後ろに大きく突出、膨ら脛は幅広く後ろに大きく膨らみ、全体はどっしりとしている。腹部のふくらみはわずかで横への張り出しはまったくない。性的三角形の表現は簡素である。この型式に属する例は他に知られていない。

ロシア平原の女性像の変遷

以上に記述したロシア平原の女性像を形態的な変化から7段階にわけて諸遺跡出土の女性像の位置づけをしておくことにしよう。ホティリョーヴォの2点は変形度が大きいので判断が難しいが、Ⅲ～Ⅳ段階あたりを考えておきたい。

ロシア平原

38,000 年前

I エリセーヴィッチ

30,000 年前

II コスチェンキ A 類

III コスチェンキ B 類 ガガリーノ A 類 ホティリョーヴォ

28,000 年前

IV コスチェンキ C 類 ガガリーノ B 類 アヴデーヴォ A 類

V アヴデーヴォ B 類

25,000 年前

VI アヴデーヴォ C 類 ザライスク

23,000 年前

VII コスチェンキ VIII

こうしてみると、次のような変化の傾向を指摘することができる。I 段階は女性を概念化して形式的に表現していたのが、II～IV 段階には写実的になり装身具の着装まであらわしている。ところが、V 段階になると乳房は扁平になり、尻の突出もなくなり、全体が扁平化する。そして、VI 段階では身体の厚みは戻るけれども、乳房の表現を省略して、女性像から遠ざかっている。腕の位置は、II～V 段階を通して、乳房の下に両手を近づけるようにして下げるのが主流で、稀に乳房の上に置いている。後者は東ヨーロッパの影響である可能性が強いだろう。乳房と尻の位置が等しいホティリョーヴォ例も、レスピューグ例との類似からヨーロッパの影響を想定することも可能であろう。大きさは、I～III 段階までは比較的大型品が多く、III 段階に小型品が現れ、IV 段階で中型品が主流になっている。IV 段階のアヴデーヴォ A 類とコスチェンキ C 類は、互いに類似度のきわめて高いものを含んでいる。また、アヴデーヴォ B 類とガガリーノ C 類との間にも同じような例がある。女性像の姿形がある集団から別の集団に伝わるさいに、ある集団の特定の人が製作した女性像が他の集団に運ばれ、新たに製作するときのモデルになったことや、製作する人が動いて製作したことがあったのかもしれない。

以上のように整理すると、女性像はロシア平原ではオーリニャック期に現れ、グラヴェットーコスチェンキ期に発達するが、III・IV 段階をピークにしてその後は衰退すること、年代的には、コスチェンキ VIII の年代を尊重するならば、ヨーロッパよりは少し遅れてグラヴェット期末、23,000 年前頃に終焉を迎えることを看取できる。

4 シベリアの女性像

この地域はロシア平原から東に約4,000km, バイカル湖西岸イルクーツク近くのマリタ遺跡とブレティ遺跡だけから女性像の発見が知られている。しかし、マリタ遺跡の女性像の資料は豊富である。

S1 マリタの女性像A～E類

マリタ (Mal'ta) 遺跡はアンガラ川の北岸にあり、1928～1957年のM.M. ゲラシモフの発掘で住居跡が重複して多数検出され、住居跡から出土した女性像は28点に達している(図4)(図版10-111～128, 図版11-129～138) [Gerasimov 1931, Abramova 1967]。コーエンはマリタ遺跡の女性像に炭素14年代の前20,000年前をあてている。較正年代は26,000年前である。ただし、多数の女性像には型式変化がみられるので、年代幅をもっていることは確かである。

マリタ遺跡の女性像は頭部だけのこっていた1例、抽象化が進んだ2例が大型品で、のこりは小型品または極小型品である。これらを分類するとA類～E類まであり、A類→B類→C類の順に身体各部の簡略化が進んでおり、型式変遷を認めることができる。マリタ遺跡の利用期間のおそらく断続的な長さを反映しているのであろう。上限は26,000年前より古く、28,000年前までいくだろう。

A類 頭の表現がある。一見、頭巾をかぶっているようにみえるが、コスチェンキ型の髪の毛の表現を参考にしてみると、それが変化したものであり、波状の並行線で表現した髪である。乳房は扁平化しており、両腕は乳房の下においている。性的三角形の表現はある(112～120)。

B類 髪をもつ頭の表現はある。乳房の表現はなくなるが両腕の表現はのこっている。性的三角形の表現はある(121～127)。

C類 髪をもつ頭の表現はある。しかし、乳房と両腕の表現はなくなり、こけし形になっている。性的三角形の表現はある(128)。

D類 細身で前面、背面ともに顔面を除く全面に横方向の短い線を多数重ねている一群である(134～137)。シベリアの寒い環境でのフードつきの上下つなぎの防寒衣をきた姿をあらわしていると解釈されるのが普通である。しかし、筆者はヨーロッパ・ロシア平原・シベリアの女性像の流れを通観して、髪の毛の表現が拡大して一見着衣のようにみえるのであって、これらも服を着けていない裸体をあらわしていると考ええる。

E類 抽象化が進んだ棒状品で長さ21.2cm, 幅1.6cmある(138)。人の頭や性的三角形の表現がないので、これまでは蛇をあらわしているともいわれてきた。一端にくびれをつくって頭にしている。頭の全面と片面全面に下開きの爪形文を重ねて2列の文様帯をつくっている。反対面は頭の下に爪形文を3つ重ねてその下は無文、最下にまた爪形文を施している。こちらの側を正面と私はみる。爪形文は、マリタ遺跡の他の例とブレティ遺跡の例にある「着衣」の女性像が変化したものと解釈し、女性像として扱うことにしたい。

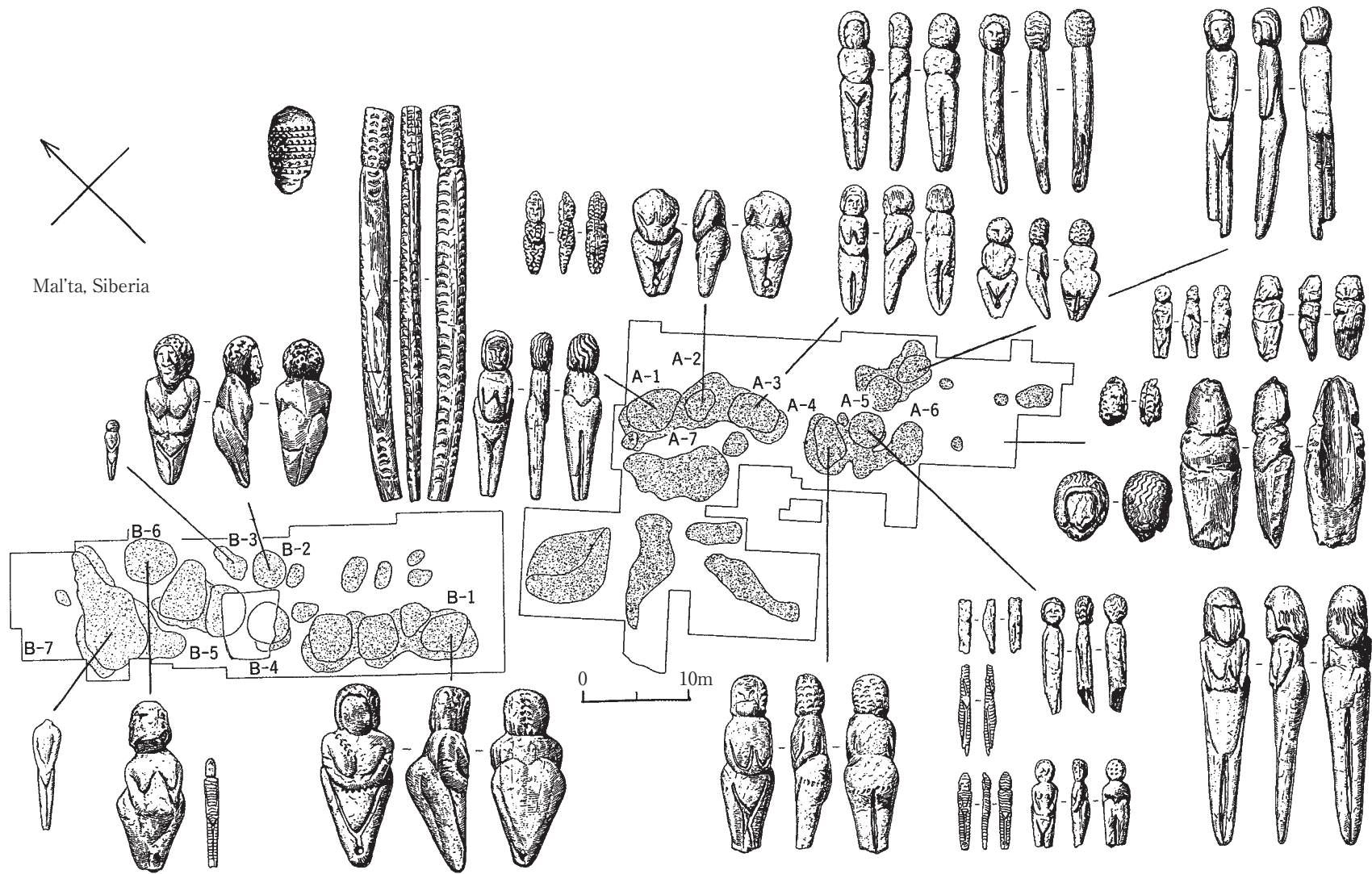


図4 マリタ遺跡の住居跡群と女性像の出土位置 ([Abramora 1962, 木村 1997] を改変)

S2 ブレティの女性像A～B類

ブレティ(Buret')遺跡は、マリタ遺跡と同じくアンガラ川の流域に所在する遺跡で、1936年の発掘で5点の女性像が出土している(図版11-139～143)[Okladnikov 1941,1960, Abramova 1967]。その特徴は、マリタ遺跡の女性像と重なることが多い。

A類 乳房の表現を欠き、その下の両腕のところに段をつけている(139・142・143)。マリタB類に近い。性的三角形は中型品の1点になく、小型品の2点にある。小型品の1点は高さ4.3cm、幅0.6cmである。

B類 細身で顔面以外は全面にわたって下を開く爪形文を施している(141)。乳房の表現はないが、性的三角形はあらわしている。両腕は身体の側に下げている。高さ12.3cm。マリタD類に類似し、それを大型化した形態である。

シベリアの女性像の変遷

以上に記述したシベリアの女性像を形態的な変化からマリタ遺跡とブレティ遺跡の例を5段階にわけて位置づけをしておくことにしよう。

シベリア

28,000年前

- I マリタ A類
- II マリタ B類 ブレティ A類

26,000年前

- III マリタ C類
- IV マリタ D類 ブレティ B類

25,000年前

- V マリタ E類

このように並べてみると、シベリアでは次のような変化の傾向を指摘することができる。I段階は頭部だけであるが、ロシア平原・ヨーロッパと共通するドレッドロック型の髪をあらわしており、ロシア平原の影響下にシベリアの女性像が始まったことを示している。II～III段階の女性像には乳房と性的三角形が組み合わさって成人女性であることを強調している。しかし、乳房のふくらみは微弱である。II段階には頸から腹部にかけて帯をつけている状態をあらわしている例があり、これもロシア平原との関係を示唆している。しかし、IV段階になると乳房は扁平になり、尻の突出もなくなり、全体が扁平化する。そして、VI段階では棒状になり、乳房の表現を省略して、女性像から遠ざかっている。しかし、性的三角形だけは最後までY字形に彫ってあらわしている。腕の位置は、II～V段階を通して、乳房の下に両手を近づけるようにして下げている。ロシア平原の影響と考えてまちがいないだろう。大きさは、高さ5～10cm大の小型品が多い。

マリタとブレティからの出土品のなかに、両脚の付け根付近に穿孔して垂下できるようにしたものがある。その位置からすると、ロシア平原のコスチェンキやアヴデーヴォから出土した女性像の

脛の間にあけたレンズ形の孔を円形の孔に変えたものであろうから、この点もロシア平原からシベリアへの女性像の伝来を示す証拠となる。

以上を整理すると、シベリアはロシア平原から女性像に関する情報が伝わって、26,000 年前頃に女性像を作り始めるが、ロシア平原でも衰退期にはいりかけたⅣ段階のものであったために、乳房はかろうじてふくらみをもつが扁平化しており、そのあと沈線による表現に変わる。そして、まもなく乳房の表現はなくなり、乳房の下にあらわしていた両腕の表現が段になってのこる。最後には、その段の表現もなくなり Y 字形の性的三角形だけがのこる。しかし、頭と髪、目鼻口の表現だけは最後まである。シベリアでもマリタープレティ期のうちに女性像が衰退する傾向をはっきりと認めることができる。終焉の年代は 23,000 年前頃で、ロシア平原とほぼ同じ時期であろう。

5 日本の女性像

東アジアではこの時期の女性像は日本からそれらしいものが 1 例見つかったに過ぎない。

J1 岩戸の女性像

大分県岩戸遺跡から 1967 年に出土した石製品である（図版11-144・145）[芹沢 1975]。始良火山灰層の直上からの出土であるので、較正年代は約 25,000 年前であろう。

長さ 9.6cm の結晶片岩製である（145）。コケシ形で、頭部の目と鼻・口の位置を敲打して凹め、後頭部には髪を敲打して表現していると報告者の芹沢長介は観察し、シベリアのマリタ例などと比較して女性像と主張している。しかし、目・口・髪表現はそれほど明瞭なものではない。他に加工痕のある結晶片岩の破片（144）が 2 点出土しており、芹沢は女性像の未完成品とみなしている。

完成品の 1 点には乳房や女性器の表現はないので、女性像と断定するのは躊躇させる。他にありうる可能性は男根の表現である。日本列島の後期旧石器時代には明らかな男根形石製品が千葉県升形遺跡と東京都武蔵関遺跡から出土している [春成 2007: 158]。しかし、それらは亀頭のふくらみをあらわしておらず、コケシ形ではない。消去法によって岩戸例を女性像とするならば、それに先行する具象的な女性像が日本列島にも存在することを予想しなければならない。

6 後期旧石器時代前半の女性像の型式変遷

ユーラシアの後期旧石器時代の女性像を瞥見しその年代を考慮しながら段階的な位置づけを試みた（図 5）。1 型式 1 点の場合が少ないのは、この時代の女性像が個性に富んでいることのほか、本来存在した多数の女性像のうち、私たちが得ている資料はごく一部にすぎないという事情がかかわっているであろう。

女性像の起源

女性像の起源について考えてみよう。現在知られている女性像のなかでは、オーリニャック期、約 40,000 万年前までさかのぼるドイツのホーレ＝フェルス例が最古であって、高さ 2.5cm のライオンマンと覚しき超小型品と水鳥の小像を伴っている [コナード 2006]。フォーゲルヘルト洞窟でもマンモス、野馬、ライオンの小像のほか、高さ 6.9cm のライオンマンの小像が発掘されている。

ホーレンシュタイン＝シュターデル洞窟発見の高さ28.1cmのライオンマンの超大型品の存在を参考にとすると、ライオンマンは動物界の頂点に立つ偶像として、女性像とは異なる文脈で使用の場をもっていた可能性がある。ここでは動物のなかの人という存在である。ドイツのガイセンクレステレ(Geißenklosterle)からは性不明の人物を浮き彫りにした高さ3.8cmの小さな牙板が出土している(図版3-34)。女性像はいつ出現してもおかしくないような、出現前夜の状態である。ガイセンクレステレの人物像を独立させると、オーストリアのガルケンベルクの「踊るヴィーナス」が誕生する。

このように現在の資料で判断するかぎり、旧石器時代女性像誕生の地は中部ヨーロッパということになる。ただし、型式学的にみると、ホーレ＝フェルス型を継承したのは、ヴァインベルク(マウエルン)とトラシメネの女性像とみられる。この系譜と関係するかどうかははっきりしないが、シルイユ、セリエから出土した寝位をあらわしていると筆者がみる女性像がある。ホーレ＝フェルス型の系譜は、後期旧石器時代前半には細々とつづいていた可能性がある。

その一方、ヴィレンドルフやレスピューグの女性像は、ホーレ＝フェルス型の延長線上に位置するとは考えにくいので、別の系列の存在を考えざるをえないだろう。そこで年代的にもっとも古いブラッサンブイの女性像が別系列の女性像の出発点になっていると私は推定する。「カプーシュ夫人」の高い写実性は、フォーゲルヘルトの写実的な動物像の表現を想うと、驚くに当たらない。ブラッサンブイをそのように位置づけるならば、西ヨーロッパにおける女性像の誕生地はフランス西部が有力候補になるだろう。

問題は、ブラッサンブイの女性像に形態的に近いチェコのベトルコヴィツェとロシア平原のエリセーヴィッチの女性像である。

ベトルコヴィツェ例は、細身で体形は写実的である。乳房の位置も高く尻の位置とも釣り合いがとれている。年代は中部ヨーロッパのヴルムⅡ／Ⅲ亜間氷期とされるので、グラヴェット期の他の女性像と並べて古いとはいえない。

エリセーヴィッチ遺跡の遺物群を基準にして設定されたエリセーヴィッチ期の年代は21,000年前という。しかし、エリセーヴィッチ遺跡には33,000年前という炭素14年代の測定値があることをZ.A. アブラモワは紹介している。この女性像の形態がチェコのドルニ＝ヴェストニツェ例やロシア平原のコスチェンキ例の後ろにくることは、型式学的にとっても考えにくい。また、メジン遺跡の女性像の前にくるものでもない。私は、エリセーヴィッチの女性像はコスチェンキの女性像よりも古い型式と考え、ロシア平原最古の女性像と位置づけておきたい。

この推定があたっているとすれば、フランス、チェコ、ロシア平原のオーリニャック期の中頃、約38,000年前に、ホーレ＝フェルス型とは別系譜の女性像が出現していることになる。

女性像の変遷

女性像誕生後のヨーロッパ・ロシア平原・シベリアの女性像の変遷と地域的な変化についてみていきたい。

ヨーロッパでは、乳房の上に細い前腕をおいている例がレスピューグやヴィレンドルフの女性像に認められる。他の女性像では、上腕だけで前腕をあらわしていない。

ロシア平原では、エリセーヴィッチの女性像を最古と位置づけると、その後の変遷については、

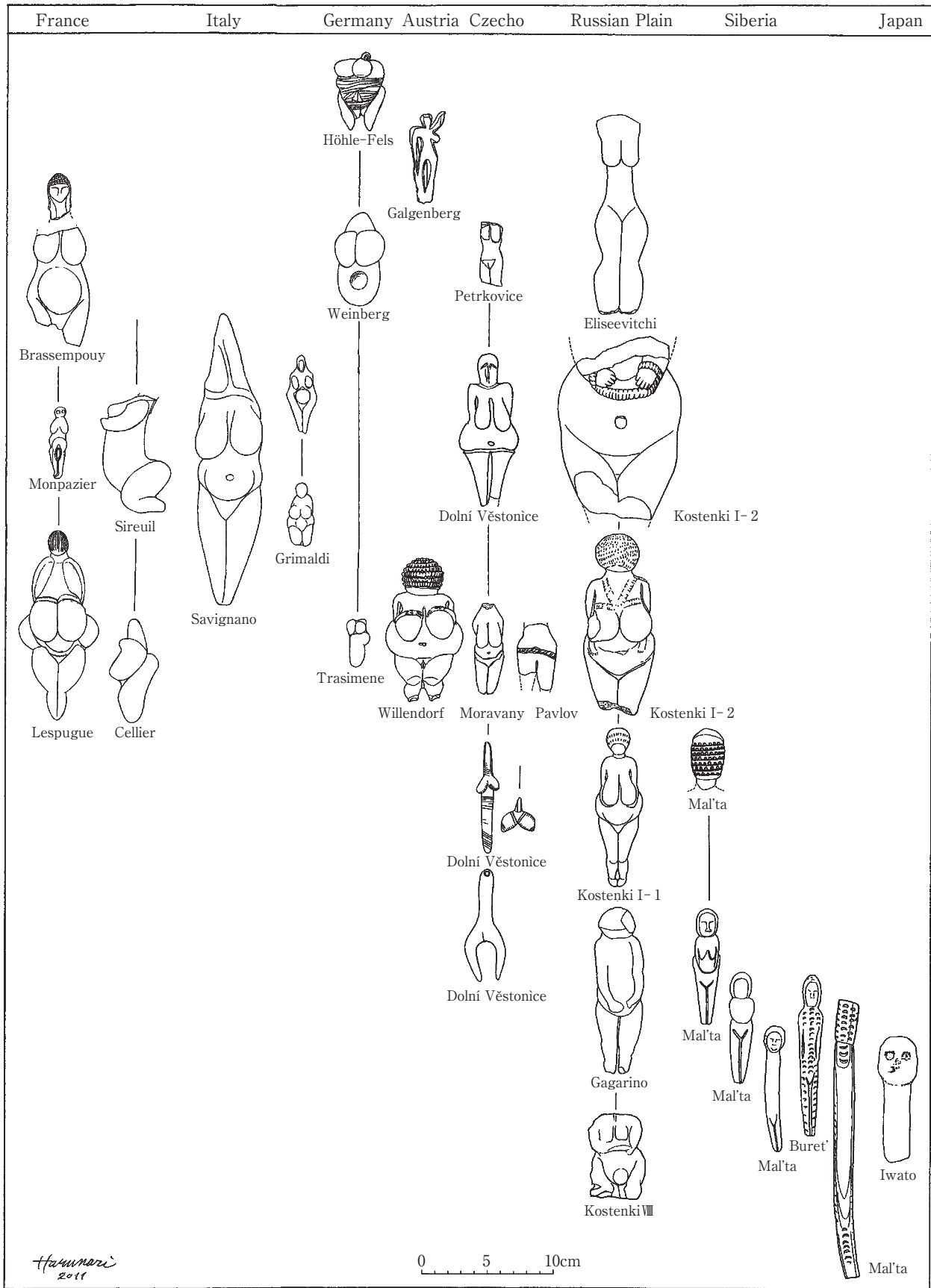


図5 ユーラシア・日本の後期旧石器時代前半の女性像の編年図

1 遺跡からの出土数が多いコスチェンキ、ガガリーノ、アヴデーヴォの資料を基準にすることができる。ガガリーノ遺跡では、A類は両腕を乳房の上にもっていつているが、他は前腕をはっきりあらわしていない。アヴデーヴォのばあいも同様に前腕の表現がない。

その一方、同じロシア平原のコスチェンキⅠでは乳房の下に前腕をおくのが普通であって、シベリアのマリタにも継承されている。前腕の位置によって、ヨーロッパの女性像とロシア平原・シベリアの女性像とを区別することができる。そのように理解するならば、唯一、ガガリーノA類が両腕を上にはげているのは、東ヨーロッパの影響であることを示しているのであろう。

コスチェンキⅠには手首に腕輪または帯紐、乳房の上の位置で帯を背中にまわして身体を1周させている例がある。また、乳房の下から、尻の直上に帯を巻いている例もある。チェコのパヴロフ遺跡の女性像にも、尻の直上に縄状に撚った太い帯の表現がある。ドルニ＝ヴェストニツェ遺跡の女性像の腹と尻の下をめぐるせている深い沈線も、腹帯の簡略表現なのであろう。

それに対して、ヴィレンドルフやコスチェンキⅠの女性像の手首にはめた腕輪の例は、後述する後期旧石器時代末のフランスのロージュリー＝バス遺跡やイストリッツ遺跡から出土した骨板やラ＝マルシェ遺跡出土の小礫に線刻した女性像つまり妊娠した女性像にも認められる(図17-6~8)。イストリッツの女性像はさらに首輪や足輪をつけている。ロシア平原のメジン遺跡からは、象牙製の腕輪が発掘されている(図17-1・2)。表面に線刻してある斜格子文や羽状文は、チェコやロシア平原の女性像や線刻棒の文様と共通し、これらの装身具は妊婦が身につけるものであったことを示唆している。

アフリカ現代のヒンバ族の間では、妊婦は乳房の下に位置に帯をまいて赤ん坊が下におりてくるのを促進するというから、帯をするのはそのような実用的な意味があるのだらう。その一方、日本では腹の下に位置に岩田帯をまいて胎児が下りるのを防ぐ。

後期旧石器時代前半のフランスからドイツ、チェコでは、ブラッサンプイの写実的な女性像に始まり、ヴィレンドルフやレスピューグの女性像のように肥満化を著しく進めながらも形態的に整った女性像へと発展したあと、モンパジエのような異常に変形した女性像を生み出している。

その一方、後期旧石器時代の女性像は、ロシア平原とシベリアとを結ぶと、コスチェンキA類、B類、C類からマリタA類、B類を経てマリタC類への移行はスムーズであって、明らかに簡略化の道を歩んでいる。マリタでは、両脚の間に円形の孔を穿ち紐を通すのに使っている。この円孔は、コスチェンキⅠの両脚間のレンズ形の削り抜きの意味が転じたものであって、これもロシア平原からシベリアへの女性像の伝播を裏づける証拠にならう。ロシア平原のばあいも、コスチェンキⅧやホティリョーヴォの女性像は、コスチェンキⅠの女性像とくらべると、写実性を喪失し退嬰化していることは明らかである。ロシア平原でも後期旧石器時代のうちに女性像が消滅の運命にあったことは否定できないだらう。

③……………後期末～晩期旧石器時代の女性像

A 立体女性像

立体女性像はソリュートレ期に消滅したあと再び現れるのは、旧石器時代後期末～晩期のヨー

ロップのマドレーヌ期（約 21,000 ～ 14,500 年前）、ロシア平原のメジン期（約 18,000 年前）である。この時期の女性像は、ドイツのゲナスドルフ例のように、高さが 5cm 程度の小型品が普通である。そして、ロージュリー＝バスやマイニンスカヤ、上黒岩の諸例のような正面観をあらわす例もあるけれども、正面観よりも側面観を重視し、立体感に乏しい例が多い。ドイツのピータースフェルス遺跡の女性像は高さ 2cm ほどの小さなもので、頭部に穿孔した装身具に変わっている。これを最後にユーラシアの旧石器時代の女性像の歴史は幕を閉じる。女性像が新たに登場するのは、ヨーロッパではそれから約 4000 年後の約 8,000 年前、新石器時代にいつてからのことである。

東アジアの中国では、旧石器時代の女性像は未見であって、新石器時代前期に遼西の興隆窪文化（約 8,000 年前）に初めて石製の女性像が現れる。

日本列島では、25,000 年前の大分県岩戸で「こけし形の石偶」の後、長い空白期間をおいて、縄文草創期中頃、14,500 年前に愛媛県上黒岩に扁平な円礫に乳房と性的三角形を線刻した女性像が現れる。そして、縄文草創期後半、13,000 年前、晩期旧石器時代末）に土偶すなわち土製の女性像が出現したあと縄文早期（11,000 ～ 7,000 年前）には列島各地に普及し、以後、弥生時代中・後期までの 1 万年間以上にわたって大量に製作・使用をつづけた特異な地域を形成した。更新世と完新世の境界は 11,700 年前、ヨーロッパで確立した旧石器／中石器／新石器時代の区分と年代との関係では、更新世の終わりと旧石器時代の終わりは一致している。縄文草創期はヨーロッパの旧石器時代の年代幅のなかに完全におさまっている。比較考古学の立場にたつて世界規模で女性像を取りあげるさいは、縄文草創期の石偶や土偶は旧石器時代の所産として扱わないとおかしなことになってしまう。

1 フランス・ドイツ・スイスの立体女性像

グラヴェット期とマドレーヌ期の間は約 3000 年の開きがあり、グラヴェット期の女性像とマドレーヌ期の女性像との形態差は著しい。同じ地方の二つの時期の女性像には関連があるのかどうか。この問題に解答を与えるには、マドレーヌ・メジン期の女性像の起源を明らかにする必要がある。

マドレーヌ・メジン期の女性像の研究は、ゲナスドルフ型とメジン遺跡の女性像を対象とした分析だけは進んでいる。しかし、他は例数がわずかであるので、一つの型式として認められるにいたっていない。筆者は、この時期の女性像を西のほうからフランスのロージュリー＝バス型、ドイツを中心とするゲナスドルフ型、ピータースフェルス型、モンリユー型、ロシア平原のメジン型、シベリアのクラスヌイ＝アール型、マイニンスカヤ型、日本の上黒岩型、相谷熊原型、粥見井尻型を設定し、それらの一部はさらに細分する。そのうえで、それぞれの型式の起源を追究する。

F1 ロージュリー＝バスの女性像

フランス・ドルドーニュのロージュリー＝バス (Laugerie-Basse) 岩陰から 1864 年に出土した 1 例である（図版 12-154）。頭と乳房の表現がないにもかかわらず、性的三角形と陰裂の表現が観る人につよい印象を与えたために、発見後ただちにヴィブレイ侯は Venus impudique（卑猥なヴィーナス）の蔑称をつけて世界に紹介し、以後、通称となった⁽³⁾ [Vibraye 1864, Breuil 1907]。この女性像は旧石器時代の女性像の最初の発見例であったけれども、類品がその後見つからなかったことから、

研究の対象として軽んじる傾向がつづいた。コーエンは前 14,000 年と記しているの、較正すると 18,000 ～ 17,000 年前である。

ロージュリー＝バスの女性像は、マンモスの牙製で、高さ 8.0cm、上半身に頭部と両腕はなく乳房の表現も腹部の膨らみもない。尻は低三角形に突出しているが著しいというほどではない。性的三角形つまり陰阜は V 字形の深い切り込みの上辺を細く浅い線で区切り、陰裂もまた切り込みが深い。2 本の長い脚は完全に分離して表現している。胸とウエストの幅が同じく細いので少女的といえ、そうもいえるような痩身である。頭部と乳房を欠き簡略化した表現であるけれども、正面観・側面観とも尊重した女性像といえよう。高さ 8.0cm。

G1 ゲナスドルフほかの女性像A～D類

ドイツ・ラインラントのゲナスドルフ (Gönnersdorf) 遺跡の住居跡付近から 1968 年、1970 ～ 1976 年に多数発掘され、G. ボジンスキーがゲナスドルフ型と命名した女性像の 1 型式である [Bosinski 1991]。ドイツのネブラ (Nebrä), ガルシツ (Garsitz), ペカルナ (Pekarna), アンデルナハ (Andernach), エルクニッツ (Elkunitz), フランスのクールベ (Courbet) など他遺跡からの発掘例も多い。ロシア平原のメジン遺跡出土の女性像のなかにもこの型式のものが含まれている (図版12-157～176, 図版13-181～195, 図版14-196～229, 図版15-243) [Höck 1993]。

較正年代は、マドレーヌ V 期のネブラ遺跡は 17,000 年前、ガルシツ遺跡も 17,000 年前、ペカルナ遺跡、ゲナスドルフ遺跡とアンデルナハ遺跡はマドレーヌ V 期、16,000 年前、15,000 年前、エルクニッツ遺跡もマドレーヌ V 期、クールベ遺跡はマドレーヌ V-VI 期で 14,000 ～ 13,000 年前である。

ゲナスドルフ例は、マンモス象牙のほか、トナカイ角、粘板岩、黒玉を材料にしており、その内容は多様でいくつにも細分できる (図版13-181～195)。

もっとも多い象牙製品は、象牙の表面から薄片を取り出し、切断→研磨の工程を経て完成したもので、頭部の表現はなく、細い棒状の上半身に角の丸い三角形または角が尖った三角形に突出した尻と細く短い脚をもっている。腹部の突出はまったくない。正面側の幅はいちじるしくせまい。

A 類 乳房を小さく細長く立体的に表現している。ゲナスドルフ以外に、アンデルナハ、ネブラ、エルクニッツから出土しているが、その数は少ない (図版12-164～166・172, 図版13-181・182・184, 図版14-196)。尻は、ネブラ例は角の丸い三角形で、ゲナスドルフ、アンデルナハ例は角の尖った三角形を呈する。前者が古く、後者が新しいのであろう。高さ 5.0 ～ 9.5cm, 幅 1.0cm。

B 類 乳房の表現を欠いたもので、ゲナスドルフの大部分はこの類に含まれる (図版13-185～189)。なお、報告者のボジンスキーやヘックは、ゲナスドルフ型では尻の上斜辺の角度は緩やかで下斜辺の角度は急であるとの観察例にもとづいてアンデルナハの 1 例 (図版14-197) の上下を決定している。しかし、その案では上半身があまりにも細くなるので、筆者はその逆とみている。ゲナスドルフ例は正面から見ると、単なる棒にしかみえないものがあり、明らかに側面観を重視した形態である。性的特徴を表現しようとする意識は微弱である。高さ 6 ～ 8.5cm, 幅 0.5 ～ 1.0cm。

C 類 アンデルナハからはマンモスの牙の先端近くを丸ごと利用し、段を設けて尻をあらわしただけの高さ 21.0cm, 幅 6.0cm の大型品も見つかっている。側面に 2 本の浅い線で V 字形を彫っている (図版14-204)。

D 類 石製品には、粘板岩の薄い板を打ち欠いて女性の側面形をつくったあと一部を研磨したものがゲナスドルフから出土している（図版13-190～195）。長円形の扁平な礫を選び、一側縁を凹めることによって女性の側面形に擬したものはエルクニッツから出土している（図版12-167～170）。

G2 ピータースフェルスの女性像

ドイツのピータースフェルス(Petersfels)遺跡から1927～1932年に発掘された未成品を含む21点の女性像で、黒玉(Gagat(独), jet(英)、水中で化石化した樹木)に穿孔して装身具として作ったものと、装身具でないものがある（図版14-205～225）[Peters 1930]。後マドレーヌ期で、較正年代は14,000年前である。

A 類 黒玉製で、側面形は腹をくぼめ尻を後ろに突き出したく字形で、高さ4.0～1.5cm、幅1.1～0.5cmの極小品である（214～225）。頭や乳房の表現はなく、上端に正面と背面を貫く孔を穿っており、紐に通して身に着けたようである。ゲナスドルフ型が装身具に変わった形態としてピータースフェルス型を設定することができる。

B 類 前面の上部に抉りを作って頭をあらわし、腹部に抉りをいれて胸をあらわし、後ろにもくぼみを入れて尻をあらわしている（209）。

C 類 断面方形の長い棒状で、前面は平坦面で乳房の表現はなく、背面は緩やかな山形に作って尻をあらわしたもの（205）と、稜を作って尻をあらわしたものがある（206）。明らかな未成品もあり（207）、この類自体、製作途中のものである可能性がある。

D 類 側面形を三角形に加工しただけの石製品で、2点ある（212・213）。これもA類の未成品の可能性がある。

E 類 扁平な板石の周囲を打ち欠いて上から円形を3つ重ねる形で頭、胸、腰の形にしたあと、左右の乳房を円形に線刻して女性を正面形であらわした高さ15.4cmの大型品である（210）。この時期には他に例がない。

F 類 扁平な石灰岩の板石の周囲を打ち欠いて、頭はなく尻を突出させることで側面形の女性像に加工している（211）。

S1 モンリューの女性像

スイスのモンリュー(Monruz)遺跡から1989年と2005年に出土した小型と極小型の装身具になった女性像である（図版14-226～229）[Egloff 1990, Bullinger *et al.* 2006]。後マドレーヌ期であるので、較正年代の16,000年前は古くすぎており、14,000年前と推定する。ヨーロッパの旧石器時代でもっとも新しい例である。

ピータースフェルス例と同じく、黒玉製で、側面形を重視し、頭部に穿孔して装身具として作ったものである。ピータースフェルス例とくらべると、1点は復元高4.0cmで全体に大きめであるが、のこりの3点はさらに小型化したもので、高さ1.2～1.5cm、幅0.6～0.4cmにすぎない。

2 ロシア平原の立体女性像

R1 メジンの女性像A～D類

ロシア平原のメジン (Mezin) 遺跡は、ドニエプル川の西岸、キエフに近い位置にある。1908年にF. K. ヴォルコフが2号住居と3号住居を発掘し、さらに1954～1956年にI. G. ショフコプリヤスが1号住居などを発掘して計17点の女性像が出土している (図版15-230～245)。ヴォルコフ以来アブラモワにいたるまで男根や小鳥をあらわしたものと解釈されたが [Volkov 1912, Abramova 1962 (1967)], のちに性的三角形の存在に注意したショフコプリヤスによって女性像と訂正された [Shovkopljaj 1965]。ボジンスキーやヘックはメジン例をすべてゲナスドルフ型に含めている [Bosinski 1991, Höck 1993]。マドレーヌ前期と併行する。較正年代は18,000年前である。

メジン例は、象牙の先端を縦に削いで、その面を正面にして、そこに線刻がある。腹部の突出はなく、腰は横に張り出し後方にも突出し、どっしりとしている。形態のうえでは頭の明瞭な表現はない。上端には本のページを左右に広げ、その上に2本の線を伸ばした図形、つまり開頁文 (open page pattern)、腰に性的三角形を線刻している。したがって、下半身の上に上半身を省略していきなり頭部をつけた特異な形状をもっていることになる。この線刻について、A. D. ストリヤルは「魂のいれもの」として胸郭部をあらわしているとする。その一方、Y. A. シャポワルは図像全体を「毛皮の頭巾をかぶった人間をいちじるしく様式化して描いたもの」とみている [ビビコフ 1985:25～26]。しかし、開頁文の上下の2重逆V形文は目と口をあらわし、上に延びる2本線は鼻をあらわした顔の表現と筆者はみたい。メジン遺跡の女性像はA～D類の4類があり、それぞれに型式変化があり、3類の間にも変遷が認められる。

A類 メジン型のなかではもっとも小型の1群で5点出土している。高さ2.3～4.4cm。丸い腰部に短い上半身とさらに短い脚部をもち、上半身に顔、腰部に逆三角形の性器を線刻している。開頁文の顔はそれぞれ2本線による目、口の表現がもっとも整っている。腰の性器の表現は小さい。2号住居から出土。

B類 A類を長くしたようなもので下端に膨らみをもつ長い棒状の1群で2点出土 (240・241)。男根形とされることもある。メジンでもっとも大きな1点 (240) は、先が尖った厚いへら状の上半身の正面に顔と性器を線刻している。腰部の形は自然で、口の直下に描いた性器は垂れ幕状で逆三角形ではない。背面に逆V字形を2本1単位で重ねて描いている。その最上部は菱形を2重に線刻している。高さ9.8cm。もう1点 (241) は、細長いもので、背面から側面にかけての全面に連続羽状文を線刻している。顔の表現は確かであるが、性器の表現は不鮮明であって、下開きの羽状文になっているように見える。高さ6.9cm。

C類 当初、鳥と間違われたもので、半球形の腰部にへら状の上半身と、きわめて短い脚がついている1群で、6点出土している (230～234・239)。腰の後方への突出の度合いはもっとも著しい。上半身の顔は、A類とB類にくらべると顔の輪郭はなく機械的に逆V字形の線を重ねているだけである。背面は中央に縦に5～7本の線の束を施し、その両側に雷文または羽状文を重ねている。腰部の性器の逆三角形は、2重線で正面いっぱい大きく鮮明に線刻している。腰部の背面から側面にかけて、雷文と羽状文を線刻している。この文様は牙製の腕輪の文様と同じである。顔の表現

は後退し、性器の表現は誇張している。

D 類 ゲナスドルフ型そのものからそれに近い女性像で、メジン型に混じて見つかった (242～244)。乳房の表現はなく、脚は短いか、またはない。上半部側面に線刻した横向きに縦線 1 本に左右からそれぞれ並行斜線 3 本が交わる図像は、性的三角形の表現であろう (242)。

メジン型は、メジン遺跡の 2 号住居から A 類・B 類のうち 6 点が出土、3 号住居およびその付近から C 類の 6 点が出土しているため、A 類と B 類はほぼ同時期ということになる。全体の形態は A・B→C の順、顔の表現は A・B→C の順、女性器の表現は C→A→B の順、女性器の位置は A・B→C の順に変化しているように見える。ここでは、上半身に顔、腰部に性器を線刻した A 類がもっとも古く、なかでももっとも整然とした作りの A 類を最古例と想定しておく。上半身に顔面も性的三角形も集約した C 類と顔の表現が崩れた B 類は新しく、B 類と C 類は A 類から派生したほぼ同時期の所産と考えておきたい。

R2 メジリチの女性像A～B類

メジリチ (Mezhirich) 遺跡はドニエプル川の南岸、キエフの南に位置し、メジン遺跡と距離的には比較的近い。1966 年以來の I. G. ピドプリチコらによる調査で、抽象化がひじょうに進んだ女性像とされるものが 3 点出土しているが、1 点は女性像と断定しかねるので、ここでは省略する (図版 16-246・247) [Pidoplichko *et al.* 1972, Boriskovski 1984]。炭素 14 年代の較正年代は 18,000 年前、16,000 年前、15,000 年前がある。

メジリチ型の女性像は象牙製で、胴部がいつそう細くなった三味線形あるいは鋤形で、正面の下端に逆三角形を線刻していることによって初めて女性像と認定できるほどである。上半身は幅せまくスティック状、腰部は後方に尻を突出させている。脚の表現はない。

A 類 平面形は三味線形で、上半身の正面中央に縦線を 1 本彫ったあと短い横線 2 本を交差させて顔を表現している (246)。下半身に逆三角形を 2 箇所重複しないように上下にずらせて細い線を沈刻し、最下には V 字形に少し幅広い線で深く沈刻している。

B 類 平面形は鋤形で、上半身は短線を 4 本 1 単位にして 4 単位重ね、それぞれの間に短線 1～2 本を挿入、横線の最下に短い線 1 本を垂下している (247)。下半身は下端に三角形を細い線で沈刻している。

メジリチの女性像 B 類は、メジン C 類よりもさらに変形が進んでいる。

3 シベリアの立体女性像

S1 クラスヌイ＝アールの女性像

シベリアのバイカル湖の西付近に位置するクラスヌイ＝アール (Krasnyi-Iar) 遺跡から 1957 年に出土した 1 点の女性像である (図版 15-251) [Abramova 1967, Delporte 1964]。

側面形の前面はく字形で乳房の突出をあらわし、背面はクランク形で尻の突出をあらわしている。しかし、正面形は単に屈折した棒状であって、抽象化がいちじるしい。頭部や脚部の表現はない。高さ 3.7cm、幅 1.1cm、厚さ 0.8cm の小型品である。

S2 マイニンスカヤの女性像

シベリアのエニセイ河の支流付近のマイニンスカヤ(Maininskaya)遺跡から1980年に出土した土製の焼成品で、1点だけ知られている(図版15-252)[Vasil'ev 1985]。較正年代は19,000年前であって、後期旧石器時代末の立体女性像のなかではもっとも古い。

表裏とも扁平な作りで、頭部・両手・胴部・脚部の区別があり、両手を広げ両脚をおろした奴隸形を呈する。乳房の表現も性的三角形の表現もなく、きわめて単純な形態である。正面形を重視していることは確かであろう。高さ9.8cm、幅7.4cm、厚さ1.8cmの中型品である。

4 日本の立体女性像

J1 上黒岩の女性像A～B類

愛媛県上高原町上黒岩遺跡から1962～1970年に発掘された扁平礫に女性を線刻した石偶で、13点出土している(図版16-253～265)[春成 2009]。縄文草創期の細隆起線文土器に伴い、較正年代は14,500年前で、ヨーロッパの晩期旧石器時代初めと年代的に併行関係にある。

上黒岩の女性像は、近隣で採取可能な楕円形のうすく扁平な緑色片岩の礫の片面(正面)に髪、乳房、性的三角形のすべて、またはその一部を線刻しており、うち2点には反対面(背面)に肛門を×形に線刻している。性的三角形とは従来、腰蓑または腰巻とみなされていた縦方向の複線によるスタレ文または横方向の複線による鋸歯文のことであって、それは陰毛あるいは陰裂をあらわし、素材の礫の半円形の輪郭とあわせて、女性器を表現していると筆者はみている。

上黒岩型の石偶は大きく2類に分けることができ、2類の間でも変遷が認められる。

A類 髪・乳房とスタレ文による性的三角形のすべてをあらわした1と2の例が古く、髪だけをあらわした例が新しいのであろう。高さ4.7～4.1cm、幅3.8～2.4cm、厚さ6.8～5.4mmの小型品である。

B類 髪はあるが乳房の表現はなく、下半は横方向に鋸歯文を線刻したものである。高さ6.0～3.6cm、幅3.0～1.8cm、厚さ7.0～3.4mmの小型品である。

同遺跡からはさらに、礫の形状と材質は石偶と同じでありながら線刻をもたない礫が4点出土している。これも使用したと解釈するならば、上黒岩には石偶の古い段階から新しい段階まで、さらに線刻を失った段階まですべて揃っていることになり、石偶の歴史が1遺跡で完結していることにもなる。

縄文草創期の隆起線文土器を出土した遺跡は、本州東北地方の青森県から南九州の鹿児島県の種子島まで多数存在するにもかかわらず、日本列島およびその周辺で同時期の石偶の類例はまったく見つからない。石偶の一部が無文土器の時期までくだるとすれば、上黒岩付近では石偶は2,500年間にわたって存在することになり、問題ははいよいよ大きくなっていく。上黒岩石偶は四国付近で自生したのか、それとも大陸から日本列島に女性像に関する情報が伝わって出現したのか、その成立事情は依然として不明である。

J2 粥見井尻型の女性像

三重県飯南町粥見井尻遺跡から1996年に発掘された2点の土偶である(図版16-266)[中川・前

川 1997]。伴出の土器の小破片は少数で隆起線文、爪形文、縄文をもっており、石器には凹基式石鏃多数、矢柄研磨器 4 点があるが、細かな時期は明らかでない。草創期中頃、較正年代は 14,000 ～ 13,000 年前と考えておきたい。

高さ 6.8cm, 復元幅 4.4cm, 頭部と胴部からなり、腕と脚は省略して作っている。顔の表現はなく、乳房は十分に隆起し、腹部は発掘時に削り落とされているが膨らみをもっていたようである。背面の中央に縦に浅い凹線をいれている。正面観・側面観とも意識した作りである。もう 1 点は、頭部だけの破片である。ともに、頭部と上半身とを頸部で接合している。

J3 相谷熊原型の女性像

滋賀県東近江市相谷熊原遺跡の 1 号住居跡から 2010 年に縄文草創期の爪形文と無文の土器・長脚石鏃・矢柄研磨器とともに見つかった 1 点の土偶である（図版 16-267）[松室・重田 2010]。炭素 14 年代の較正年代は 13,000 年前である。

高さ 3.1cm, 幅 2.6cm で、正面観・側面観とも重視した立体的な作りであるが、胴部だけで頭と手足を元々欠いている。ただし、頸に相当する位置に垂直に小穴があるので、頭部は別にあり、小棒で接合していたようである。小型品であるが、下端を平らに作って底面としているので、土偶としては珍しくも立てることができる。頭部をあとでつける土偶は、関東地方縄文早期の遺跡から出土した例がある。相谷熊原型の簡略型が、縄文早期押型文の時期の大阪府神並遺跡出土の土偶である。

J4 大鼻型の女性像

三重県亀山市大鼻遺跡の堅穴住居跡から 1986 年に発掘された土偶である（図版 16-268）[山田編 1994: 32]。縄文早期初めで最古の押型文土器に位置づけられる大鼻式の時期の可能性がつよいが、草創期末の表裏縄文の時期までさかのぼる可能性もあるという。約 11,500 年前とすれば、更新世／完新世の境界あたりにくる。

平面形は粥見井尻例に近いが、乳房の表現はまったくない。板状で、しいていえば、肩が張る正面形だけの土偶である。頭はおそらく低い山形で、上半部の幅 6.4cm, 下半身が存在するとすれば高さは 10cm でいどであろう。形態的には、関東地方縄文早期の千葉県宮脇遺跡の土偶から乳房の表現を省いた形である。

J5 縄文早期の女性像

土偶はその後、縄文時代早期（約 11,700 年～ 8,000 年前）になると、関東地方、なかでも千葉県の遺跡から集中的に出土している。この地域に分布の中心があることはまちがいないだろう。後・晩期旧石器時代に女性像が発達したヨーロッパ、ロシア平原、シベリアのいずれの地域も、その時代、つまり氷期が終わるころに女性像の製作が止んでしまうのに対して、日本列島だけはその伝統が連綿とつづくだけでなく、極端な発達をみる特異な地域となっている。

縄文時代早・前期の土偶については、原田昌幸の詳細な研究にもとづく型式設定があり [原田 1997, 2010], その後も新資料が見つかるたびに更新されているので、修正すべきところは少ない。

原田は、早期前半の土偶を木の根型、花輪台型、神並型に大別している。

木の根型は、千葉県成田市木の根遺跡出土品にもとづいて設定されたもので、円形の頭部、逆三角形の上半部、三角形の下半部を別々に作って、細い棒でつないだものである（図版17-271～289）。高さは頭が1.6～1.4cm、逆三角形が3.6～3.0cm、三角形が3.4～2.8cmであるから、3つの部分を接合した高さは8.6～7.2cmほどである。

千葉県船橋市小室上台遺跡、千葉市中鹿子遺跡の土偶は、木の根型の上半部と下半部を合わせたもので、上胴と下胴の区別があり、隆起した乳房をあらわしている（図版17-291・294）。頭は、別の小塊で作り焼成後に細い棒で接合するようになっているから、木の根型を継承する一方、草創期の相谷熊原遺跡と地域は離れているが、共通する手法をとっている。

神並型は、大阪府東大阪市神並遺跡出土品にもとづいている（図版17-269・270）。頭と下半身は省略して、乳房を主に上半部だけからなる女性像で、頂部に穿孔はない。腰のくびれは弱くなっており、相谷熊原例の省略形であろう。高さは3.0～2.9cm、幅3.0～2.6cmにすぎない。

茨城県利根町花輪台貝塚の花輪台型は、頭、上半部、下半部を一体化したもので、木の根型やその後の小室上台、中鹿子例などから導きだされている可能性が大きい（図版18-296～307）。

5 後期末～晩期旧石器時代の立体女性像の型式変遷

後期旧石器時代末～晩期旧石器時代の立体女性像をヨーロッパ、ロシア平原、シベリア、日本と地域的に分けて年代および型式変化を参考にしてその変遷をみると、つぎのとおりである（図6）。メジン、メジリチ、エルクニッツの女性像は、それぞれ二つの時期に分けてみたが、確実な証拠があるわけではない。

フランス	ドイツ・スイス	ロシア平原	シベリア	日本
19,000 年前			マイニンスカヤ	
18,000 年前				
ロージュリーバス		メジン		
17,000 年前				
	ネブラ エルクニッツ	メジン		
16,000 年前				
ペカルナ	ゲナスドルフ	アンデルナハ	メジリチ	
15,000 年前				
クールベ フォンタレ				上黒岩
14,000 年前				
クールベ エルクニッツ	ピータースフェルス	モンリユー	ドブラニチェフカ	粥見井尻

後期旧石器時代末～晩期旧石器時代の女性像は、ヨーロッパではロージュリー＝バス例が正面形で女性をあらわした正面型、ロシア平原ではメジン、メジリチ、シベリアではマイニンスカヤ、そして日本に正面型が多い。ヨーロッパではゲナスドルフ、アンデルナハ、エルクニッツ、ネブラ、

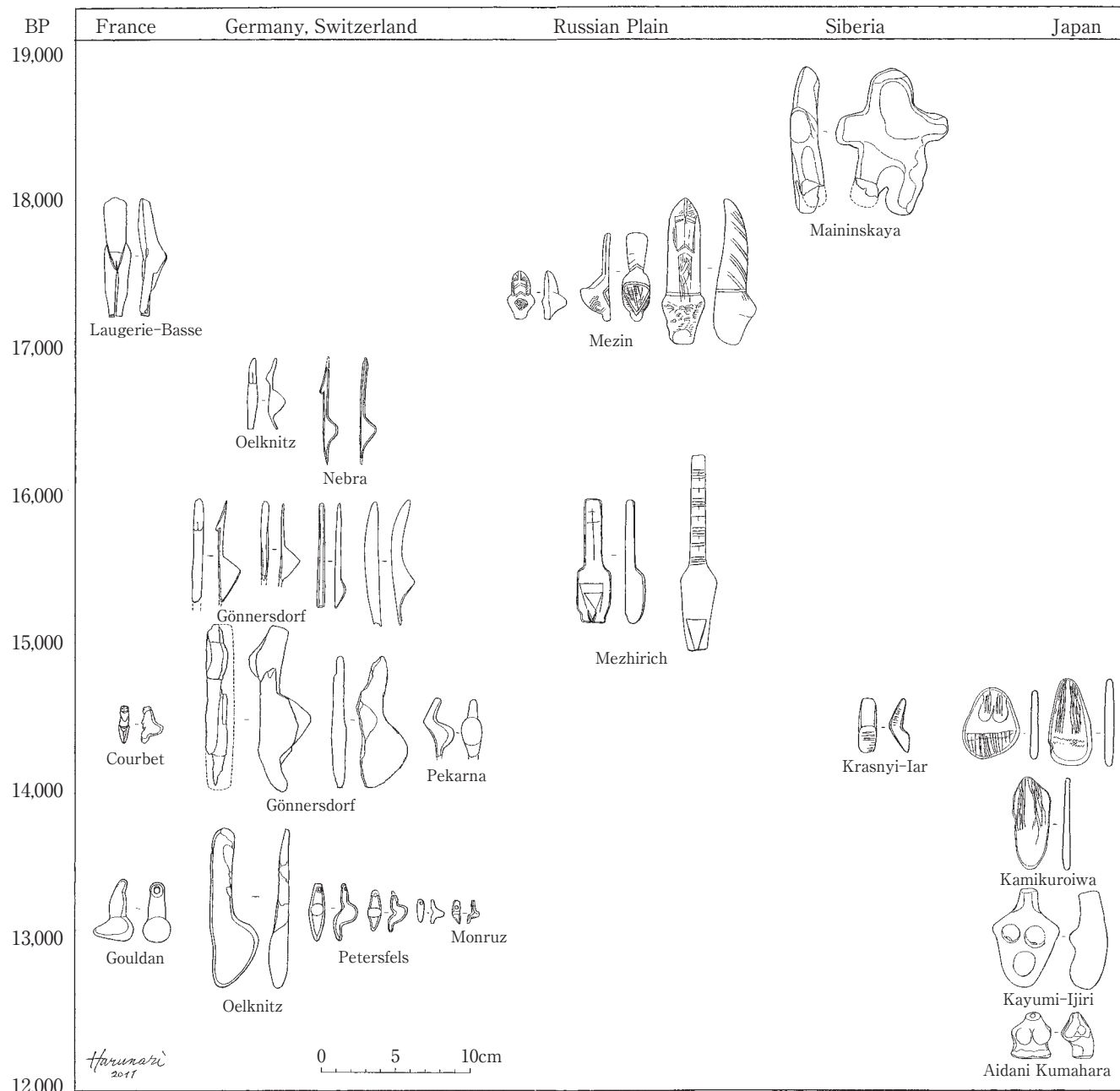


図6 後期末～晩期旧石器時代の女性像の編年

ピータースフェルスなどは、いずれも側面形で女性をあらわした側面型である。

乳房の表現は正面型ではロージュリー＝バス、メジン、メジリチ、マイニンスカヤになく、側面型ではゲナスドルフ、アンデルナハ、ネブラの一部に少数みるだけである。

性的三角形の表現は正面型にはロージュリー＝バス、メジン、メジリチ例があるけれども、側面型には1例もない。ただ、側面型には例外的にアンデルナハの超大型の1例、ピチ・スカラ例とメジンの1例の側面に線刻したV字形あるいはそれを連続させた図像は、図案化した性的三角形であ

ろう。

この時期の側面型の女性像に共通する特徴は半円形または三角形に突出した尻の表現である。しかし、クラスヌイ＝アール例ではペカルナ例が祖型になっていることを思わせるような尻の突出表現がのこっているけれども、そこに女性のイメージを感じさせるものはなく、マイニンスカヤ例にいたっては性的特徴を完全に欠失している。

後期旧石器時代末～晩期旧石器時代の女性像は、最初から乳房の表現を軽視または無視し、女性の表現も最初のうちに存在するだけであって、後期旧石器時代前半の女性像にとって重要であった要素を必要としないほど象徴化が著しいのが大きな特徴となっている。

B 線描女性像

マドレーヌ期の女性表現は、立体女性像のほかに岩陰の壁に浅く浮き彫りにした浮き彫り女性像、岩壁や板石に線描・線刻してあらわした線刻女性像がある。

1 岩壁線描女性像

アングル＝シュール＝ラングラン型の女性像

フランス・ヴィエンヌ県のアングル＝シュール＝ラングラン(Angles-sur-l'Anglin)岩陰の岩壁に浅く浮き彫りにした女性像である(図22-7) [St.-Mathurin *et al.* 1951]。マドレーヌ期に属する。C. コーエンは炭素14年代を前15,000年前としているので、校正すると19,000年前である。

3人の女性はいずれも直立し、腹部から下をやや斜めから見て表現しており、頭部から乳房の表現を欠いているのが大きな特徴である。腹部の膨らみは普通で、妊婦をあらわしているようにはみえない。陰裂を伴う性的三角形の線刻は鮮明で、明らかに斜めから見たように表現している。しかし、基本を正面観にしていることは明らかである。高さは160cmあり、実物よりもかなり大きく描いている。

ドルドーニュ県のラ・マドレーヌ(La Magdelaine)岩陰の2体の女性像は、胸部から脚先までを同様に浮き彫り風にあらわしている。これも腹部の膨らみは妊婦を表現しているようにはみえない。

ガビユー型の女性像

フランス・ドルドーニュ県のガビユー(Gabillou)岩陰から1940年に見つかった岩壁に線刻した女性像である(図7-6) [Gauseen 1964]。

仰向けになって脚をく字形に曲げて、子宮を水滴形に表現した稀有な例である。腹部の膨らみは大きくはないので、妊婦か否かの判断は難しい。

ペック＝メルル型の女性像

フランス・ロート県のペック＝メルル(Pech-Merle)洞窟にのこされている粘土層に指先を使って線描した女性像である(図7-9・10) [ギーディオン1968: 457, 509]。

く字形に前かがみにして立った女性を側面から描いている。1例は頭部、腕、乳房から腹・腰、脚をそなえ、もう1例は頭部の表現がない。腹部は大きく張り、ふくらんだ乳房は長く垂れており、

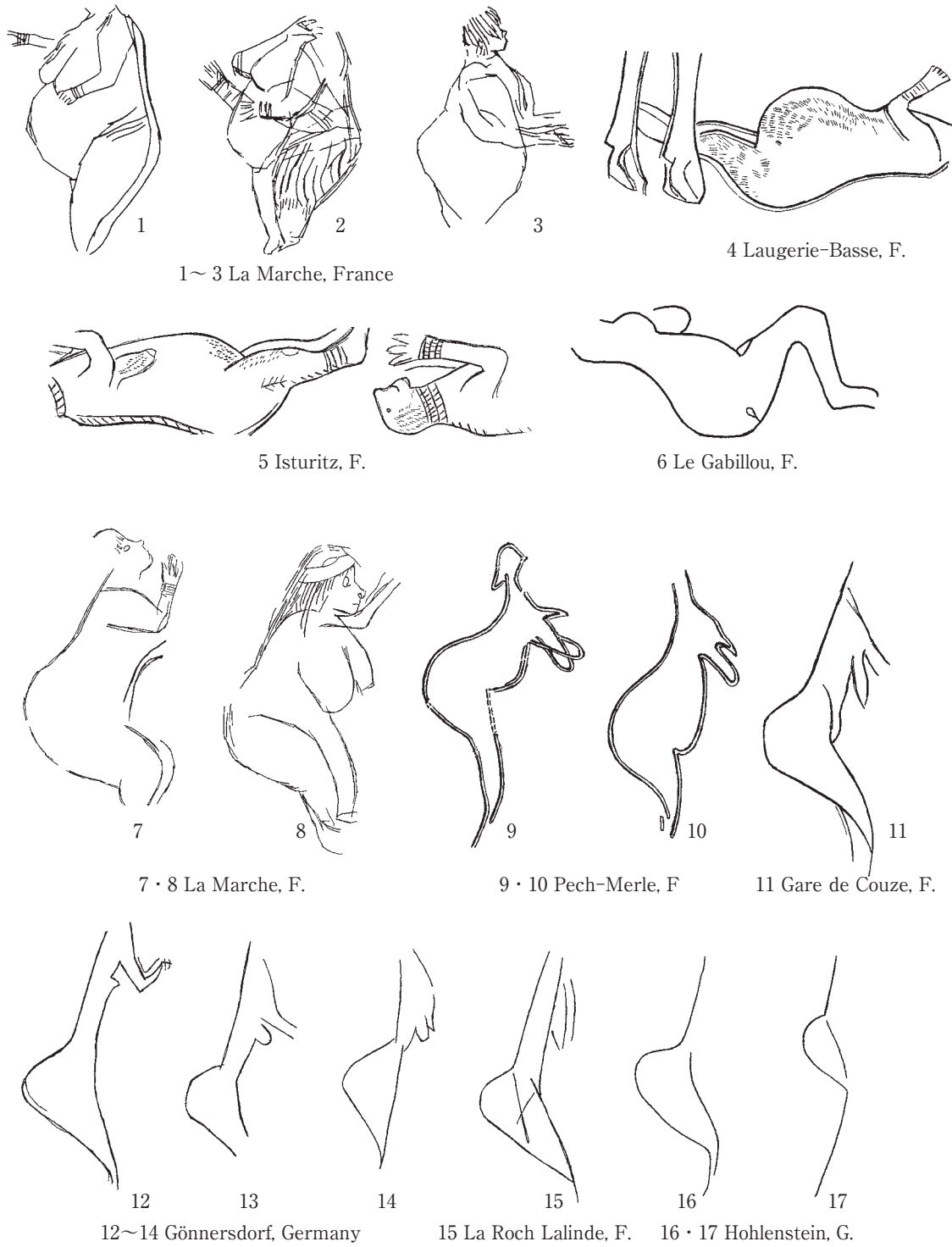


図7 妊婦像表現の変遷

妊婦を表現しているとみてよいだろう。

ラランド型の女性像

フランス・ドルドーニュ県のラ＝ロシュ＝ラランド(La Roche Lalinde)、同県レ＝コムバレル(Le Combarelles)、同県ガル＝ド＝クズ(Gare de Couze)、ロート県ミュラ(Mura)洞窟、タルン・ガロンヌ県フォンタレ(Fontalès)洞窟から出土した石灰岩の石塊に線刻してある女性像である(図7-15・16, 図9-2) [Bosinski 1991]。石塊は、本来は岩壁画の一部であって、それが崩落し埋没したもののようなものである。

いずれも立位の女性の側面を線刻し、頭部の表現はなく、ラ＝ロシュ＝ラランドの一部とガレ＝ド＝クズ、フォンタレの例には乳房の表現がある。腹部のふくらみはなく、尻は後方によく突き出している。腰にX形の交差線または1本の縦線を加えている例は、身体を側面観、陰門を正面観であらわした多視点画とみることができよう。

2 石板・骨板の線描女性像

ラ＝マルシュ型の女性像

フランス・ヴィエンヌ県のラ＝マルシュ(La Marche)洞窟出土の小さな石塊に線刻した5例の女性像である(図7-1～3・7・8) [Pales *et al.* 1976]。

下に垂れた大きな乳房、巨大な腹部をあらわしている。腕の位置には2通りある。3例は上腕を体軸に合わせ、前腕を乳房の下にもっていき、うち2例は手首に腕輪をはめている。2例は、上腕を体軸に直交するように前に出し前腕を体軸に合わせており、1例は手首に腕輪をはめている。これらは立位の状態で線刻しているけれども、仰向けに寝た出産時の状態の妊婦を描いている可能性も否定できない。そうであれば、出産時の腕の位置に二通りあることを示している。



図8 ゲナスドルフ遺跡の女性を線刻した石板の出土状態[Bosinski 2009]

イストリッツ型の女性像

フランス・バズ＝ピレネー県のイストリッツ(Isturitz)出土の骨板の片面に線刻した2体の女性像である(図7-5, 図21-1) [Delporte 1979: 43～45]。較正年代は17,000年前である。

女性像が立位か仰向けの状態かの判断は難しいけれども、つぎのロージュリー＝バス例を参考にすると、仰向けとみてよいだろう。頸、手首、足首に沈線を彫ってそれぞれ頸輪、腕輪、足輪をつけていることをあらわしている。頸輪と腕輪はともに幅広で、直交方向に短線でうめているのは、ロシア平原のメジン遺跡出土のマンモス牙製の腕輪を参照すると、文様を施してあることを示しているのであろう。乳房、下腹、太腿に列点を施しているのは、妊娠線あるいは静脈の線であろうか。女性像に妊娠線を表現している例として、山梨県鋳物師屋遺跡出土の縄文中期の土偶があげられている [山田 2008: 126～128]。この骨板の反対面には野牛の全身像を線刻している。

フランス・ドルドーニュ県のロージュリー＝バス岩陰出土の骨板に線刻した女性像(図7-4, 図21-2) [Cohen 2003] は、較正年代は21,000年前であって、最古の線刻女性像である。大きく膨らんだ腹部をもち、腕を前に出し肘で直角に曲げて上にあげた女性をあらわしている。手首に腕輪をつけている表現がある。腹部の輪郭に並行に列点による3本の線を彫っているのは、妊娠後期に腹部に生じる赤い線(妊娠線)をあらわしていると推定する。同じ画面の手前に線刻してあるトナカイの2本の後脚によって女性の脚の一部は隠れている。すなわち、遠近法を用いて描いており、トナカイの足下に寝ている状態の妊婦をあらわしているとみてよい。妊婦とトナカイとの関係はよくわからない。この骨板の反対面には野馬の全身像を線刻してある。

ホーレンシュタイン型の女性像

ドイツおよびフランスから出土した粘板岩の石板に線刻した女性像であって、ドイツ・バヴァリアのホーレンシュタイン(Hohlenstein)遺跡で最初に見つかっているので、この遺跡名を冠して呼ぶことにする(図21-3)。この型式に属する例は、ラインラントのゲナスドルフ遺跡から大量に発掘されているほか、フランスのフォンタレ遺跡からも見つかっている(図7-12～17, 図21-4, 図版12-179・180)。ゲナスドルフ遺跡の較正年代は16,000年前で、フォンタレ遺跡の較正年代は15,000年前頃である。

石板は、出土状態がよくわかるゲナスドルフ例では住居の床面のぬかるみを防ぐために敷き詰めてあった(図8)。石板に描いてある対象は、女性だけでなく、馬、マンモス象、鳥が多数例あり、サイ、シカ、原牛、野牛、ライオン、オオカミ、アザラシが稀にある。あたかも洞窟絵画を石板に個別に描いたかのようなのである。線刻のある石板の大きさは破片を接合すると50cmをこすものまであり、近所で石板を採取→搬入→線刻→住居に敷く、の順に作業が進んだようである。出土した石板の線刻はすべて破片化して小さくなっているのも、本来は1辺が数十cmの大きな石板に線刻しており、住居の床に敷く前にその役割をはたしたのであろう。

ホーレンシュタイン型の女性像はすべて側面から描いたもので、頭部の表現はない。大量に見つかっているゲナスドルフ例のなかで、もっとも細かく描写したものは、前腕を斜め上にあげ手指を垂れ、乳房を小さく突出させ、腹部の膨らみはなく、三角形に大きく尻を突出させ、脚は大腿部まで2本線で輪郭を描くが、それ以下は1本線に収斂している。これを原型とすれば、他はその省略

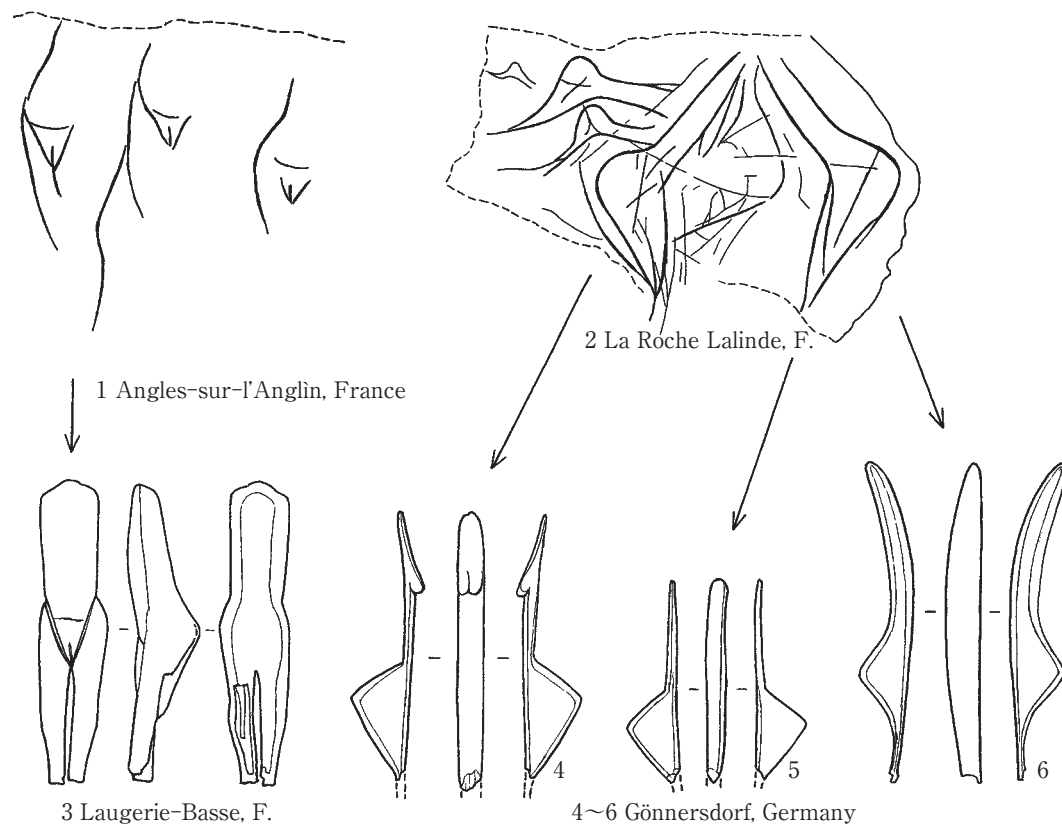


図9 浮き彫り女性像・線刻女性像から立体女性像の成立へ

形とみることができる（図版12-180）。腕や乳房を表現している例は少なく、表現していない例が普通である。女性像の形態は、ラランド型と同じで、ちがうのは岩壁（石塊）に彫っているか、可動的な石板に描いているかだけである。ホーレンシュタイン型の女性像は、腹部のふくらみがないので、妊婦をあらわしているようにはみえない。しかし、その姿勢は、明らかに妊婦をあらわしているラ＝マルシュ型やベック＝メルル型とまったく同じである。

後期末～晩期旧石器時代の線描女性像の型式変遷

小さな石塊に大きな乳房と巨大な腹部をもつ女性を線刻したラ＝マルシュ型、粘土の壁に大きな腹部をもつ女性を指先で描いたベック＝メルル型、大きな石板にやせた感じの女性を線刻したホーレンシュタイン型の三者は、たとえばラ＝マルシュ型とホーレンシュタイン型とをくらべると、両者の間に連関を認めることは到底できない。ところが、両者の間にベック＝メルル型をいれると三者がラ＝マルシュ型→ベック＝メルル型→ホーレンシュタイン型の順に連続的に変化していく過程であることを容易に認めることができるだろう（図7）。そこで、ラ＝マルシュ型が妊娠した女性をあらわしているとすれば、ホーレンシュタイン型も瘦身の女性をあらわしているように見えても、その意味に変わりはなく、やはり妊婦の記号的な表現であると筆者は推定する。

3 後期末～晩期旧石器時代の立体女性像の起源

ヨーロッパ

ロージュリー＝バス型の立体女性像（18,000～17,000 年前）は、アングル＝シュール＝ラングラン型の岩陰壁画の女性像（20,000 年前）を立体像に変えることによって成立したと考える。どちらも 1 例見つかったに過ぎないのは、両者の関係をよく示しているといえる。

ゲナスドルフ型の立体女性像（16,000～15,000 年前）の特徴は、側面観のいちじるしい重視と、頭部表現の欠除、そして妊婦らしくない細身の体形である。しかし、この体形と共通する女性像の表現がいくつか存在する。

この型式の女性像は、ラ＝マルシュ型の写実的な妊婦の像を原型にしてベック＝メルル型で図案化し、ラランド・ゲナスドルフ型で妊婦らしさを失い、その後いっそうの記号化がすすんだ。ゲナスドルフ型の立体女性像は、石板画の線刻女性像を立体化することによって成立した、と筆者は推定する。

ロシア平原

メジン型の女性像は、発掘後しばらくの間は I. G. ショフコプリヤスや Z. A. アブラモワらによって鳥形と男根形とみなされていたが、その後、性的三角形の存在を認めたことによって女性像と判断するようになった。open-book pattern（開頁文）とよばれる上半部の線刻は、これまで「魂のいれものとしての胸郭部」（A. D. ストリヤル）、「毛皮の頭巾をかぶった人間」（Y. A. シャポワル）などの見方があるが、筆者は顔の表現と考える。それほどメジン型の形態と線刻は特異性をもっている。このような特異な女性像が、突然、メジン遺跡に出現したとはとても考えにくい。先行するものが存在し、その簡略化によって特異性が顕著になったと理解するのが自然である。しかし、その系譜を追究することは容易でない。

現状であえて候補を探すならば、第 1 は、シベリアのマリタ遺跡出土の女性像のうちの 1 点（図版 11-135）であろう。この例では、上半身の両腕の内側の線の間にへ形ないしへ字形の沈刻をいれている。胸廓に相当するこの個所の沈線がつくる図形はかなりのていどメジン型の「開頁形」の線刻図像を想わせる。マリタ例では、この図像の下は性的三角形であるから、メジン型の図像構成とは一致する。しかしながら、問題は、マリタ例の胸の線刻に深い象徴性があるとはとても考えにくい

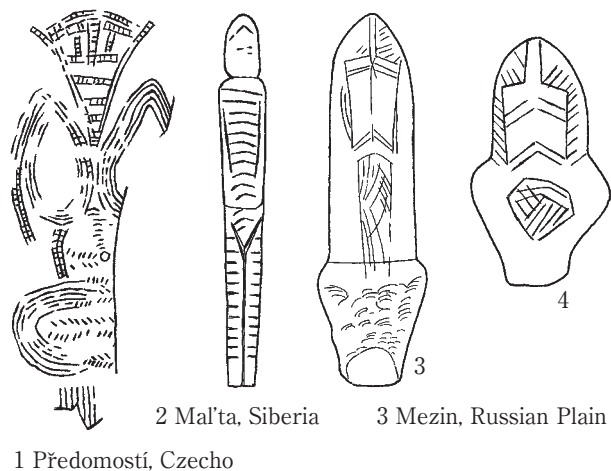


図10 チェコの線刻女性像とシベリア、ロシア平原の立体女性像（縮尺不同）

ことである。このばあいは、偶然の類似といったほうが妥当というべきであろう。

第2は、チェコのプシェドモスティ (Předmostí) 遺跡から出土したマンモスの牙に線刻してある女性像の表現 (図版3-44) [Obermaier 1924, Breuil 1924 : 537, Muller-Karpe 1966 : Taf.219] が対象となろう。プシェドモスティの女性像もまた独特のものである。頭は、逆三角形、乳房は縦長の楕円形、()形の腹をもち、腰は横長の楕円形である。脚は末端を欠損しているので正確にはわからないが縦線の束を二つ下にのばしただけか、または縦線の束二つをヘアピン状につないでいるか、どちらかであろう。頭の表現は、2本線を直交する短線多数でうめた帯で逆三角形を描き、その内部を6本の帯を水平方向に描いている。頭は、逆三角形の頂部に相当する短辺が外湾する一方、左右の長辺は内湾する。そして、上部から2本目と3本目の帯の間に3本の短い縦帯を加えておそらく目と鼻をあらわしている。腹中央の小円は臍で、その上と左右の羽状文は腹帯あらわしているのかもしれない。腰の表現を細かくみると、横長の楕円形を併行する6本の線で描き、その内部を左開きの羽状文でうめている。楕円形の下中央は少し切れており、そこも左開きの羽状文でうめている。羽状文の前者は陰毛、後者は陰裂の表現と筆者は推定する。

プシェドモスティの頭の線帯を単線化するならば、メジン型の頭部にわずかではあるが近づく。すなわち、プシェドモスティの頭の上辺は外湾しているので、これを直線で山形にかえ、さらに鼻をあらわす線帯を頭の上にとびださせると、メジン型の顔表現に近づく。そして、プシェドモスティの口に相当する線帯を複線の山形にかえたのがメジン型の口の表現とみることができる。

プシェドモスティの横長楕円形の腰のなかに羽状文による陰毛とその下の羽状文による陰裂の表現は、逆三角形を大きく描きその外の左右に羽状文を展開するメジン型の女性器の表現と形態を異にする。しかし、陰部の表現に羽状文を用いるという点では、両者は共通する。プシェドモスティの線刻女性像とメジン型の立体女性像との間には遠い関係があり、メジン型の頭と性器の表現に立体性を欠く女性像の淵源は線刻女性像にあると筆者は予想する。

プシェドモスティ遺跡とメジン遺跡とは約500km離れている。メジン遺跡の較正年代は約18,000年前である。それに対してプシェドモスティ遺跡の線刻女性像の年代は不安定である。中期パヴロフ文化とすれば較正年代は27,000～24,000年前 [Svoboda 1994]、後期パヴロフ文化とすれば較正年代は24,000～20,000年前である。後者を採用しても、メジン遺跡の立体女性像とプシェドモスティ遺跡の線刻女性像との間には2000年以上の開きがある。その一方、S.N. ビビコフは、プシェドモスティ遺跡出土のマンモスの骨・牙製品がメジン遺跡のそれと共通している原因を、部族間の直接的あるいは間接的な接触に求め、プシェドモスティ遺跡とメジン遺跡は編年的に対比できるとして、メジン文化とパヴロフ文化の成立期を同時ではないかと問題提起している [ビビコフ (新堀・金光訳) 1985 : 109]。

両文化の羽状文を施したマンモス象の骨製品 (図14, 図15-1) と棒状の牙製品 (図12, 図13) の関連性は否定できない。したがって、プシェドモスティの線刻女性像とメジン型の立体女性像との比較は、年代的な開きが大きいかかわらず、意味があるとしなければならない。

メジン型の頭の表現は、いちじるしく幾何学的になっている。その一方、メジン型の側面観における三角形の尻の突出はプシェドモスティの女性像からはでてこない。メジン遺跡からは明らかにゲナスドルフ型といえる女性像も出土しているが、年代はメジン例のほうが古い。メジン型はゲナ

スドルフ型の女性像に影響を与えている可能性もあろう。

シベリア・日本

シベリアのマイニンスカヤ型の立体女性像の年代は後期旧石器時代末、19,000 年前であって、もっとも古い。土製の焼成品である点も、すでに後期旧石器時代前半のドルニ＝ヴェストニツェ例やパヴロフ例があるとはいえ、特異である。

日本の上黒岩型の立体女性像はかつては線刻礫と呼ばれていた。⁽⁴⁾そこで、ロシア平原および沿海州の線刻礫をとりあげておくことにしたい。

ロシア平原のバリン＝コシュ (Balin-Kosh) 遺跡の線刻礫 (図版15-250) [Abramova 1967:158] は、下方がわずかにふくらむ楕円形の扁平な礫の長軸上の上端に逆T字形の線刻を横線は2本、縦線は3本で施している。下端には山形に屈折する線を4本重ねている。もとより上下は解釈にすぎない。この線刻のパターンは、ロシア平原のメジン型の女性像の顔と女陰の線刻に類似しており、メジン型の線刻表現をより簡便化したものとみることもできるだろう。年代はメジン遺跡よりも新しいとみる。

沿海州の初期新石器時代に属するルドナーヤ＝プリスターニ (Rudnaya-Pristan) 遺跡の線刻礫 [Kropyanko and Tabarev 1996:69] について、筆者は前稿 [春成 2009:495] では線刻があるほうを上にして毛髪表現とみているけれども、これはやはり上下を逆にして解釈すべきであった。そうすると、縦方向の線刻は陰毛をあらわしており、女陰の表現とみることになる。特に、2の下半分

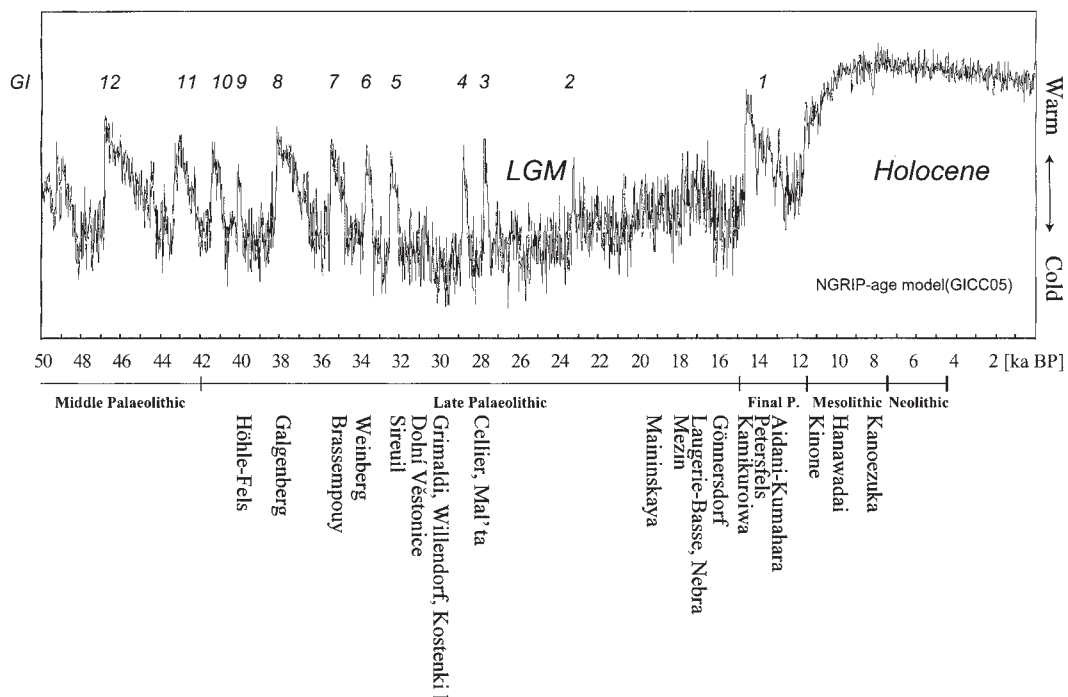


図11 更新世～完新世の気候の寒暖と女性像の時期 時代区分はヨーロッパを示す。気候変動は[Rasmussen *et al.* 2006]による

は中央の縦線と弧線は陰裂、その左右は陰毛または両脚を簡略化してあらわし、上半分は顔または両腕を簡略化して表現したものと解釈することが可能であろう。これもまた、メジン型の女性像の表現と通ずるところがあるようにみえる。

上黒岩型は突然、四国の山中に出現したのか、それともその祖型となる骨角製品が日本列島に広く分布していたのか、明らかでない。その一方、上黒岩型に年代的にもっとも近い縄文時代の例は、草創期～早期の土偶である。しかし、上黒岩型は変遷の過程で線刻を失っていくうちに、粥見井尻型・相谷熊原型とは形態的にも素材の違いをこえて懸隔が大きく、系譜的な関係があるとは考えにくい。縄文土偶は、上黒岩型の刺激伝播があって出現したのか、それとも各地で同時多発的に生成したのか、現状では判断しかねる。

4 後期末～晩期旧石器時代の女性像の意義

後期末～晩期旧石器時代の立体女性像は、ロージュリー＝バス型、ゲナスドルフ型、メジン型、マイニンスカヤ型のいずれをとっても乳房の表現はないか、または稀で、腹部のふくらみは存在しない。メジン型だけは、様式化した顔と性的三角形を表現しているが、乳房や腹部の膨らみはない。ロージュリー＝バス型とゲナスドルフ型は、瘦身を特徴とする。これをコスチェンキ I 遺跡 2 号住居出土の明らかに妊婦をあらわした写実的な女性像と比較すると、その違いはきわめて大きい。

その点は、この時期の岩陰壁画や石板画の線刻女性像の多くと同様である。アングル＝シュール＝ラングラン岩陰やラ＝マドレーヌ岩陰の半浮彫り女性像は、後期旧石器時代前半に一般的な立体女性像よりもはるかに写実的であるが、妊婦の表現ではない。ラランド型・ホーレンシュタイン型の線刻女性像でもっとも写実的なゲナスドルフ出土の 1 例（図版12-180a）は、妊娠する前の若い女性をあらわしているようにみえるほどである。頭はなく、腕、乳房、尻、脚を表現しているが、腹部のふくらみはない。妊娠した女性をあらわすことに意を用いていないことは確実である。

その一方、後期旧石器時代末のマドレーヌ期には石板や骨板に明らかに妊婦を線刻した例が存在する（図 21）。フランスのロージュリー＝バスの骨板には、トナカイの脚元に寝た妊婦を線刻している。頸輪と腕輪を着けており、腕は上向きであって、ヴィレンドルフやレスピューグの女性像と共通している。旧石器時代の出産姿勢が寝位、坐位、立位のどれであったのかの推定は難しい。また、石塊や石板に線刻してあるばあいは、天地の区別ができない。

しかし、ロージュリー＝バス例は遠近法を採用してトナカイと妊婦を重複させて描いているので、一つのシーンを構成しているとみてまちがいない。このばあいは、妊婦は寝た姿をあらわしているもので、出産の姿勢を描いているとみてよいだろう。ラ＝マルシュの石塊に描いてある巨大な腹と腰をもち乳房が垂れた女性の表現は写実的であって、妊婦をあらわしていることは疑えない。腕輪を手首につけ、5 例のうち 2 例の前腕は上向き、3 例は前腕を乳房の下にもってきている。イストリツの骨板はおそらく寝た状態の妊婦を 2 人線刻したものである。頭は一見、人ではないようにみえるが、身体の形は明らかに人間であって、頸輪と腕輪・足輪をつけ、腕は上方に曲げている。ラ＝マルシュの 1 例が、腹帯を巻いているのも、後期旧石器時代のコスチェンキ I-1 の妊婦をあらわした女性像の諸例を連想させる。

後期末～晩期旧石器時代の人たちも骨板や石塊・岩壁に妊婦を線刻しているので、石板にも女性

像を妊婦として表現することはできたはずである。彼女ら彼らがそうしなかったのは、岩壁線描画→線刻画→立体像と変遷した後期末～晩期旧石器時代の女性像は、岩壁画・線刻画の段階で妊婦を記号化することが完了しており、腹部のふくらみを表現しなくても妊婦という共通認識があったからであろう。

以上のように、後期旧石器時代前半と後期旧石器時代末に女性像は非連続的に出現したが、どちらも妊婦をあらわしており、その意義は基本的に同じであったと筆者は考える。彼らは自らの願望する姿に似せて妊娠した女性像を造形し、そこに霊力を付与し願望を託した。その女性像を手に掌握することによって願望が実現すると信じたのであった。それは、対象物を捕らえたり変形加工したりするのが目的で発達してきた狩猟用や加工用の石器などちがいが、人類が自らの思考を具現化するために対象との間に創造した最初の象徴的な媒介物の一つであった。

④……………後・晩期旧石器時代の線刻棒

ヨーロッパ・ロシア平原の後・晩期旧石器時代の遺物のなかに、例は少ないけれども女性像または性象徴の線刻をもつマンモスの牙製や棒状の石製品がある。上黒岩遺跡から出土した石製線刻棒は、その仲間である。

1 上黒岩の線刻棒

上黒岩遺跡の線刻棒は3点ある（図12-1～3）。

1は、9層から石偶と隆起線文土器に伴って見つかった。緑色片岩製で長さ18.45cm、幅4.54cm。縦に半截して蒲鉾形になっているうえに、両端とも破損している。線刻は、中軸線よりも少し片側に寄った位置に長軸に沿って1本の細い線をいれ、その線からわずかに間隔をあけて3本の短い線を補助的に添えている。線刻は先端がすばまった形の礫の端まで及んでいたようである。長さ12.5cm、幅3.75cm。

2は、7～6層からの出土であるが、6層に属するのであろう。緑色片岩製で長さ18.45cm、幅4.54cm。

両面とも両端からの打撃によって両端を破損している。さらに、この石のなかほどの片面と両側面に敲き痕が著しく、凹んでしまっている。凹みの位置は規則的であるので、木の柄をつけるための工作であって、T字形にして対象物を敲いた可能性がある。線刻は、片面に三角形を二つ、反対面に樹枝状の線を描いている。三角形は二つとも2辺が長く1辺が短い。三角形の大きなほうは、3辺のうち2辺の半分を使用による礫の端の剥離によって失っている。短辺の片方に寄った位置を1本の短い線が横切っている。三角形の小さなほうは、2つの長辺の先端付近は線刻がなく、短辺の端を2本の線が横切っている。

3は、6層からの出土で、完形品である。緑色片岩製で長さ25.1cm、幅6.2cm。

線刻は、片面のほぼ全面に羽状文を施している。両端に敲き痕がある。1端は長軸方向に剥離を生じている。他端の打痕は軽微である。

2、3は両面に同時的に剥離が進行しているので、台になったものを垂直に突くようにして力を

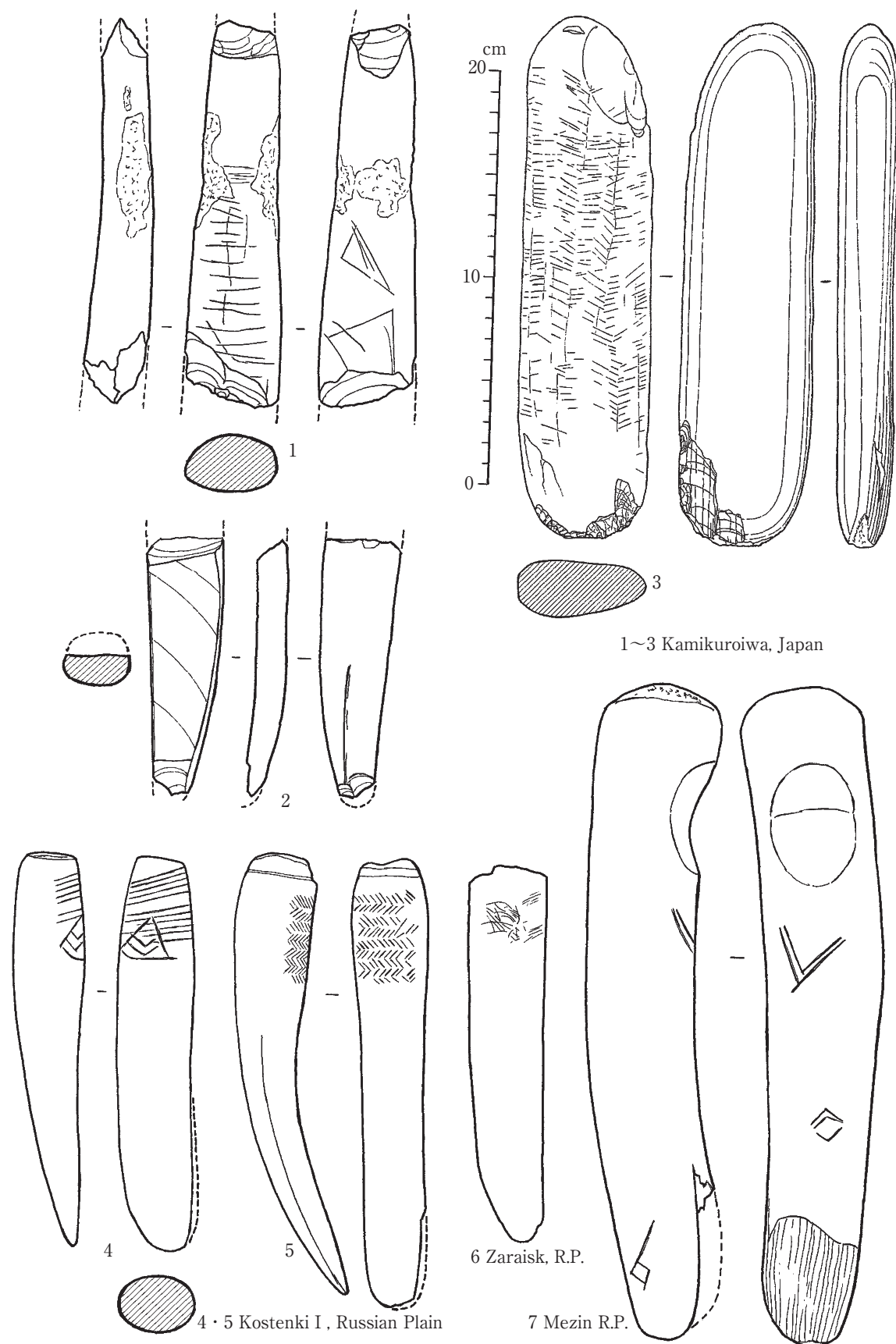


図12 日本・ロシアの線刻棒(1～3 緑色片岩製, 4～7 マンモス牙製) 1～3 上黒岩, 4・5 コスチェンキ I, 6 ザライスク, 7 メジン

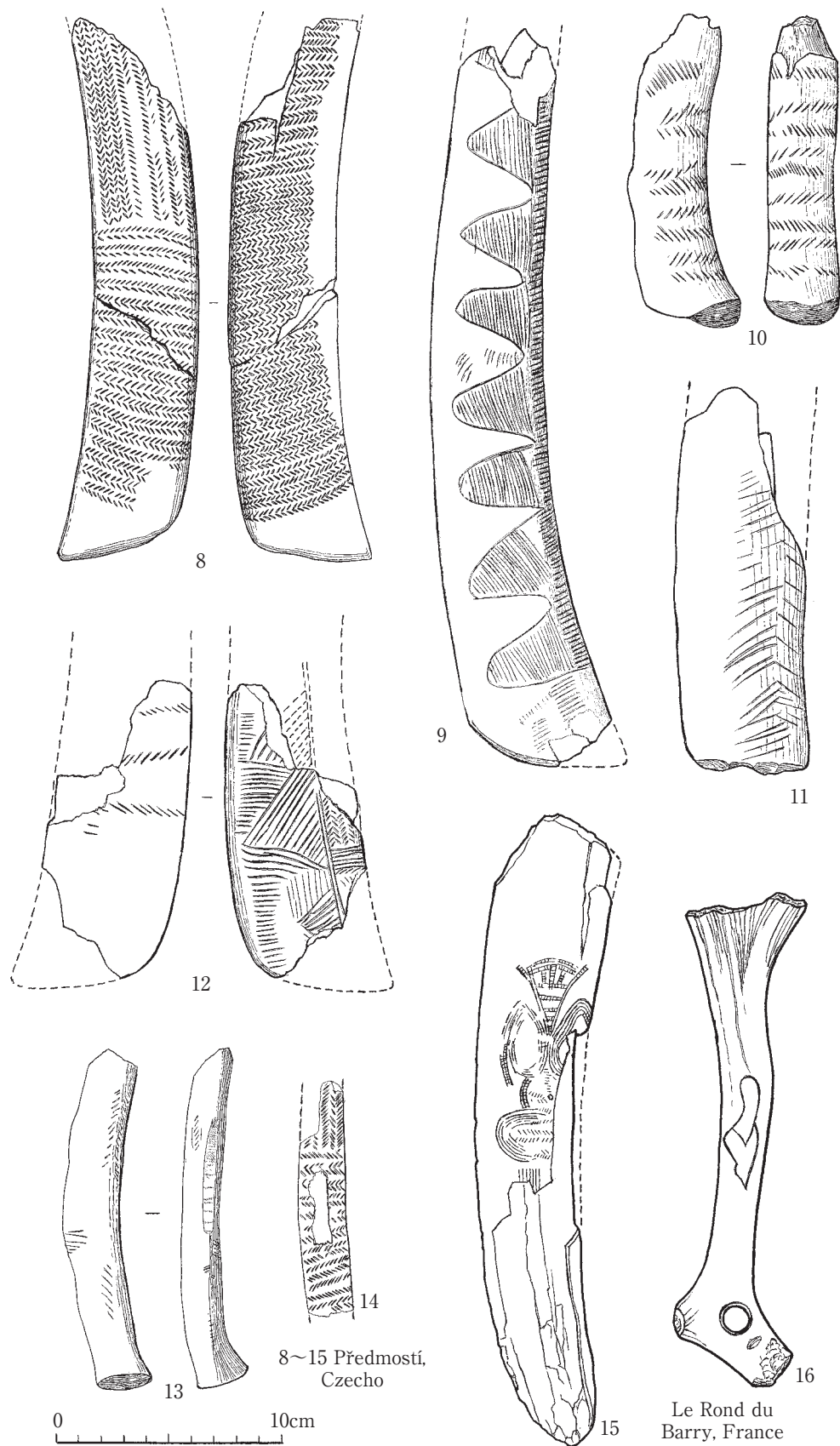


図13 チェコ・フランスの線刻棒(8・9・12 マンモス肋骨製, 10・11・13・14 マンモス骨製, 15 マンモス牙製, 16 トナカイ角製) 8~15 プシェドモステイ, 16 ル=ロン=ドゥ=バリー

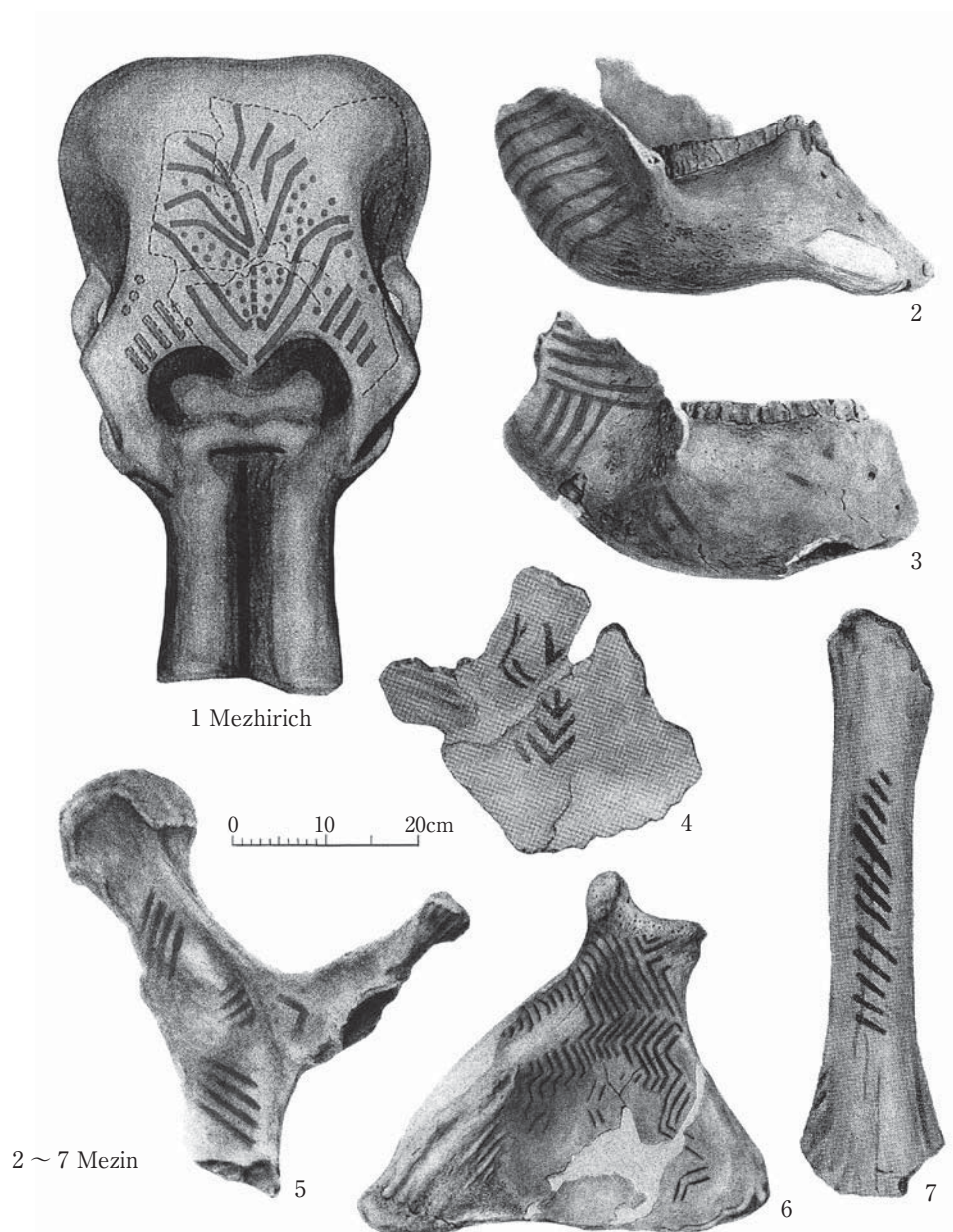


図14 メジリチ・メジン遺跡出土のマンモス骨製の打楽器 [Pidoplichko 1969, Shovkoplyas 1965]
1 頭骨, 2・3 下顎骨, 4 前頭骨, 5 寛骨, 6 肩甲骨, 7 大腿骨

いれてつよく敲いたのであろう。

以上の3点の剥離痕や敲き痕について前稿では、本来の目的に使った後に、二次的に磔器や敲き石として使用したと述べた。しかし、その証明ができていたわけではなかった。

ヨーロッパやロシアの旧石器時代のマンモス牙製の線刻棒を参考にすると、これらの石棒の三角形、1本線、樹枝状の線刻は、いずれも女陰の象徴的な表現と解釈することができる。そして、2の片面に三角形を二つ線刻しているのは2回にわたって描いた可能性がある、反対面の樹枝状の線刻も、縦の線が3本切れ切れになっているのも3回にわけて描いた可能性がある。図像そのものは重なっていないが、一種の重ね描きあるいは「上描き」とみるのである。欠損や打痕も、杵のよう

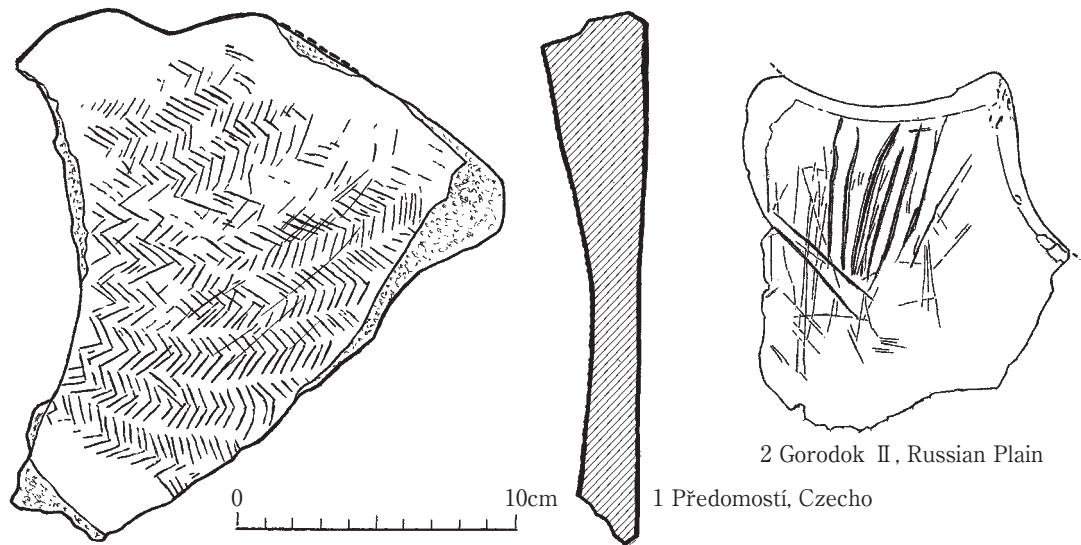


図15 連続羽状文を線刻したマンモスの寛骨と三角形を線刻したマンモスの肩甲骨
 ([ビビコフ 1985]の図と写真から作成)

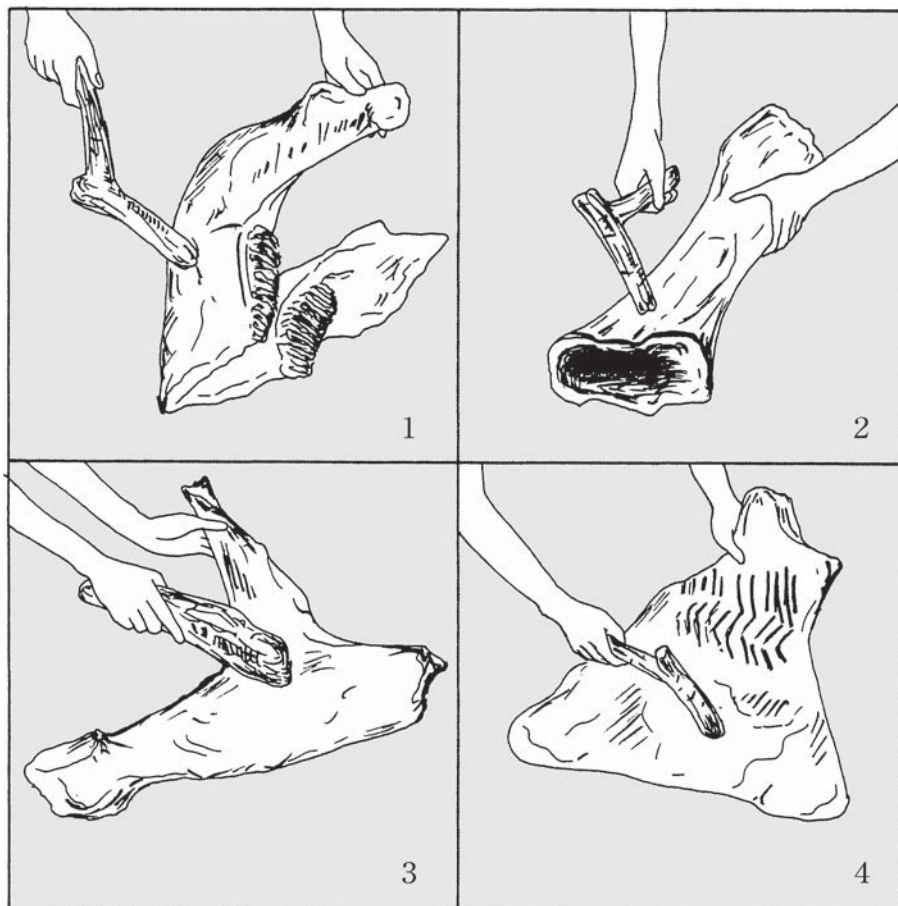


図16 メジン遺跡出土のマンモス骨の打楽器の使用復元図[ビビコフ 1985]
 1 下顎骨, 2 大腿骨, 3 寛骨, 4 肩甲骨, ハンマーは3がマンモス牙製,
 他はトナカイ角製

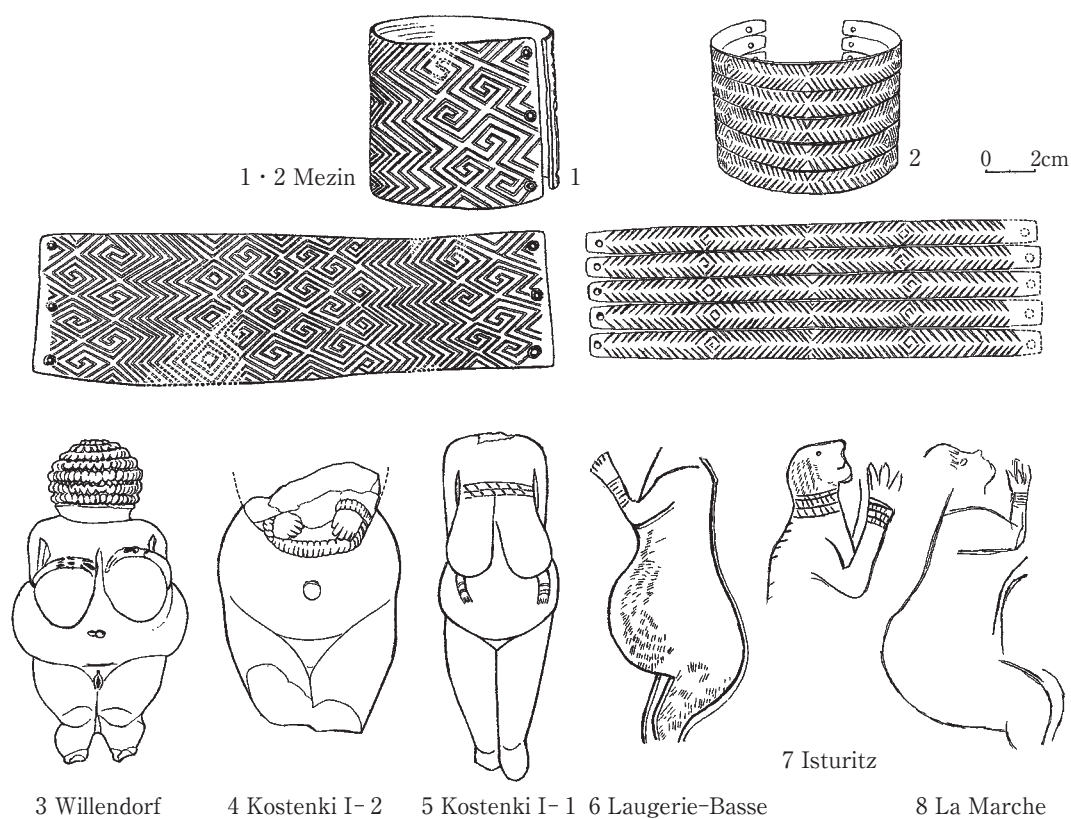


図17 メジン遺跡出土のマンモス牙製の腕輪〔Shovkoplyas 1965〕と腕輪をつけた女性像

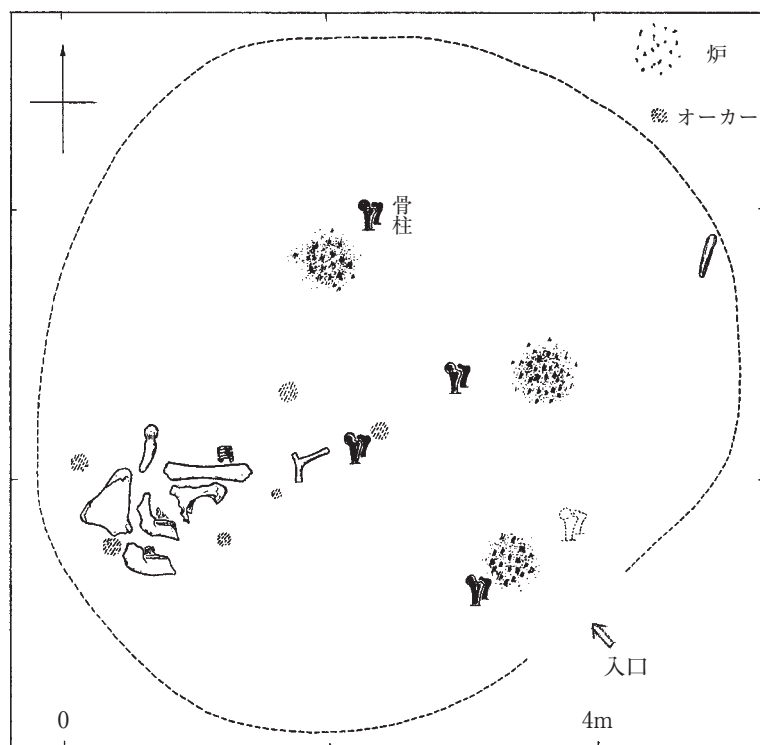


図18 メジン遺跡 1号住居のマンモス骨・牙製打楽器の出土状態
〔ビビコフ 1958〕

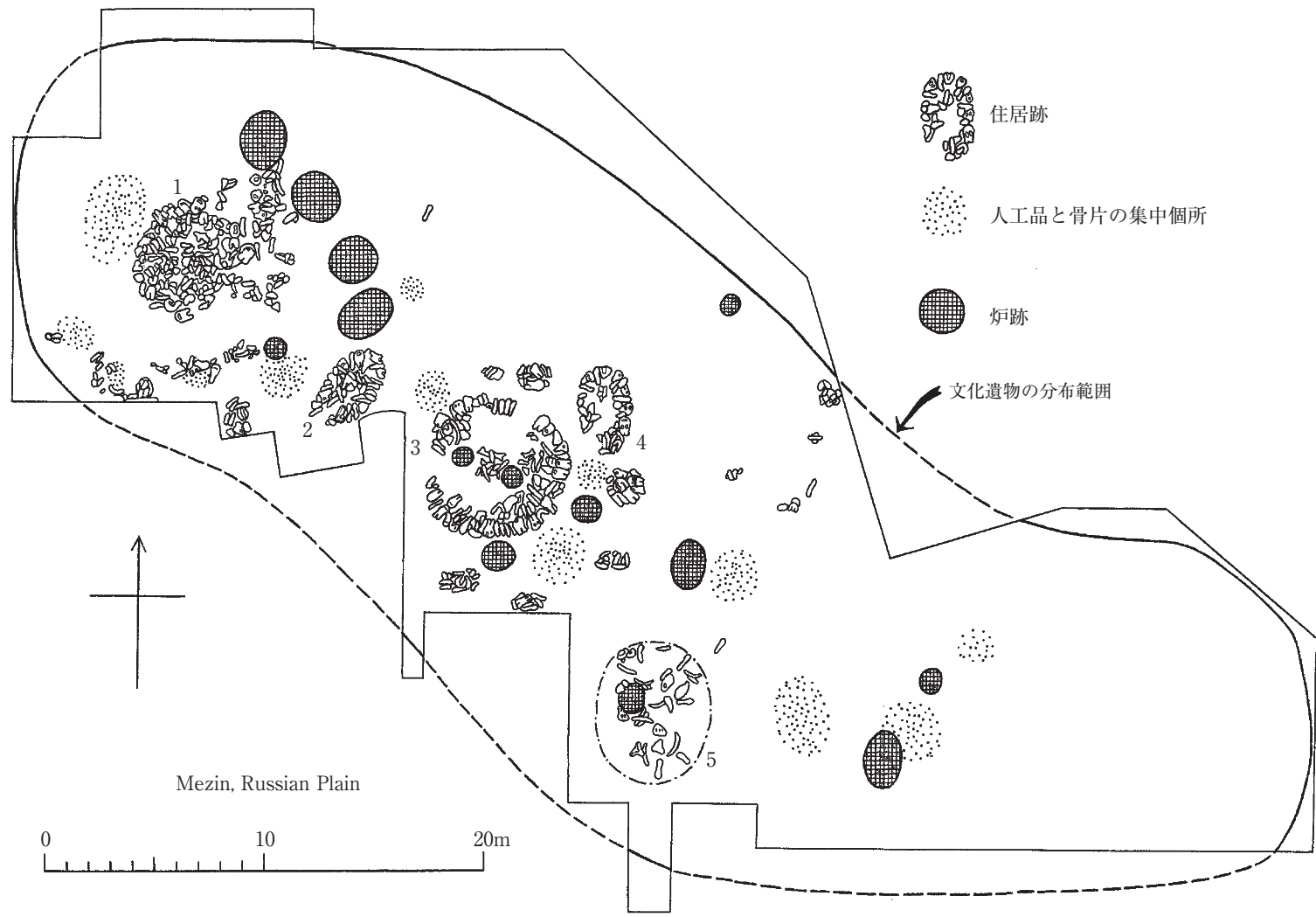


図19 メジン遺跡の遺構群の分布 [Shovkoplyas 1965]

に何かを敲いて音を発する道具として使った結果、生じたと解釈することも可能である。

以上のように考えてみたきっかけは、ロシア平原のメジリチ遺跡の女性像である。

2 ロシア平原の女性像と「音楽」

メジリチ遺跡の女性像には、腰部に位置をずらせながら性的三角形を3つ線刻してある事実にもマーシャックは注目している（図版15-246）[Marshack 1991: 25]。これは最初にV形に深く彫ったあと、時期をちがえてさらに2回にわたって逆三角形を彫り直したと解釈することができる。すなわち、この例では使用に先立って逆三角形を規則的に更新していたことになる。この事実は、同じ女性像を使用するにあたって女陰は新しく彫ったものでなければならなかったことを意味しているのであろう。

その一方、立体女性像には欠損した例が多い。コスチェンキ I 遺跡の石灰岩製品などは、普通に使っているかぎり壊れるような脆いものではないにもかかわらず、大きく欠損しているのは意図的に破壊した証拠である。これは新たに線刻するのと表裏の関係にあるのだろう。

また、メジン遺跡の女性像には三角形を線刻したあと、上辺の上を別の器具でつよく引っ掻いた傷や太い凹線をのこした例がある（図版15-230～236・240）[Marshack 1991: 26-27]。これも明らかに性的三角形をつよく意識した行為である。では、その傷をつけたのは誰であったのか。そもそも女性像を作ったのは、誰だったのだろうか。

メジン遺跡の旧石器人が建物内で、赤色顔料で羽状文を施したマンモスの大きな肩胛骨、下顎骨を太鼓代わりにして、牙製の拍子木を用いて一種の音楽を奏でていたことをロシアの考古学者は復元している（図16）[ビビコフ 1985: 63～112]。

筆者は、メジン遺跡出土の三角形をした肩胛骨、V字形をした下顎骨に天然の性的三角形の表出を認め、そのうえ女性器を象徴する羽状文を施すことによって、同遺跡出土の立体女性像と共通する構図に仕立てていることに注意したい。マンモス頭骨の額に赤色顔料でV字形を重ねて描き、その隙間を点列でうめたメジリチ遺跡出土品（図14-1）も、巨大な女性像のようにみえる。これらの楽器を立体女性像と合わせ用い、男根形の牙で女性器形の骨を敲く行為は、性的三角形を刺激し妊娠と出産を促す呪いであったと推定する。メジンやメジリチの立体女性像の性的三角形にのこされている使用中の掻き傷や重ね描きも、妊娠あるいは出産を促す呪いとかかわりをもっているであろう。

マンモスの骨と牙に文様を施した例は、メジン遺跡に先行するチェコのプシェドモスティ遺跡からも豊富に発掘されている（図13）[Breuil 1924, Jelínek 1976, Muller-Beck und Albrecht 1987: 85-86]。連続羽状文を線刻した肩胛骨、女性像や連続三角形を線刻した牙、あるいは連続羽状文をきわめて精緻に線刻した肋骨は、明らかにメジン例と関連をもっている。この種の習俗はロシアの研究者が指摘するようにパヴロフ文化に始まる可能性がつよい。

ロシア平原のザライスク遺跡発掘の線刻のあるマンモスの牙（図12-6）[Amirkhanov 2007] も、同じような例であろう。線刻の形は整っていない。やはりパヴロフ文化に属するけれども、プシェドモスティ例よりは新しいだろう。

さらに、以上の骨牙製の線刻棒とは用途を異にするけれども、コスチェンキ I 遺跡発掘のマンモ

スの牙製の横斧（図 12-4・5）のうち、1 点には基部に連続羽状文を沈刻してあり、もう 1 点には並行直線文の上に三角形をあとで彫り加えている。ともに女性象徴と解釈することができる文様である。ニューギニアやオーストラリアの先住民の社会では石斧はしばしば男性だけが使う男性の持ち物であり、花嫁代償にも用いられる男性の象徴として扱われている〔佐原 1994：24～26〕。そのような性格をもつ斧に女性象徴を施してあるとすれば、マンモスの牙斧は「祭りの斧」の性格をもち、それを使用する行為になんらかの性象徴の意味を付加していることになるだろう。

3 上黒岩遺跡の女性像と線刻棒の意義

上黒岩の線刻棒は、縄文時代の石器の分類にしたがえば小型石棒に属するであろう。日本では縄文前期の関東地方の小型石棒、中期の北陸地方の石棒すなわち男根形の亀頭の位置に女陰と推定可能な玉抱き三叉文の彫刻があり、男女の交合の象徴物とみなされる〔小島 1976, 春成 2007〕。また、関東地方の中期の大型石棒には円形の凹穴（盃状穴）をいくつもあけた例がしばしばみられる。晩期の関東・東海・北陸地方には、粘板岩製の小型石棒のなかに頭部を二次的にこすった結果、著しく磨滅した例がある〔山田 1994〕。これらの遺物は縄文時代に交合を模擬的におこない、女性を妊娠させる儀礼が存在したことを示唆している。

これらを参考にすると、上黒岩の線刻棒も男根形に女陰を彫った交合の象徴であるとみてよいだろう。上黒岩 b 例は片面に樹枝状の線刻は石の中軸線上の縦線は一気に彫ったものではなく、4 回にわけて彫っている。横線と交差しているのは 4 単位、横線は縦線の存在がわからないところまでおよんでいるから、5 単位であった可能性がある。反対面には三角形を 2 つ線刻しており、そのうち先端付近の三角形は石棒の先端が欠損したさいに三角形の半分は失われている。現在、石棒の中央に線刻してあるもう一つの三角形は最初の三角形が失われた後に線刻した可能性がある。縄文後・晩期の小型細身の石棒は折れ、先端は割れているのが常態である。その割れや敲击痕は、使用後の再利用の結果ではなく、本来の目的に使った時に敲击割った結果であろう。上黒岩の石棒も使用→欠損→線刻を繰り返している可能性がある。敲击→欠損の過程はないけれども、性的三角形の線刻を繰り返している旧石器時代の例が、ロシア平原のメジリチ遺跡の女性像にある。一個の女性像や象牙・石棒に繰り返し女陰を彫って更新しながら使用しつづけることがあったのであろう。

後期旧石器時代前半のユーラシアの立体女性像は妊婦をあらわし、安産を祈願する護符の意味をもっていた。しかし、24,000 年前頃に消滅し、その後、約 6,000 年の間隙をおいて約 19,000 年前に再誕した後期末～晩期旧石器時代の立体女性像は、腹部のふくらみはなく、乳房を表現した例も少なく、妊婦をあらわしているとはいえないけれども、線刻女性像の検討で明らかにしたように、やはり妊娠した女性をあらわしていた。女性像を、妊娠を祈願する護符として用いることに変わりはなかったのである。その背景には、最終氷期の寒冷気候がつづくなかで不妊の傾向がいちじるしくあらわれたことに対する文化的な適応を考えることもできる。あるいは、感染症が流行し、人口が急減するような事態が生じたこともあったかもしれない。感染症は、とくに妊産婦を直撃し、それによる死者は男性よりも女性が多いという〔田村 2011：214〕。そのような状況におちいると、妊娠を促し安産を祈願する呪術が発達することもありうるだろう。日本列島の上黒岩の女性像は、乳房と女性器の表現を強調するところから出発している。そして三重県粥見井尻、滋賀県相谷熊原遺跡

の土偶は乳房の表現に意を注いでおり、ヨーロッパの後期末～晩期旧石器時代とは異なる。

妊娠したあとの出産も大変な事態であった。現在のように、病院で薬品も使って安全かつスムーズに出産するようになる以前は、自宅で産婆が助けて出産するのが普通であった。最初の出産は2日かかり、「青竹を裂くような苦しみ」と表現されるような苦行であり、母親にとっても胎児にとっても、命がけのことであったから、そこに呪術が介在するのはごく自然の成り行きであったろう。

前稿では、上黒岩の石偶を妊婦が出産時に握りしめていた護符と考えた〔春成 2009：497～500〕。しかし、それは妊娠する前から妊娠を祈願する護符として身に着けており、線刻棒もまた妊娠前、出産時に骨あるいは石を敲いて音を発する拍子木として使ったと想像することもできよう。

上黒岩の石偶と線刻棒が、ロシア平原とただちに関係するとは考えにくい、ユーラシアの晩期旧石器時代と共通する呪術が、縄文草創期・早期の上黒岩岩陰でもまたおこなわれていたのではないだろうか。上黒岩の岩陰は、日常生活の場であると同時に、妊娠を祈願する儀礼の場であり出産時には産屋としても使った大切な空間であったと考えたい。

⑤……………後 説

最後に、未解決の問題を取り上げておきたい。それは、女性をあらわし、女性が使ったと推定する女性像を製作した人の性の問題である。

紀元前4世紀に始まる古代ギリシャのアフロディテ（ヴィーナス）の彫刻の作者は、名前をのこしているアテネの人プラクシテレスの「クニドスのヴィーナス」以来、男性に限られている。ヨーロッパの中世から近代にいたるヴィーナスの絵画の作者もサンドラ・ボッティチェリ（「ヴィーナスの誕生」1485年頃）やティツィアーノ・ヴェネチエリ（「ウルビーノのヴィーナス」1538年頃）をはじめ男性ばかりである。そして、20世紀になってシュザンヌ・ヴァラドンのような女性

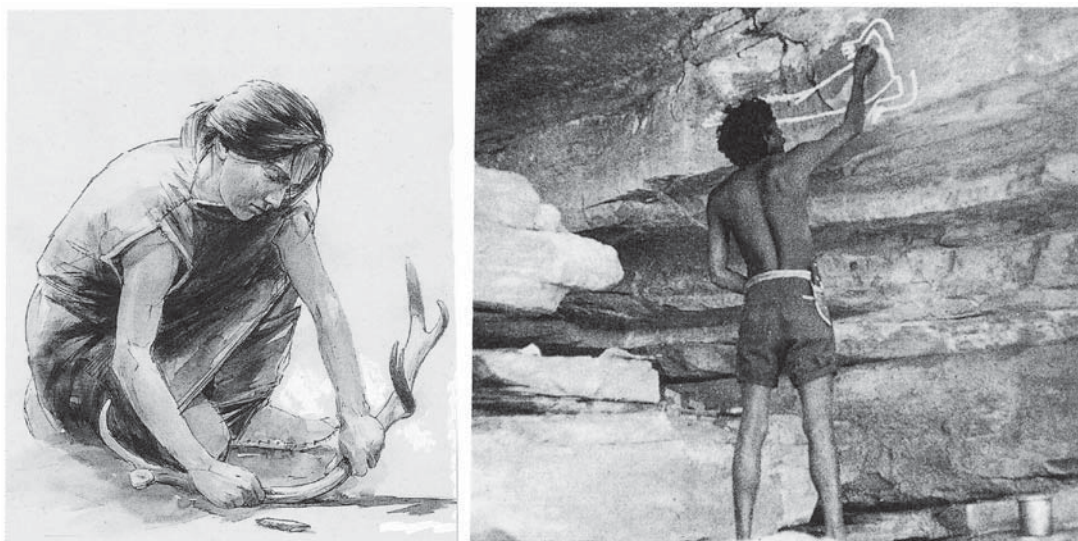


図20 女性像を作るために鹿角から素材を切り出している女(想像画), 岩壁にワニを絵具で描く
オーストラリア・アボリジニの男〔Le Brun-Ricalens 2009, Jelinik 1976〕

の画家が登場してようやく女性が描いた女性裸像が出現する。男性優位の社会で、男性が宗教と芸術の分野を支配し独占してきた厳然とした事実が示されているが、女性につよい関心をもち女性美を追求してきたのはもっぱら男性であったという、もう一面の事実もある。中世以降は、芸術は王侯貴族の屋敷内の壁や調度品を飾るインテリアとつよく結びついており、王侯貴族が抱えている芸術家は所有者の好みを満足させるべく制作に励んだのであった。

では、旧石器時代の女性像の作者は男性であったのだろうか、それとも女性であったのだろうか。旧石器時代が男性中心の社会であったとは、安易に決めたいけれども、洞窟壁画が数十 m、数百 m の奥深い洞窟のなかに、狩猟対象を生き生きと写實的に表現している事実は、作者が男性であったからとみたほうが理解しやすい。女性像は洞窟壁画には例が少なく、移動可能な単品の小像であるか、または石板画であり、出土する場所も住居跡など野外が圧倒的に多く、一種の道具として使った可能性がつよい。

一般に、女性が使う道具は女性が作り、男性が使う道具は男性が作る傾向がつよい [Murdock 1937 (1965 : 308 ~ 310)]。では、女性像の製作者は女性と考えてよいだろうか。

立体女性像が完成にいたるまでの過程を復元してみよう。

〈石製品〉石灰岩などの石材を採取→粗割り加工→打撃による概形作り→研磨による仕上げ

〈牙製品〉マンモスの牙を入手→粗割り加工→彫器による細部仕上げと研磨による最終仕上げ

立体女性像の製作は、基本的に石器、骨角牙器の製作と同じである。まず、原材の石や象牙を入手しなければならない。コスチェンキやヴィレンドルフの石灰岩、シルイユやセリエの方解石、あるいは象牙は近いところに産地があり、男女とも容易に入手することができたのか。原材入手までは男性が担当してもよい。では、原材を入手したあとは、仕上げ段階で使う彫器を製作したのは女性か男性か。彫器は、石核から石刃を剥ぎ取ったあと、彫刻刀面を削取して完成するが、石器製作体系の一部であるので、男性による製作と考えるのが暗黙の了解となっている。

石器製作者を男性にあてる大きな理由は、1) 特定の石材を得るために時としては数十 km 離れた産地まで遠出しなければならない、2) 打製石器を使用するのは男性であることによる。なお、石器を製作するのは肉体労働であるが、原石の大塊から小塊を割取る作業をのぞくと、腕力において女性に勝る男性でなければ石器を製作できないというものではない [西秋 1995]。彫器は使用の過程で欠損あるいは磨耗した刃部を再生することが必要である。では、刃部を再生したのは男性か、女性か。

そうすると、1) 彫器も女性像も男性が作る、2) 彫器も女性像も女性が作る。3) 彫器は男性が作るが、女性像は女性が作る、の三つのばあいを想定することができる。彫器を製作したのは男性としても、コスチェンキ I の女性像のように妊婦を写實的に表現した例、パヴロフやドルニ＝ヴェストニツェの妊婦がしめる腹帯を表現した女性像をはたして男性が作り、それを女性が護符として身に着けるようなことがありえたであろうか。

G. P. マードックが性的分業の観点から民族例の個々を調べて整理したところでは、個々の作業と性との関係はつぎのようになっている [Murdock 1965]。これには「文明社会」の例も意識的に少し混ぜてあるという。しかし、これを旧石器時代にまでさかのぼらせても、その傾向はそれほど違うことはないだろう。

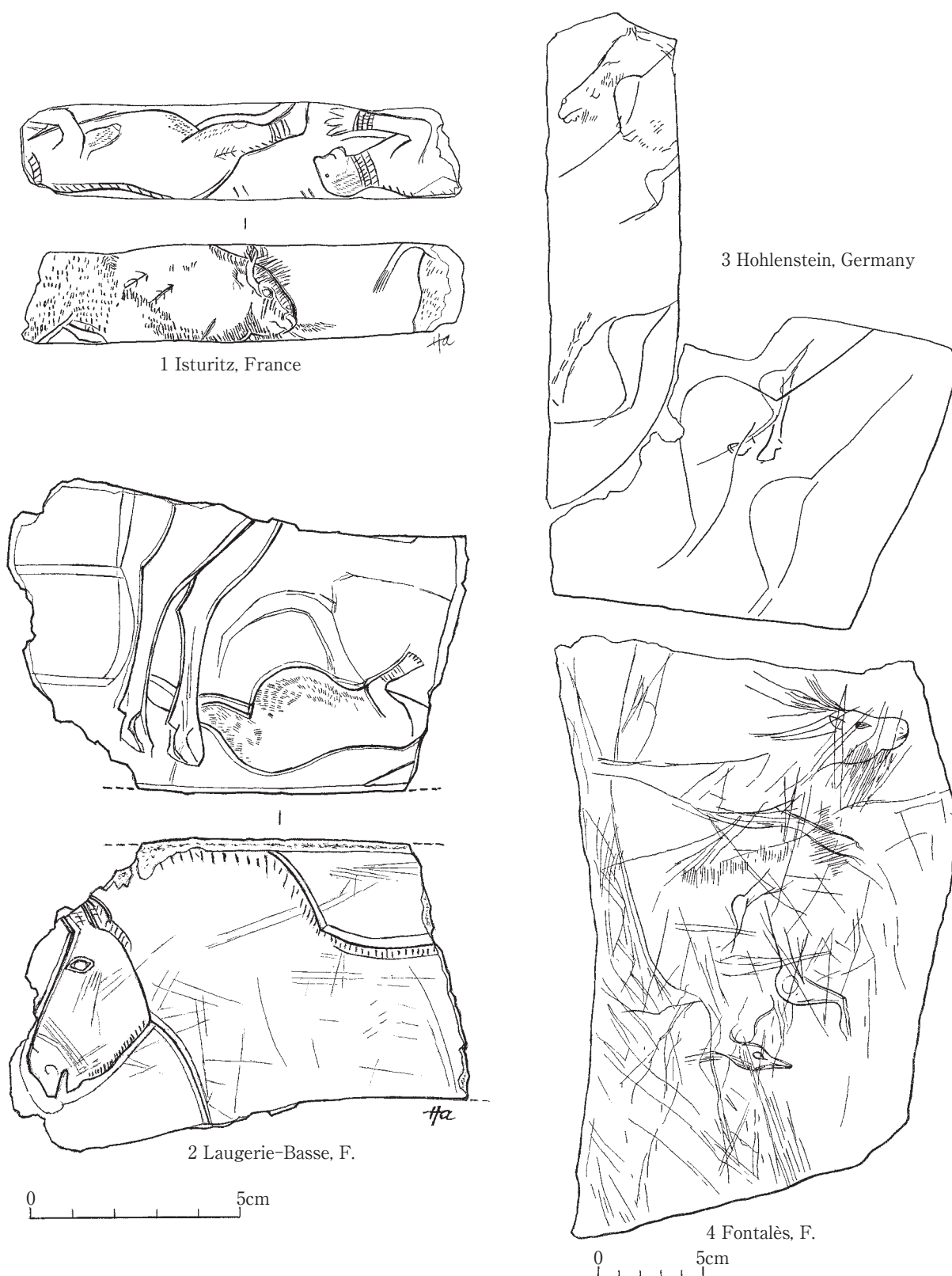


図21 フランス・ドイツの女性像と野獣の線刻例

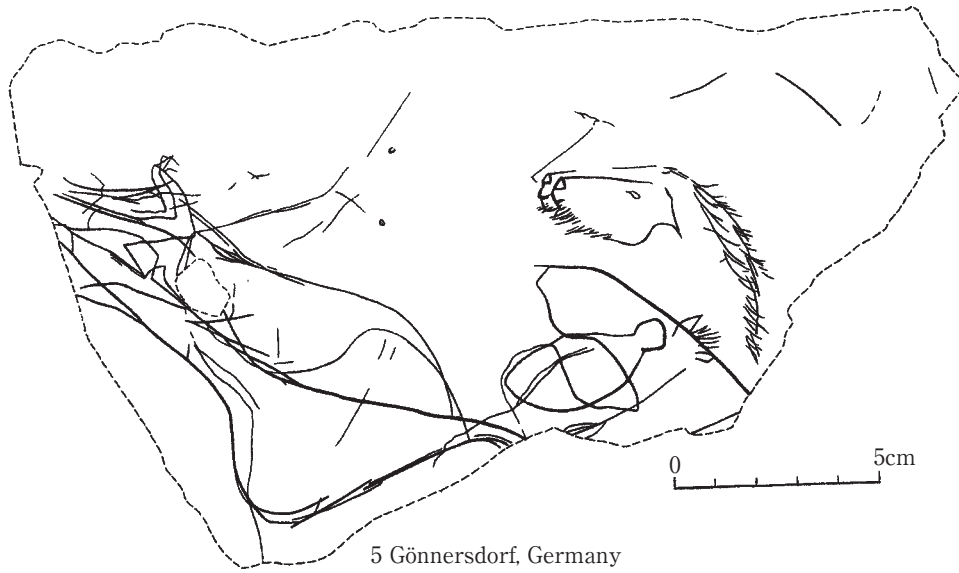
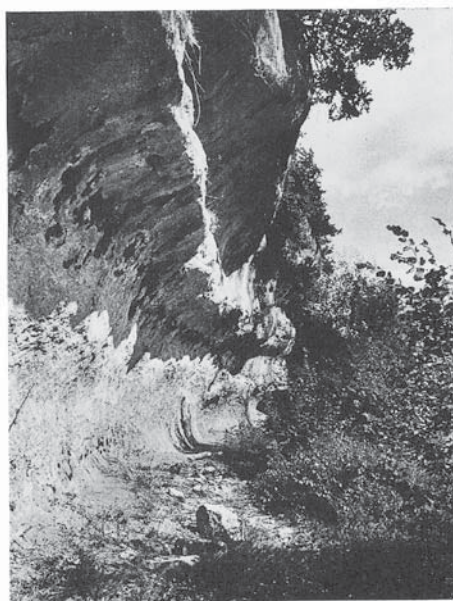


図22 ドイツ・フランスの女性像と野獣の線刻・線描例

	男性優位指数
採鉱・採石	95.4%
石の加工	95.0%
骨・角・貝の加工	93.0%
祭祀用具の製作	85.1%
装身具の製作	52.5%

これを参照すると、女性像の製作を石の加工，牙の加工とみれば，男性が製作した可能性がたつ

いことになる。しかし、祭祀用具とみれば、女性が製作した可能性は少し高くなってくる。性的分業では、女性とのかかわりがつよい小物を女性が作るのは、ごく一般的な傾向である。ヨーロッパの女性像としたものには、ドルニ＝ヴェストニツェの乳房だけになってしまった立体女性像や、ピータースフェルスやモンリュウの極小型の女性像は、紐通しの孔をもち複数個を連ねて身に着けるようになっている。これを女性が身につける「装身具」と分類するならば、女性が製作した可能性は著しく高まる。2009年にドイツのシュツットガルトで開催された特別展『氷河時代—芸術と



1 石灰岩の岩陰の庇の下に岩塊になって落下埋没



2 女性像の位置の復元状態

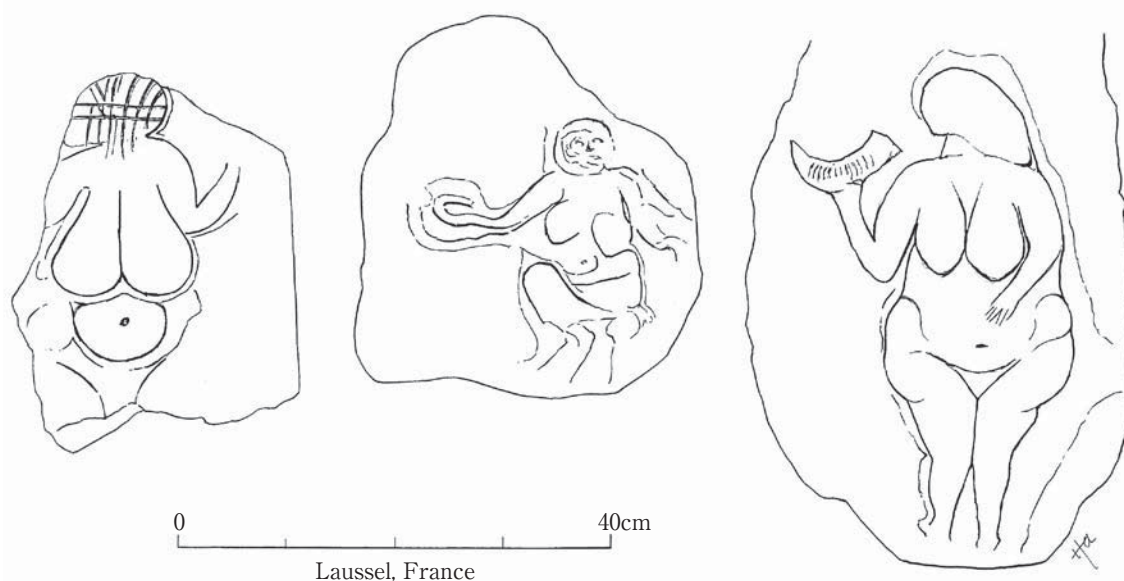


図23 ローセル岩陰の浮彫女性像とその出土位置

文化』の解説書には、理由は示していないけれども、若い女性が鹿角から角製品の素材を切り出している様子を想像して描いた絵を載せている（図 20-1）[Le Brun-Ricalens 2009 : 89]。その一方、岩壁に神話に登場するワニの絵を男性が描いているオーストラリア先住民の民族例も存在する（図 20-2）。

石の加工のばあい、石器の種類が問題である。たとえば、狩猟で男性が使う槍の先を女性が作ることは考えられないが、女性が使う調理用具のなかの石器まで男性が作るのでしょうか。マードックの統計では「石の加工」の 5% は女性となっている。その内容が問題となる。

小論で主張しているように、後期旧石器時代初めのホーレ＝フェルス例以来、女性像は女性の妊娠・出産と深いかわりをもっていたとすれば、石製品、牙製品から石板画、壁画にいたるまで、女性像はもっぱら女性の手になるもので、妊婦が自ら作ったのではなく彼女の母親または産婆が作って産婦に与えたのではないかと考えたい。その一方、後期旧石器時代前半のコスチェンキ、アヴデーヴォ、ガガリーノ遺跡間にみられる女性像の形態のつよい共通性と、女性像の変遷にみられる斉一性は、必要ときに思いつくままに女性像を製作したというものでなく、一定の距離をおく集団間で緊密な交流があつてはじめて女性像の形態が正確に伝播していることを示している。

同じ問題は、後期旧石器時代末のゲナスドルフやホーレンシュタインの石板の線刻女性像や、アングル＝シュール＝ラングランの洞窟壁画の浮彫り女性像についてもあてはまる（図 21・22）。女性像と野馬または野牛を同じ場所に重ね描きしているばあい、1) 女性像も野獣も男性が描く。2) 女性像も野獣も女性が描く。3) 女性像は女性が描き、野獣は男性が描く、の三つのばあいを想定可能である。ゲナスドルフの石材の粘板岩は硬くないので、彫器でなくフリントの剥片でも容易に線刻することができる。しかし、ここからはマンモス、野馬、サイなど女性との関係を簡単に説明できない動物の線刻も多数発掘されている。動物の線刻も女性の線刻の様式は斉一的であり、いずれも巧みである。女性像の並べ描き、重ね描きは、特定の人の手慣れた手練によるものであつて、何人もの人が交代しながら描いたのではないだろう。

ロージュリー＝バスの骨板には、トナカイの脚下に寝た状態の妊婦を彫刻し、反対面には野馬を彫刻している。イストリッツの骨板には、片面に 2 人の妊婦、反対面に野牛の図像を彫刻してあつた。前者は、トナカイを手前に妊婦を後方に遠近法を使って同じ巧みさで描いてあるので、トナカイと妊婦を彫刻した人が別であつたとは考えにくい。後者も、片面と反対面で彫刻した人が入れ替わつたとはいえないだろう。狩猟対象であつたトナカイ、野馬や野牛の姿をもっとも間近でくり返し見る機会があつたのは狩人であつて男性であつたろう。そのように考えると、ロージュリー＝バスの骨板に妊婦を彫つたのは男性であつたとの結論に達する。

フランス・ドルドーニュ県ローセル (Laussel) 岩陰から女性像ほか計 3 体を浮き彫りした石灰岩の塊が 3 個見つかる（図 23）。うち 1 個は高さ 44cm の大型で旧石器時代のもっとも美しい女性像として著名である。この女性の表現は妊婦ではない。S. N. ザミャートニンは、これらを一つの構図にまとめた復元図を描き、中央の女性は踊っている姿を表現しているとみて、呪術の儀式をおこなっている場面と解釈している [ビビコフ（新堀・金光訳）1985 : 119]。

さらに、コスチェンキやガガリーノの女性像が、両脚を軽く曲げ、内股にして脛の間を開き、踵をあげて爪先立ちで、両手を腹部に「静かに」おいている、とロシアの研究者はみる。そして、こ

の姿勢はシベリアのケート族（オスチャック族）の女性が舞踊するときの動作によく似ており、コスチェンキやアヴデーヴォの女性像がつけている腕輪は、ケート族が舞踊のさいに「ガラガラ」と音をだす伴奏用の腕輪と同じである、という〔同前：120～129〕。

しかし、女性像を踊っているとみなすロシアの研究者は、女性像が妊婦をあらわしているという最大の特徴を無視している。ローセルの3人の女性像は寝た状態の妊婦を中央にしてその左右に野牛の角を掲げた女性を配した情景と筆者は解釈する。それはこの場所で妊婦が出産するときの様子を表しており、岩陰のこの空間は固定的な産所であった可能性を考える。そうであれば、この空間は男性が関与しない世界であって、その場所を準備するのは女性と考えるほうが理解しやすいように思える。しかし、硬い石灰岩の壁に浮き彫りする力のいる作業であるから男性と考えるべきであろうか。ローセル岩陰からは男性と鹿を浮き彫りした岩塊も見つかっているので、ザミャートニンはその男性を狩人とみなして復元図のなかに含めているが、狩人とまでいえるかどうか。

出産に男性がいっさい関わりをもたないとは一概にいえない。産婦の代わりに夫（産公）が産褥について乳児を育てるというクバード（couvade, 擬婉）の風習は、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、太平洋諸島を問わず世界的な広がりをもっており、北海道アイヌにもあった。子どもに対する害物の影響から、子どもを守ろうとする呪術として起こったのがクバードの起源で、呪術によって分娩を促進させ、容易にするために出産に父親が参加するのもクバードの一種だろう、と金関丈夫は述べている〔金関1975：58〕。

平安～鎌倉時代、12,3世紀に描かれた絵巻物に出産の場面がある〔渋澤編1964〕。『餓鬼草紙』には、坐って子どもを産む女を2人の女が助け、まわりに3人の女と1人の巫女が控え、部屋の入り口で弓の弦を弾いて寄り来る悪魔を退ける男、反対側の入り口で隣の部屋にいる僧侶に應對する女の姿を描いてある。『北野天神縁起絵巻』にも、縁に立って弓の弦を鳴らしている男を描いてある。

男性がなんらかの形で出産に協力するという風習は存在するのであって、ロシアのメジン遺跡の住居跡にのこされた「打楽器」も男性が使った可能性を否定はできないことになる。

以上のように問題点を整理したうえで旧石器時代の女性像の作者の性について改めて考えてみると、女性でなければならないとはいえない。むしろ自らは出産する身体能力をもっていない男性が子どもの出産を願って女性のために作った可能性のほうが大きいのではないだろうか。確かに上黒岩石偶のばあいは、居住地の近所で石材を採取→線刻、と工程は少なく、かつ重労働などではないので、男性の存在を考慮しなくても製作可能である。隆起線文土器の分布圏は東北地方から南九州まで広がっているのに、石偶はこの遺跡から見つかっているだけである。伴出の上黒岩式土器は四国～東海地方西部の地域に分布圏をもつという〔小林2009：418〕。上黒岩型有茎尖頭器の石材は地元産のチャートを用い、広域に分布するサヌカイトを利用しておらず、同じ型式の有茎尖頭器は四国・中国地方を中心に西南日本では広く分布するが散発的であるという特徴をもっている〔綿貫2009：463〕。上黒岩式土器の時期はどちらかといえば閉鎖的で自己完結的な傾向をもつ社会を構成しているようにもみえる。これらの社会的背景と合わせ考えると、上黒岩石偶は女性の作とみることもあながち否定はできないけれども、はたしてどうか。

茨城県花輪台貝塚出土の縄文早期の土偶のうち完形の1点（図版18-298）は、筆者の観察では、表裏に成形時についた指先の圧痕をいくつものこしている。いずれも細く小さいので、女性の指先

とみてよく、形態的につよい類似を示すこの遺跡出土の土偶はすべて女性の作と判断してよいだろう。これを拡大して、象牙製品や石製品は男性、土製品は女性が作ったと解釈することは、はたして不可能であろうか。

製作者の性の追究は、使用者そして用途の問題とかかわりを持ち、さらに立体女性像がヨーロッパからシベリアまで伝播するさいに女を通してなのか、男を通してなのか、他の文物のばあいと合わせ、そのメカニズムを解明するうえでも重要な課題である。

本研究にあたって最近の文献などの教示をいただいた五十嵐ジャンヌ、稲田孝司、小野昭、小畑弘己、加藤博文、木村英明、工藤雄一郎、佐野勝宏、清水芳裕、鈴木建治、原田昌幸、平野恭子、深澤芳樹、山田康弘、綿貫俊一の諸氏、炭素 14 年代の校正で援助いただいた工藤雄一郎氏、実測図の作成でお世話になった小野昭、黒沢浩、西村美幸、綿貫俊一の諸氏に感謝する。

註

(1)——本稿では、旧石器時代の女性像 (female figurine または female figure) の用語を使い、ヴィーナス Venus または Venus figurine の名称を使わないことにした。古代ギリシャのアフロディテ (万物の生殖をうながす豊饒の女神、美と愛の女神、あるいは恋の女神) や古代ローマやルネサンスのヴィーナス (春を象徴する女神) との共通性は女性の裸像という点だけであって、後世の人がヴィーナスに付与した「若く美しい女性」の芸術性を追求する目的を、旧石器時代の女性裸像がもっているとはいえないからである。「ヴィーナスとは所詮は旧石器時代からの長い系譜をもつ女神の仮りの名称にすぎない」と美術史の木村重信は表明している [木村 1982: 212]。

(2)——たとえば、「オーリニャック期でも時の経過にともなって形式が抽象化する」とする木村重信の考え [木村 1982: 37] がそうで、私もヴァインベルク例やセリエ例は、具象的な形態をもつヴィレンドルフ例などを抽象化した形態と誤って解釈し、新しく位置づけていた [春成 2008]。しかし、この見方はあくまでも先入観をもって型式変化を考えたにすぎなかった。

(3)——ブレイユが 1907 年に発表したロージュリー＝バスの女性像の実測図 [Breuil 1907: 10] は、正面からではなく、45 度斜めの位置から描いて、陰裂の表現をわからなくしてある。これは、「卑猥なヴィーナス」

に対する神父としての彼の憤み深さの表れであったのだろう。ブラッサンブイの女性像の一部、ヴィレンドルフやモラヴァニーの女性像のばあいも同様に、斜めからとった写真が多く、これらを正面から正確に描いた実測図を筆者は知らない。上黒岩の石偶の性的三角形を発掘者たちが腰囊と説明し、その後、50 年近く、誰も疑問を発しなかったのも、無意識のうちに性の問題から避けようとしていたからであろう。しかし、このような学問姿勢では、旧石器時代の女性像の解明からは遠ざかってしまうだろう。なお、本論文で示しているロージュリー＝バスの女性像の図 (図版 12-154) は写真と南山大学蔵のレプリカから作成したもの、ヴィレンドルフの女性像の図 (図版 3-38) は 1992 年 9 月にテュービンゲン大学博物館で入手した精巧なレプリカから作成した実測図と拓本で、いずれも筆者による。

(4)——年代的には上黒岩から 1 万年以上くだる例であるけれども、縄文時代後・晩期の線刻礫が、新潟県朝日村元屋敷遺跡から多数発掘されている [朝日村教育委員会編 2002]。扁平な板状の礫を選び長三角形ないし楕円形に加工し、両面または片面の一端に線刻したものである。土偶の形態・文様との間に共通性をもつものがあるので女性をあらわしている可能性がつよい。線刻は性器をあらわしているようである。前の論文で落としてしまったので、一言ふれておきたい。

参考文献

- 朝日村教育委員会編 2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書、第22集、新潟県朝日村教育委員会・新潟県。
- イェリス、オーラフ・アドラー、ダニエル、S・ストリート、マーティン・ウェーニンガー、ベルンハルト（門脇誠二・工藤雄一郎訳）2009「ユーラシアにおける現代人の出現：OIS3 考古記録の絶対年代に関して」『旧石器研究』第5号、99～120頁。
- 江上波夫 1970「東西交渉のあけぼの—旧石器時代のヴィーナス像について—」『漢とローマ』東西文明の交流1、9～32頁、平凡社。
- 江坂輝弥・岡本健児・西田栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」（日本考古学協会編）『日本の洞穴遺跡』224～236頁、平凡社。
- 金関丈夫 1975『発掘から推理する』朝日選書40、朝日新聞社。
- ギーディオ、S.（江上波夫・木村重信訳）1968『永遠の現在—美術の起源』東京大学出版会。
- 木村重信 1982『ヴィーナス以前』中公新書641、中央公論社。
- 木村英明 1997『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書出版会。
- 2000「シベリア旧石器時代の人形像」『土偶研究の地平』『土偶とその情報』研究論集（4）、9～32頁、勉誠社。
- 小島俊彰 1976「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢美術工芸大学学報』第20号、35～56頁。
- コナード、ニコラス J. 2006「シュヴァーベン地方に出土した初期造形芸術と楽器」『シンポジウム日本考古学 日本原始古代の変革と連続』jdz documentaion, 第9巻、59～73頁、IUDICIDM Verlag GmoH,München.
- 小林謙一 2009「上黒岩遺跡1群土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集、412～420頁。
- 佐原 真 1994『斧の文化史』UP 考古学選書6、東京大学出版会。
- 浜澤敬三編 1964『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻、角川書店。
- 清水芳裕 2010『古代窯業技術の研究』柳原出版。
- 田村 隆 2011『旧石器社会と日本民俗の基層』ものが語る歴史24、同成社。
- 中川 明・前川明男 1997『粥見井尻遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告、156、三重県埋蔵文化財センター。
- 西秋良宏 1995「石の道具とジェンダー」（常木見・松本健編）『文明の原点を探る—新石器時代の西アジア—』50～77頁、同成社。
- 原田昌幸 1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』『土偶とその情報』研究論集（1）、217～269頁、勉誠社。
- 2010『土偶とその周辺Ⅰ（縄文草創期～中期）』日本の美術、第526号、ぎょうせい。
- 春成秀爾 2007「性象徴の考古学」『儀礼と習俗の考古学』102～210頁、塙書房。
- 2008「上黒岩ヴィーナスと世界のヴィーナス」『縄文時代のはじまり』40～72頁、六一書房。
- 2009「石偶・線刻礫」「上黒岩遺跡の石偶・線刻礫と子安貝」『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集、301～318頁、485～501頁。
- 春成秀爾・小林謙一編 2009「愛媛県上黒岩遺跡の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集。
- ビビコフ、S. N.（新堀友行・金光不二夫訳）1985『マンモスの骨でつくった楽器』築地書館。
- ボジンスキー、G.（小野昭訳）1991『ゲナスドルフ 氷河時代狩猟民の世界』六興出版。
- 松室孝樹・重田勉 2010「滋賀県出土の草創期土偶の新例—相谷熊原遺跡—」『考古学ジャーナル』第608号、29～31頁。
- 山田 猛編 1994『大鼻遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告、100—5、三重県埋蔵文化財センター。
- 山田康弘 1994「有文石棒の摩滅痕」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号、85～92頁、筑波大学歴史・人類学系。
- 2008『生と死の考古学』東洋書店。
- ルロワ＝グーラン、A.（蔵持不三也訳）1985『先史時代の宗教と芸術』日本エディタースクール出版部。
- 綿貫俊一 2009「上黒岩遺跡出土石器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集、428～477頁。

Abramova, Z.A. 1967 Palaeolithic Art of the U.S.S.R., *Arctic Anthropology*, Vol. IV, No.1, pp.1-179, University of Wisconsin Press.

-
- Absolon, K. 1949 The diluvial anthropomorphic statuettes and drawings, especially the so-called Venus statuettes discovered in Moravia. *Artibus Asiae*, Tom. 12, pp.201 ~ 220.
- Amirkhanov, H.A. and Lev, S.Yu. 2007 New finds of Paleolithic art from Zaraisk. *Rossiikya Arkheologiia*, No.1, pp.22-35, Moscow.
- Barta, J. 1972 *La statuette paléolithique nommée Venus de Moravany*. Bratislava.
- Bisson, M.S. and Bolduc P. 1994 Previously Undescribed Figurines from the Grimaldi Caves. *Current Anthropology*, Vol. 35, No.4, pp.458-468.
- Bosinski, G. 1986 *Die große Zeit der Eiszeitjäger, Europa zwischen 40000 und 10000v. chr.* Funfte Theodor Mommsen-Vorlesung.
- 1990 *Homo sapiens, L'histoire des chasseurs du Paleolithique superieur en Europe* (40000-10000 avant J.-C.). Editions Errance.
- 1991 The Representation of Female Figures in the Rhineland Magdalenian. *Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol. 57, Part 1, pp.51-64.
- Breuil, H. 1907 Etude sur les Oeuvres d'Art de Laugerie Basse. *L'anthropologie*, Tom. 18, pp.10-36, Paris.
- 1924 Notes de Voyage Paleolithique en Europe Centrale, II. *L'anthropologie*, Tom. 34, pp.515-552.
- Champion, T., Gamble, C. and Shennan, S. 1984 *Prehistoric Europe*. Academic Press.
- Clottes, J. et Cerou, E. 1970 La statuette feminine de Monpazier (Dordogne). *Bulletin de la Societe prehistorique francaise*, Tom. 67, pp.435-444, Paris.
- Cohen, C. 2003 *La femme des origins*. Belin-Herschel.
- Darasse, P. et Guffroy, S. 1960 Le Magdalenien superieur de abri de Fontalès, pres Saint-Antoin (tarn-et-Garonne). *L'anthropologie*, Tom. 64, pp.1-35, Paris.
- De Saint-Perier, D. 1922 Statuette de Femme steatopyge Decouverte a Lespugue. *L'anthropologie*, Tom. 32, pp. 361-381, Paris.
- Delporte, H. 1979 *L'image de la Femme dans l'art Prehistorique*. Picard.
- Efimenco, P.P. 1958 *Kostenti I*. Izdatelystro Akademii Nauk, Moskva.
- Egloff, M. 1990 La dame de Monruz, Analyse de une demarche archeologique. *Renovations archeologique* (Catalogue de exposition), Musee Schwab, pp. 49-56.
- Feustel, R. 1970 Statuettes féminines paléolithiques de la République Démocratique Allemande. *Bull. de la Société Préhistorique Française*, Tom. 67, Paris.
- Gamble, C. 1982 Interaction and Alliance in Palaeolithic Society. *Man*, (NS), Vol.17, pp.92-107.
- 1986 *The Palaeolithic Settlement of Europe*. Cambridge University Press.
- Graziosi, P. 1939 Une nouvelle statuette prehistorique decouverte en Italie. *Societe Prehistorique Francaise*, Tom. 36, pp.159-162, Paris.
- Höck, C. 1993 Die Frauenstatuetten des Magdalenien von Gonnarsdorf und Andernach. *Jahrbuch des Romisch-Germanischen Zentralmuseums Mainz*, 40, pp.253-316.
- Iakoleva, L. 1992 Les statuettes feminines en ivoire du mezinien de de Meziriche (Ukraine). *Bull. Soc. Prehist. Francaise*, Tom. 89, pp.68-71.
- Jerinek, J. 1976 *The Pictorial Encyclopedia of The Evolution of Man*. Hamlyn, London.
- Klima, B. 1957 Übersicht über die jüngsten paläolithischen Forschungen in Mahren. *Quartär*, T. 9, Bonn.
- Le Brun-Ricalens, F. 2009. Erfindungsreich! Innovationsschub im Jungpaläolithikum. *Eiszeit-Kunst und Kultur*, pp. 88-90, Thorbecke, Ostfildern.
- Ladier, E. 1992 La venus du Courbet. *L'anthropologie*, Tom. 96, pp.349-356.
- Marshack, A. 1991 The Female Image : 'Time-factored' Symbol. A Study in Style and Aspect of Image Use in the Upper Palaeolithic. *Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol.57, Part 1, pp.51-64.
- Muller-Beck, H. und Albrecht, G. (Herausgegeben) 1987 *Die Anfänge der Kunst vor 30000 Jahren*. Konrad Theiss Verlag, Stuttgart.
- Muller-Karpe, H.Y. 1966 *Handbuch der Vorgeschichte*. Band I, Altsteinzeit, C.H.Beck.
- Peters, E. 1930 Die Kunst der Magdalenien vom Petersfels. *Jahrbuch für Prähistorische & Ethnographische Kunst*, T. 6, Berlin.
-

-
- Pidoplichko, I. G., L. B. Lyubin, N. G. Timchenko 1972 K voprosu o hozyaystve, bytie i kulture pozdnepaleoliticheskogo naseleniya v sryazi s raskopkami v s Mejirich. *Materialy i Issledovaniya po Arheologii SSSR*, No. 185, Moskva.
- Piette, E. 1895 La Station de Brassempouy et les Statuettes Humaines de la Période Glyptique. *L'anthropologie*, Tom. 6, pp.129-151.
- Polikarpovich, K.M. 1940 Raboty po issledovaniyu paleolita i epipaleolita v SSSR i Zapadnoi oblasti v 1933-1935 gg. *Sovetskaya Arkheologiya*, No.5, pp.81-87, Moscow-Leningrad.
- Praslov, N.D. 1993 Eine Neue Frauenstatuette aus Kalkstein von Kostenki I (Don, Russland). *Archaeologisches Korrespondenzblatt*, Jah.23, Heft 2, pp.165-173, Mainz.
- Rasmussen, S.O., Andersen, K.K., Svensson, A.M., Steffensen, J.P., Vinther, B., Clausen, H.B., Siggaard-Andersen, M.L., Johnsen, S.J., Larsen, L.B., Dahl-Jensen, D., Bigler, M., Royhlsberger, R., Fischer, H., Goto-Azuma, K., Hansson, M. and Ruth, U. 2006 A new Greenland icecore chronology for the last glacial termination. *Journal of Geophysical Research*, No.111, Doi : 10.1029/2005JD006079.
- Shovkoplias, I.G. 1965 *Mezhinskaya Stoyanka*, Kiev.
- Soffer, O. 1987 Upper Paleolithic Connubia, Refugia, and the Archaeological Record from Eastern Europe. *The Pleistocene of Old World*, pp.333-348.
- Tarasov, L. M. 1979 *Gagarinskaya stoyanka i ee mesto V paleolite Evropy*. Akademia Nauk, Leningrad.
- Vandiver, P.B., Soffer, O., Klima, B. and Svoboda, J. 1990 Venuses and Wolverines : The Origins of Ceramic Technology, ca.26,000 B.P. *The Changing Roles of Ceramics in Society : 26,000 B.P. to the Present*, The American Ceramics Society Inc., Ohio.
- Vasil'jev, S.A. 1985 Une Statuette D'argile Paleolithique de Sibirie de Sud. *L'anthropologie*, Tom. 89, pp.193-196, Paris.
- Vasiljev, S.A. et Ermolova, N.M. 1983 Majninskaja stojanka-novyj pamjatnik paleolita sibiri. *Paleolit Sibiri*, s.65-75, Novosibirsk.

(国立歴史民俗博物館名誉教授, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010 年 9 月 27 日受付, 2011 年 5 月 20 日審査終了)

Female Figurines and Batons Engraved with Sexual Symbols in the World Paleolithic Age

HARUNARI Hideji

On the Eurasian continent, female figurines from the Aurignacian period to the Gravettian period and Kostenki period (42,000 to 24,000 years ago) in the upper Paleolithic Age represented the figures of pregnant women just before childbirth and were talismans to pray for pregnancy and safe and easy birth. After that, the Solutrean period (25,000 to 23,000 years ago) was devoid of female figurines, and in the Magdalenian-Mezin period (21,000 to 14,500 years ago) in the late Paleolithic Age, line-engraved female figures and female figurines appeared. Those types of female figurines in Japan are older if the assumption is made that the stone items unearthed from the Iwato site in Oita Prefecture of about 25,000 years ago are female figurines. Stone female figurines were discovered at the Kamikuroiwa site in Ehime Prefecture dating back 14,500 years. After that, 13,000 years ago, clay figurines appeared, leading to the development after the Initial Jomon Period.

The female figurines from the late Paleolithic Age can be classified into the following types: Laugerie-Basse type in France, Gönnersdorf type mainly in Germany, Mezin type in the Russian Plain, Maininskaya type in Siberia, and Kamikuroiwa, Kayumi-Ijiri and Aitani-Kumahara types in Japan.

The Laugerie-Basse type originates in the relief engraved female figures of the French Angles-sur-l'Anglin type from the rock shelters. The Gönnersdorf type originates in the line-engraved female figures of the French Lalinde type from the rock shelters or in the line-engraved female figurines on plate stones of the German and French Hohlenstein type. The origins of the Mezin type, the Maininskaya type and the Kamikuroiwa type of female figurines are currently unknown.

The female figurines of the Gönnersdorf type have flat abdomens with almost no breasts, and they do not appear to represent pregnant women. The line-engraved female figures of the Pech Merle type, however, which precede the line-engraved female figures of the Lalinde type, represent the figures of pregnant women. The line-engraved female figures of the La Marche type also represent pregnant women just before childbirth. Assuming that the female figurines of the Gönnersdorf type also symbolize pregnant women, there is a high possibility that the female figurines in the upper Paleolithic Age, as with the female figurines in the late Paleolithic Age, were used as talismans for safe pregnancy and birth. Against the background to this, there was a seemingly global tendency of infertility that manifested in the on-going maximum of the Last Glacial Age.

The line-engraved batons from the Kamikuroiwa site in Ehime Prefecture have pinnate patterns and triangular shapes engraved on rod-like stones. These shapes and patterns are the symbols of sexual intercourse which represent female genital organs on priapic ivories in Eurasia. People in the Paleolithic Age at the Mezin site on the Russian Plain played a type of music indoors, beating cranial bones, mandibular bones and blade bones of mammoths with pinnate patterns on them, which symbolize female genital organs, with priapic clappers made from ivory. When it is assumed that female figurines were talismans for pregnancy and childbirth, praying to invite pregnancy or childbirth was a fertility ceremony, and there is a possibility that the line-engraved batons from the Kamikuroiwa site were used for the same purpose.

Key words: Kamikuroiwa, Paleolithic Age, baton engraved with sexual symbol, female figurine, pregnancy and childbirth, Eurasian Continent

旧石器時代女性像集成

Corpus of the Palaeolithic Female Figurines
from Europe, Russia and Japan

Compiled and Drawn by H. Harunari



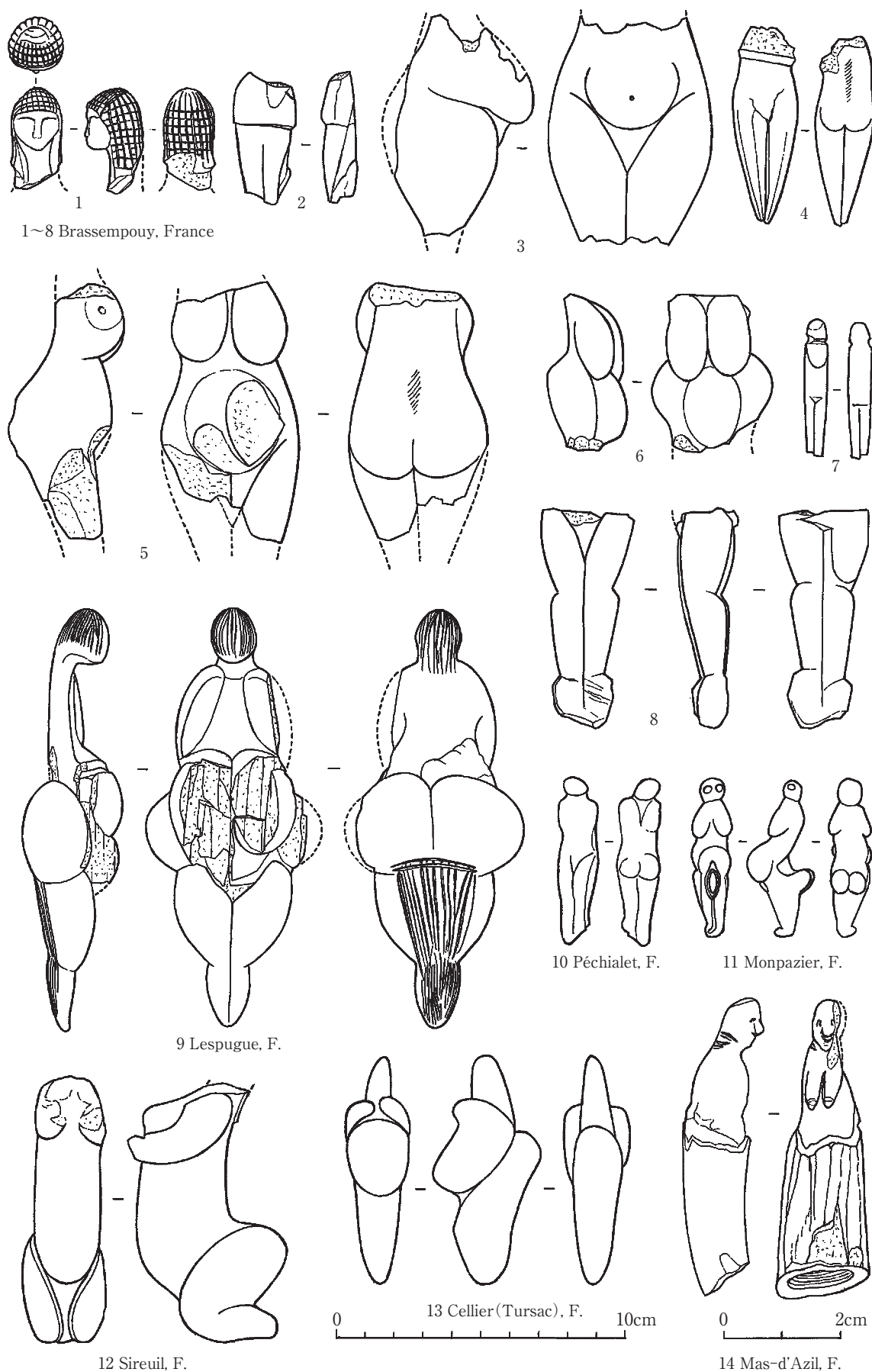
Lassel, France (h : 42cm)



後期旧石器時代前半(約 40,000 ～ 24,000 年前)の女性像の分布
Distribution map of the Female Figurines in the early Late Palaeolithic (ca.40,000–24,000cal.BP)

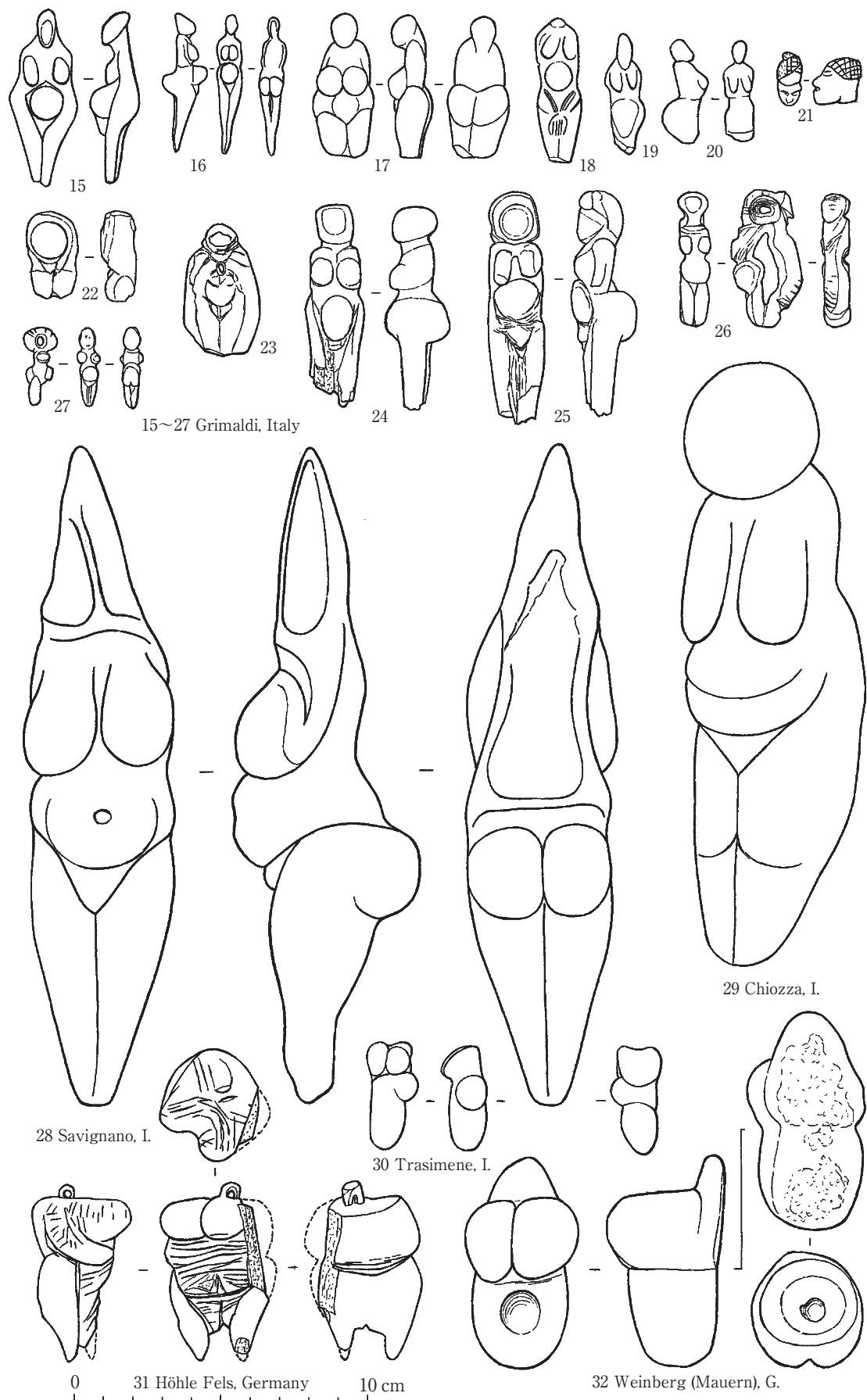
1 Brassempouy, 2 Lespugue, 3 Mas d'Azil, 4 Monpazier, 5 Sireuil, 6 Cellier, 7 Laussel, 8 Grimaldi, 9 Savignano, 10 Chiozza, 11 Trasimene, 12 Linsenberg, 13 Weinberg, 14 Predmostí, 15 Petrkovice, 16 Dolní Věstonice, Pavlov, 17 Moravany, 18 Willendorf, 19 Galgenberg, 20 Khotyrev, 21 Zaraisk, 22 Gagarino, 23 Avdeev, 24 Kostenki I · VIII, 25 Mal'ta, 26 Buret', 27 Iwato. Mas d'Azil (3) is widely regarded as Magdalenian.

- Pl. 1 Female Figurines from France in the early Late Palaeolithic
- Pl. 2 Female Figurines from Italy and Germany in the early Late Palaeolithic
- Pl. 3 Female Figurines from Germany, Austria and Czecho in the early Late Palaeolithic
- Pl. 4 Female Figurines from Czecho in the early Late Palaeolithic
- Pl. 5 Female Figurines from Russian Plain in the early Late Palaeolithic
- Pl. 6 Female Figurines from Russian Plain in the early Late Palaeolithic
- Pl. 7 Female Figurines from Russian Plain in the early Late Palaeolithic
- Pl. 8 Female Figurines from Russian Plain in the early Late Palaeolithic
- Pl. 9 Female Figurines from Russian Plain in the early Late Palaeolithic
- Pl. 10 Female Figurines from Siberia in the early Late Palaeolithic
- Pl. 11 Female Figurines from Siberia and Japan, and Symbolic Vulvas from Russian Plain in the early Late Palaeolithic

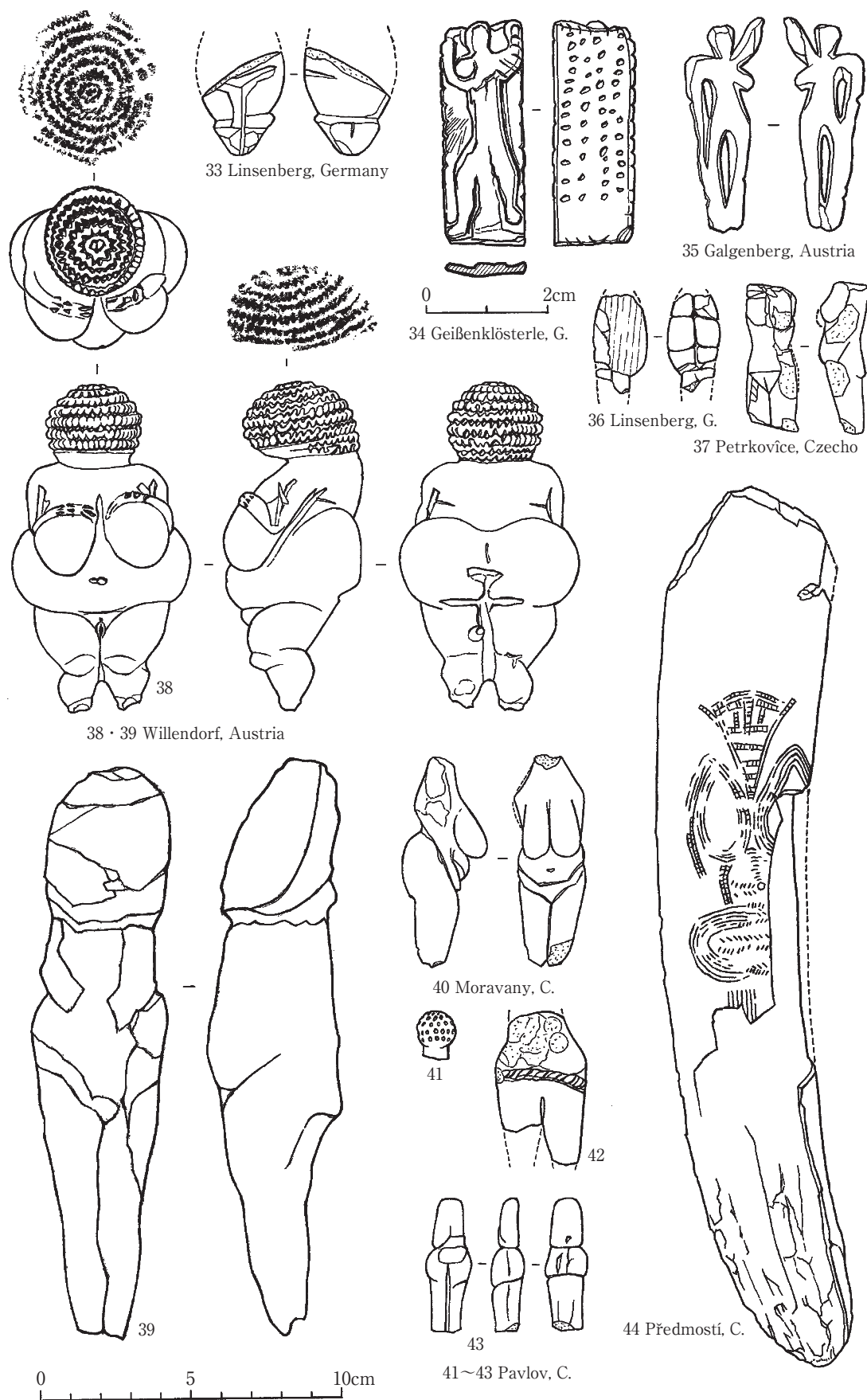


図版 1 後期旧石器時代前半のフランスの女性像 (1~11 マンモス牙製, 12・13 方解石製, 14 馬歯製)
 1~8 ブラッサンブイ, 9 レスピューグ, 10 ペチアレ, 11 モンパジエ, 12 シルイユ, 13 セリエ, 14 マス=ダジル
 (後期旧石器時代末とされる)

Pl. 2

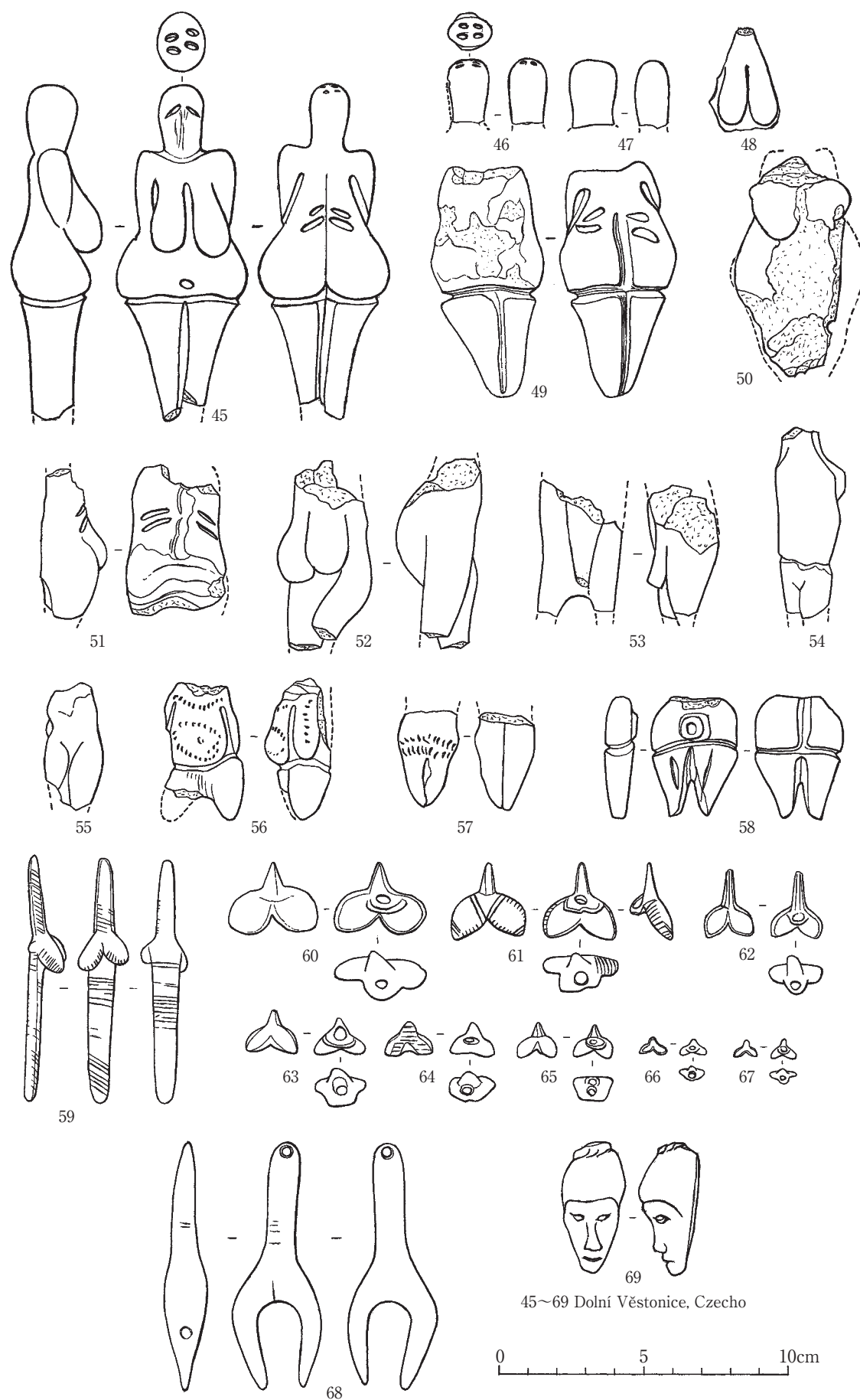


図版 2 後期旧石器時代前半のイタリア・ドイツの女性像 (15~30・32 蠟石製, 31 マンモス牙製)
 15~27 グリマルディ, 28 サヴィニャーノ, 29 キョッツァ, 30 トラシメネ, 31 ホーレ=フェルス, 32 ヴァインベルク

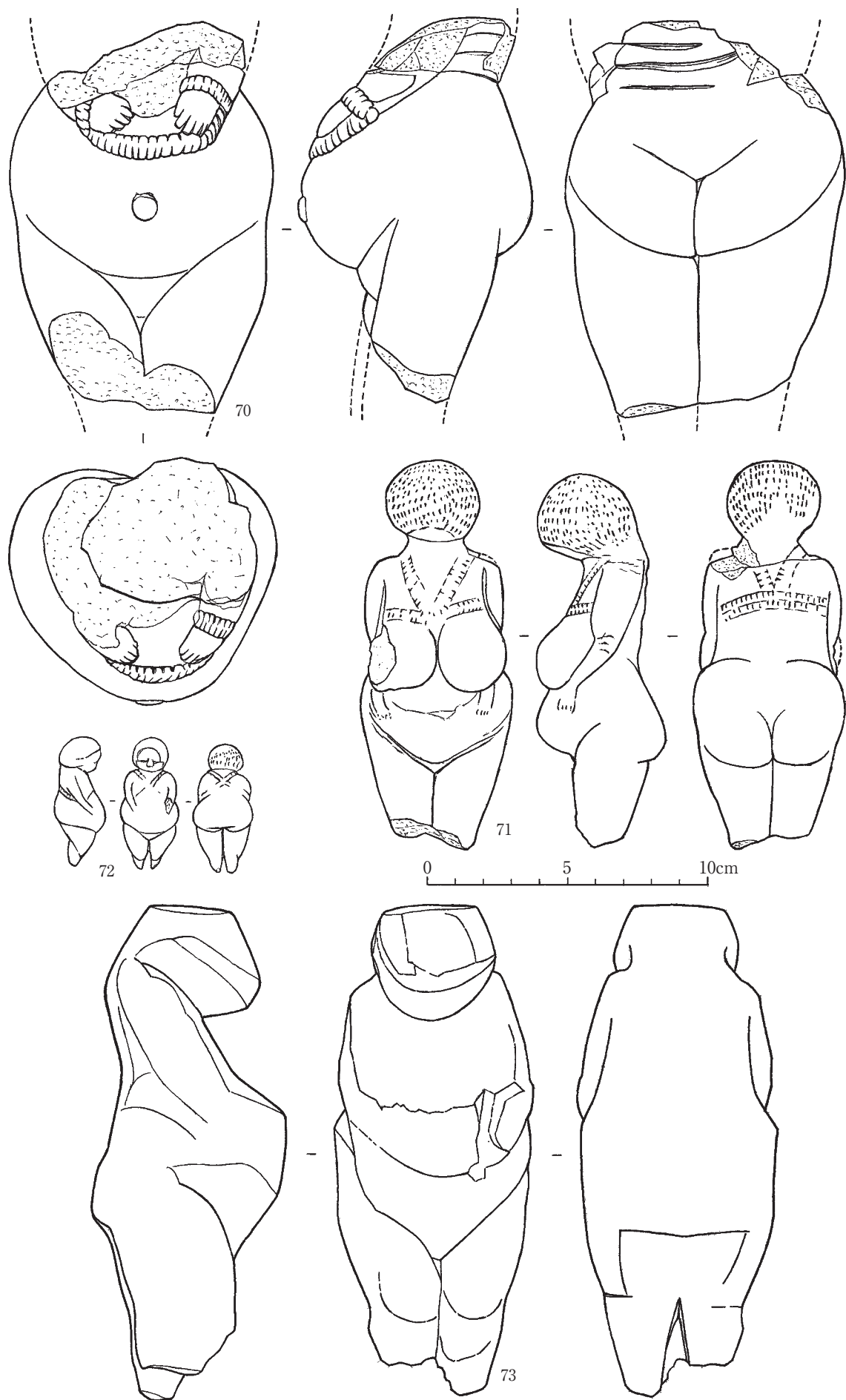


図版3 後期旧石器時代前半のドイツ・オーストリア・チェコの女性像

(33・36 石製, 34・40・43・44 マンモス牙製, 35 緑色片岩製, 37 黒玉製, 38・39 石灰岩製)
 33・36 リンゼンベルク, 34 ガイセンクレステレ, 35 ガルゲンベルク, 37 ペトルコヴィッツェ,
 38・39 ヴィレンドルフ, 40 モラヴァニー, 41～43 パヴロフ, 44 プシェドモステイ

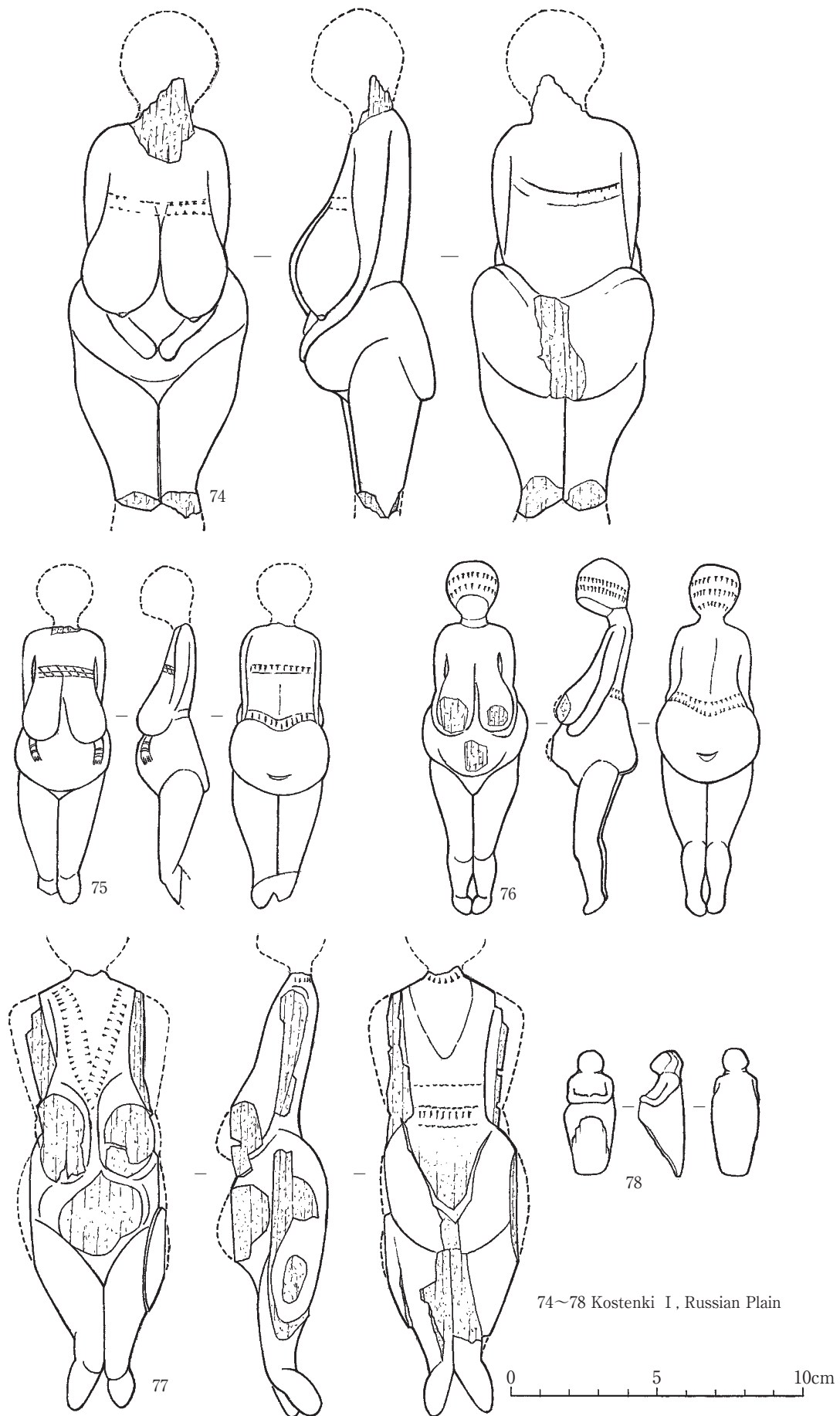


図版 4 後期旧石器時代前半のチェコの女性像 (45～57 土製, 59～68 鹿角製, 58・69 象牙製)
45～69 ドルニ＝ヴェストニツェ



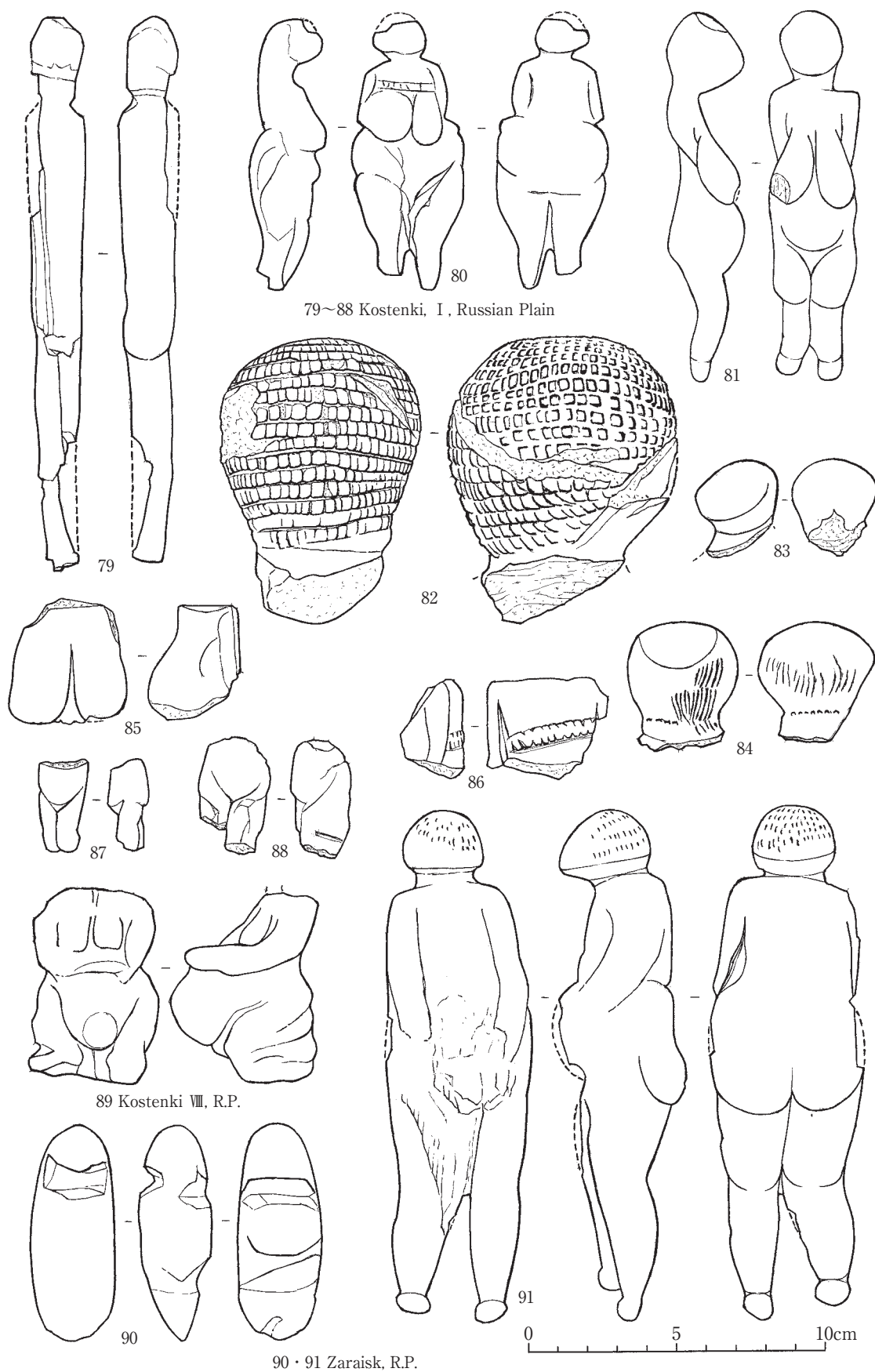
70~73 Kostenki I, Russian Plain

図版5 後期旧石器時代前半のロシア平原の女性像(70・71・73 石灰岩製, 72 マンモス牙製) 70~73 コスチェンキ I

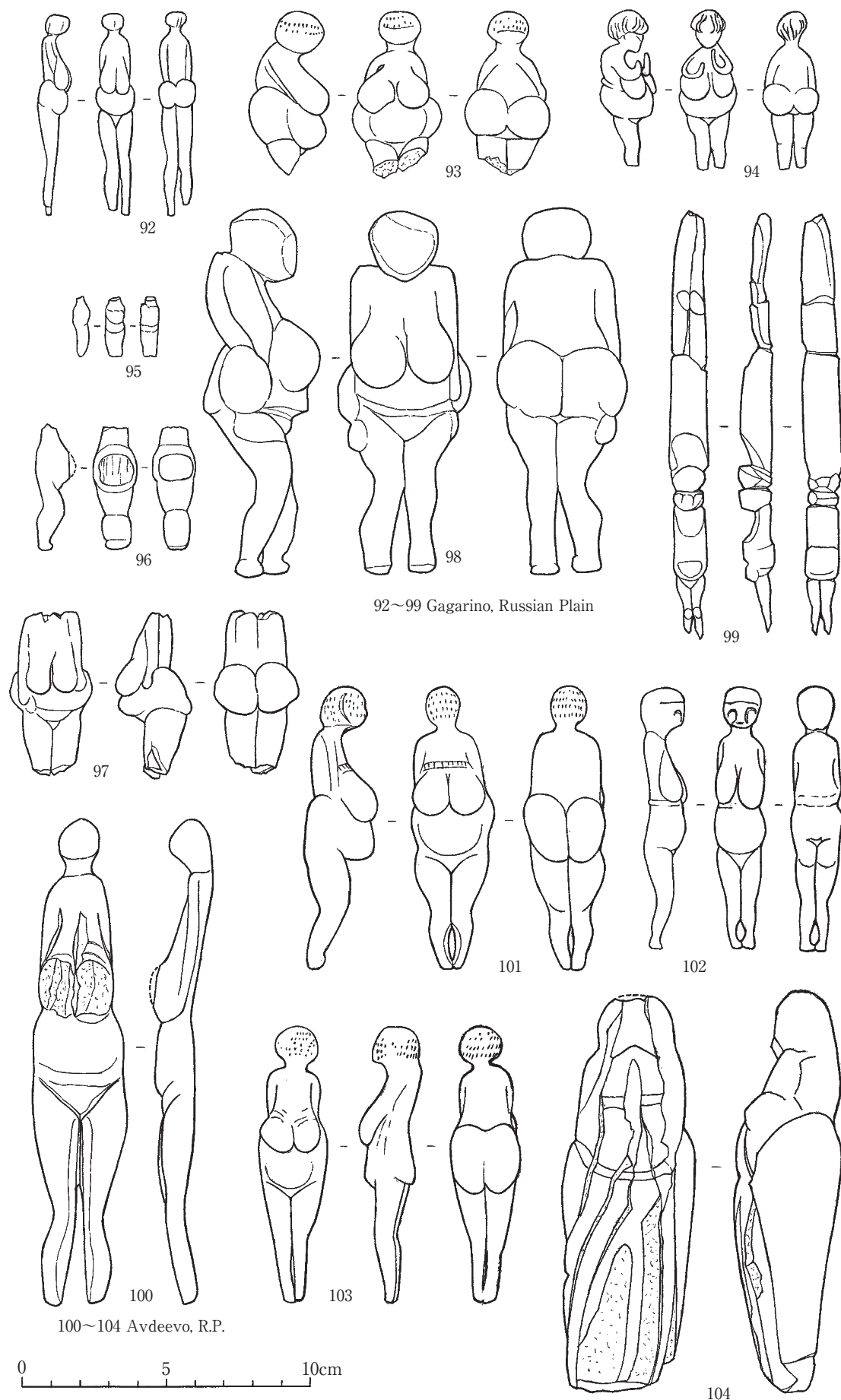


74~78 Kostenki I, Russian Plain

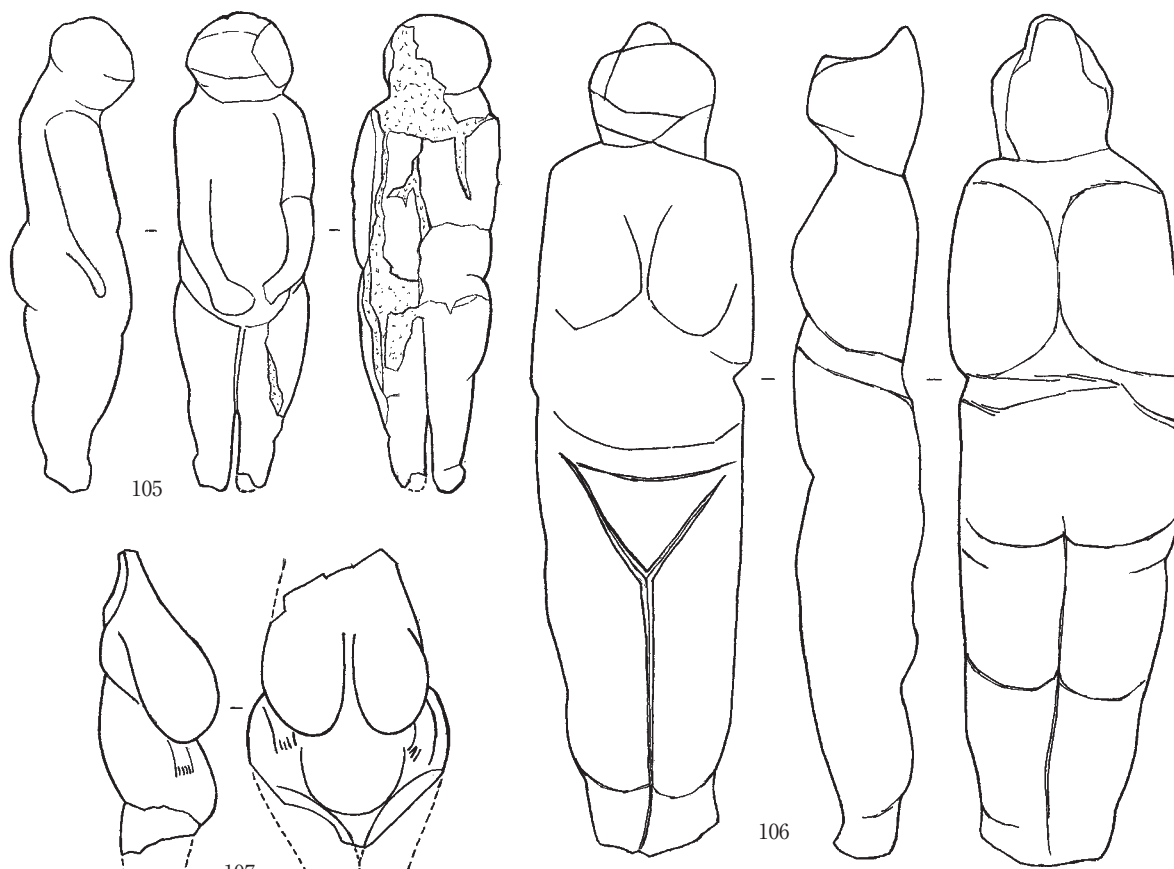
図版6 後期旧石器時代前半のロシア平原の女性像 (74~78 マンモス牙製) 74~78 コスチェンキ I



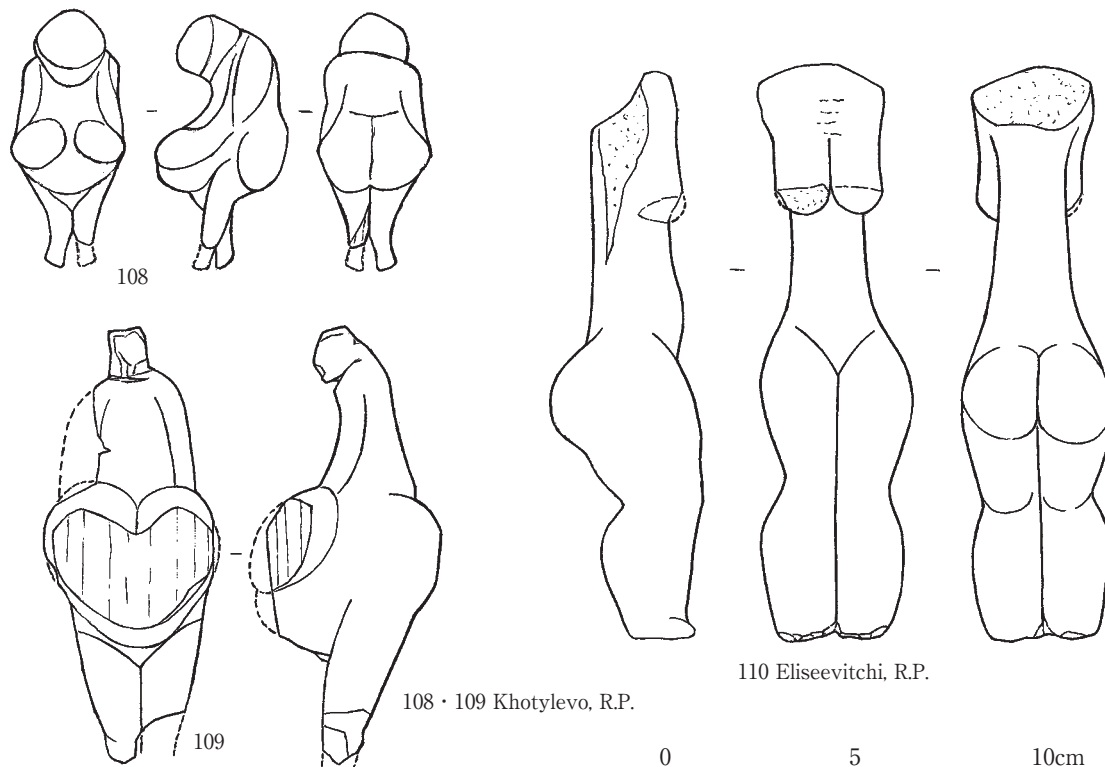
図版7 後期旧石器時代前半のロシア平原の女性像 (79～81, 83～91 マンモス牙製, 82 石灰岩製)
79～88 コスチェンキ I, 89 コスチェンキ VIII, 90・91 ザライスク



図版8 後期旧石器時代前半のロシア平原の女性像 (92~104 マンモス牙製) 92~99 ガガリノ, 100~104 アヴデーヴォ



105 ~ 107 Avdeevo, Russian Plain

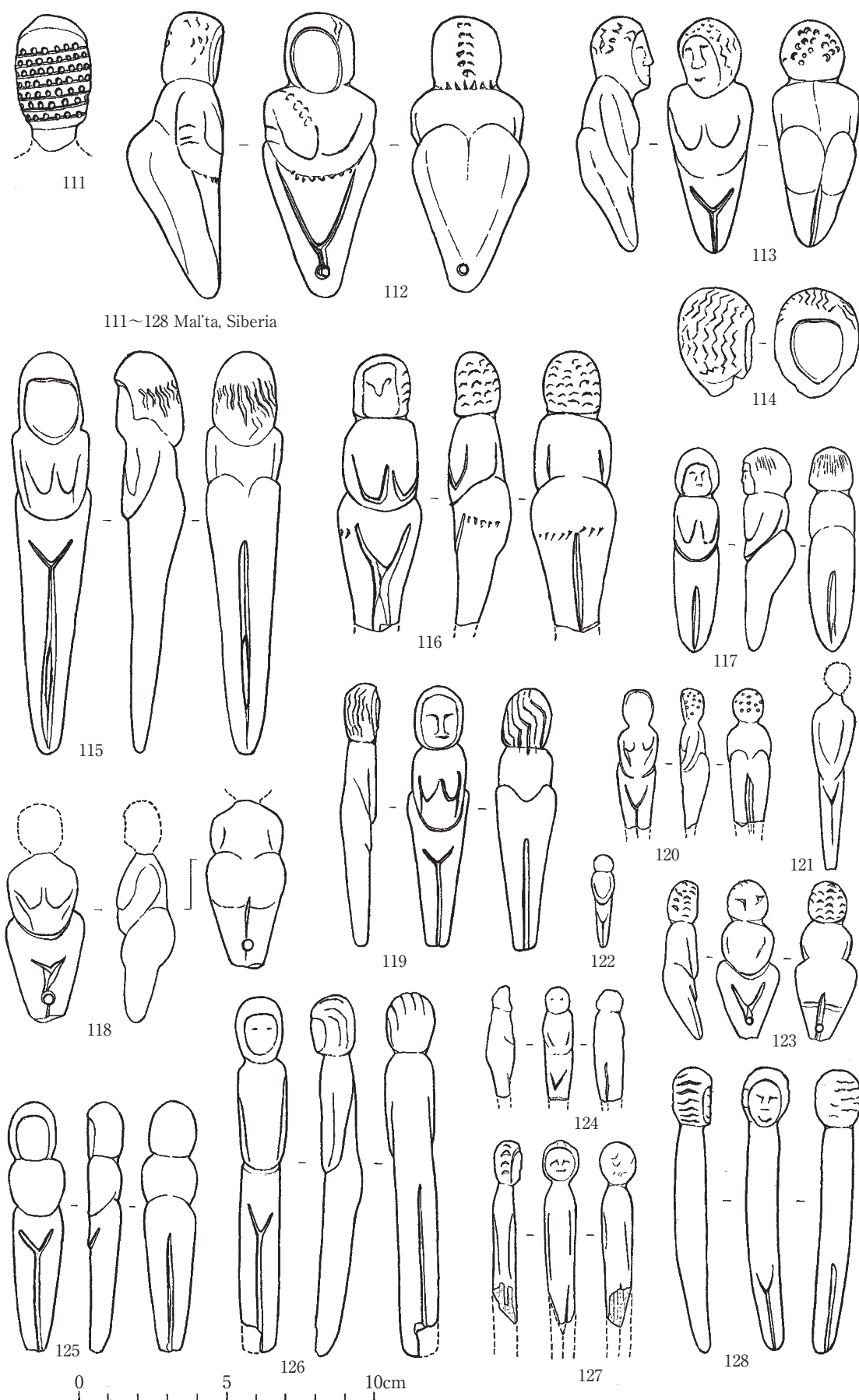


108・109 Khotylevo, R.P.

110 Eliseevitchi, R.P.

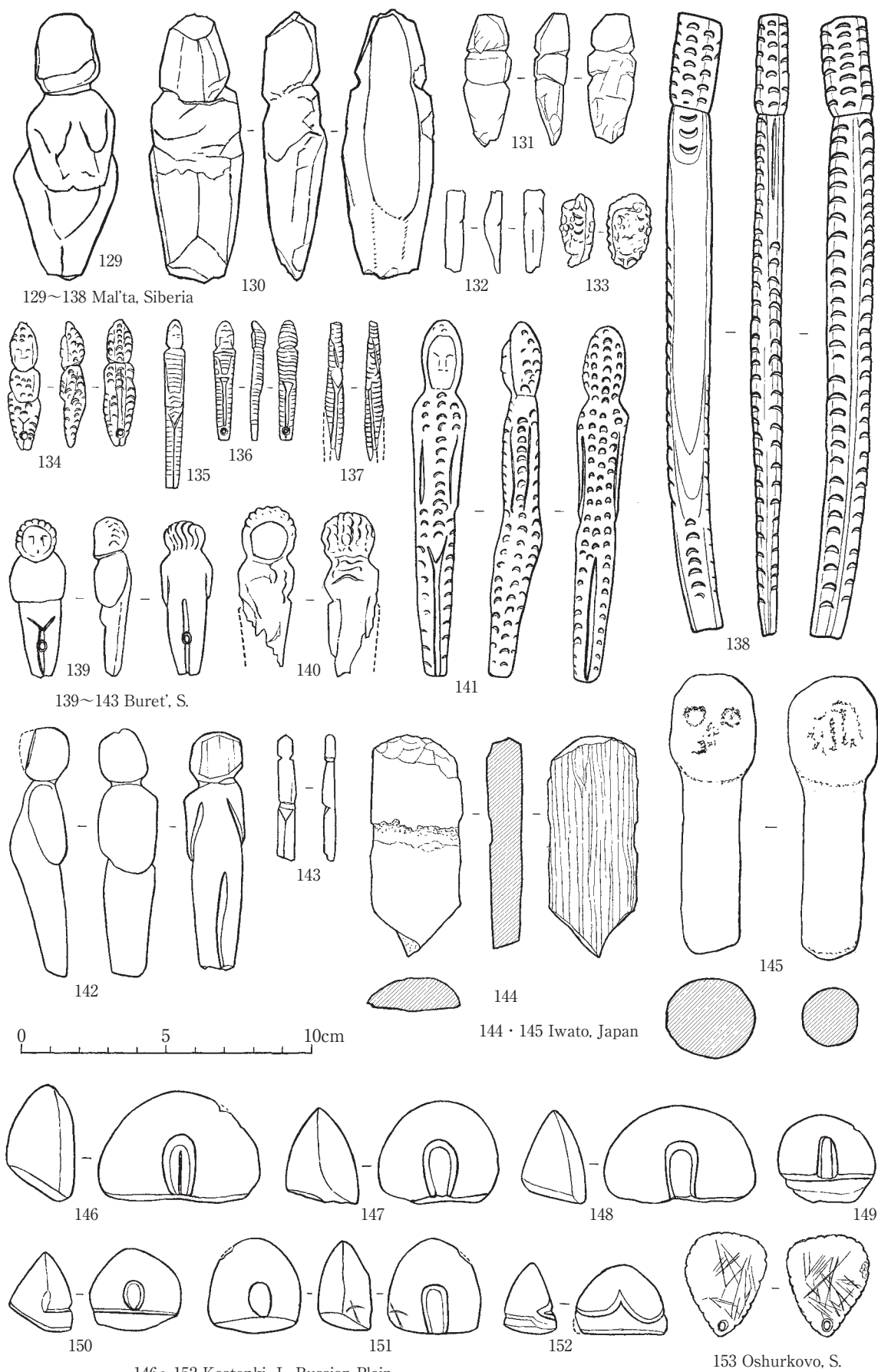
0 5 10cm

図版 9 後期旧石器時代前半のロシア平原の女性像 (105 ~ 110 マンモス牙製)
105 ~ 107 アヴデーヴォ, 108・109 ホティリョーヴォ, 110 エリセーヴィッチ



111~128 Mal'ta, Siberia

図版10 後期旧石器時代前半のシベリアの女性像 (111~125・127・128 マンモス牙製, 126 トナカイ角製) 111~128 マリタ



図版11 後期旧石器時代前半のシベリア・日本の女性像と女性象徴

(129~143 マンモス牙製, 144~145 結晶片岩製, 146~152 石製, 153 石製)

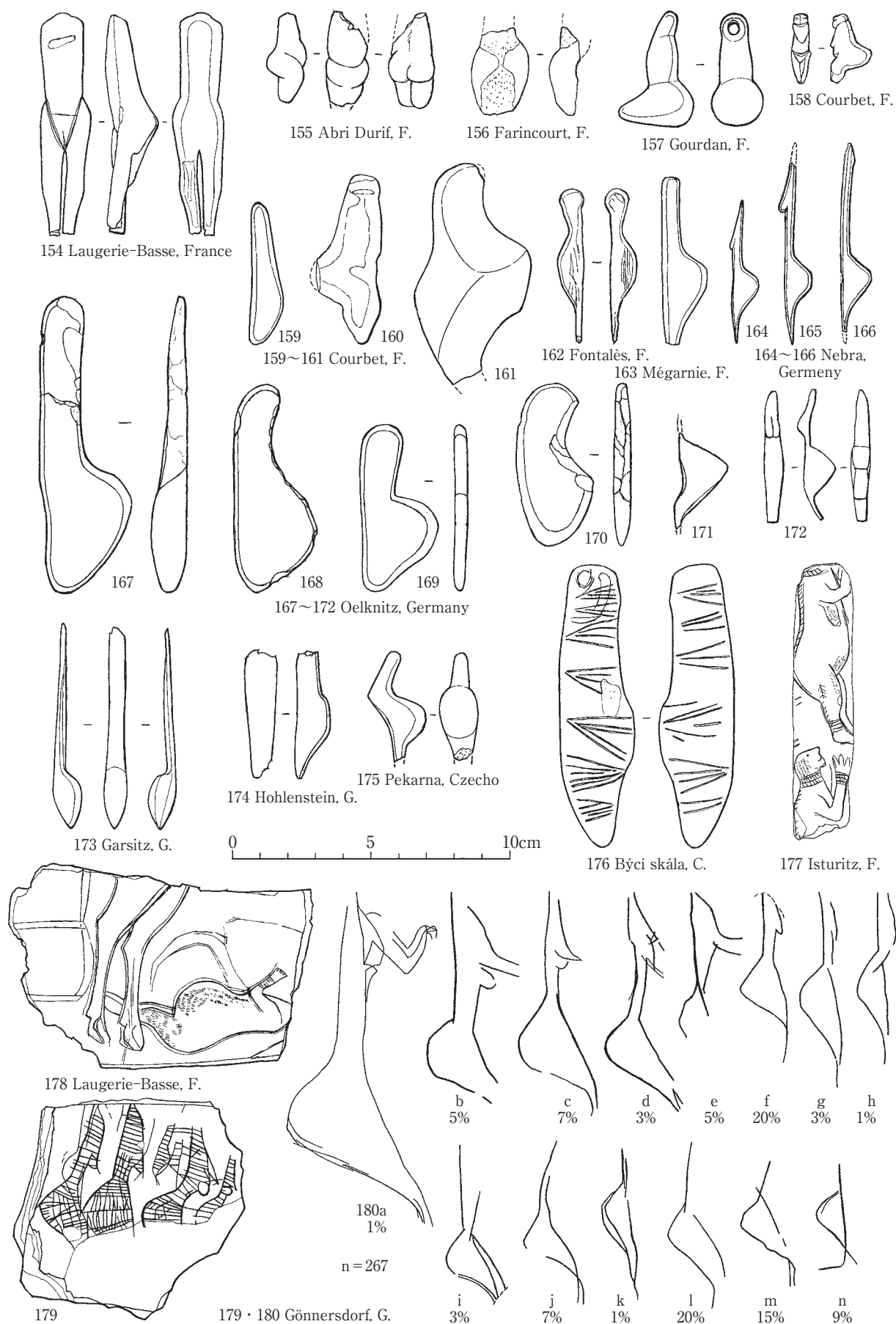
129~138 マリタ, 139~143 プレティ, 144・145 岩戸, 146~152 コスチェンキ I, 153 オシュル コヴォ



後期末～晩期旧石器時代(約 19,000 ～ 14,000 年前)の女性像の分布
Distribution map of the Female Figurines in the late Late to Final Palaeolithic (ca.19,000 – 14,000cal.BP)

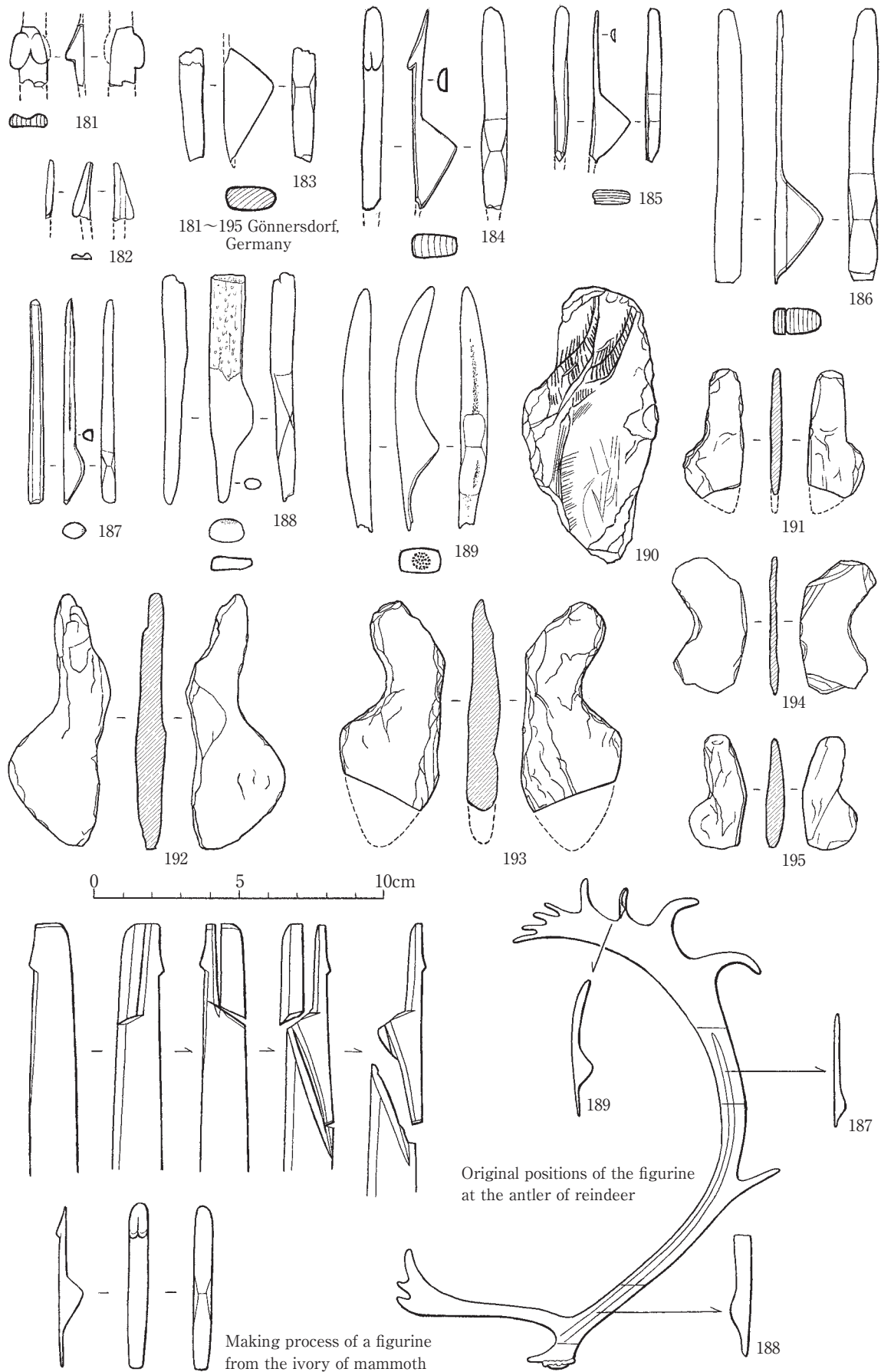
1 Gourdan, 2 Fontalès, 3 Courbet, 4 Laugerie-Basse, 5 Garsitz, 6 Oelknitz, 7 Gönnersdorf, 8 Andernach,
9 Mégarnie, 10 Nebra, 11 Monruz, 12 Petersfels, 13 Hohlenstein, 14 Býcí skála, 15 Pekarna, 16 Mezin,
17 Dobranichevka, 18 Mezhirich, 19 Maininskaya, 20 Krasnyi-Iar, 21 Kamikuroiwa, 22 Kayumi-Ijiri,
23 Aidani-Kumahara

Pl. 12 Female Figurines from France, Germany and Czecho in the late Late Palaeolithic
Pl. 13 Female Figurines from Germany in the late Late Palaeolithic
Pl. 14 Female Figurines from Germany and Switzerland in the late Late Palaeolithic
Pl. 15 Female Figurines from Russian Plain and Siberia in the late Late Palaeolithic
Pl. 16 Female Figurines from Japan in the Final Palaeolithic (Incipient Jomon)
Pl. 17 Female Figures from Japan in the Earliest Jomon Japan (ca.11,000 – 10,000cal.BP)
Pl. 18 Female Figures from Japan in the Earliest Jomon Japan (ca.10,000 – 8,500cal.BP)

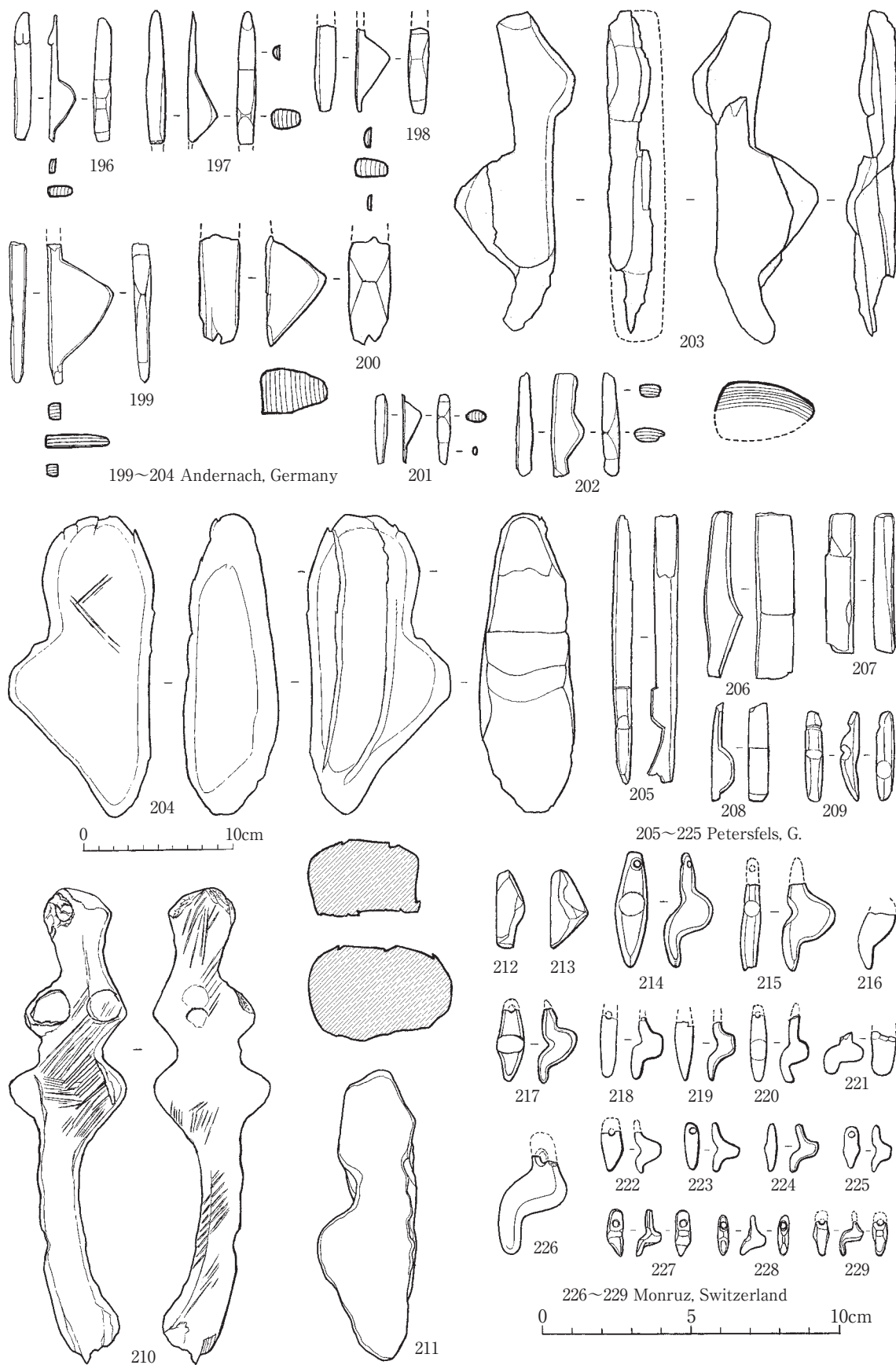


図版12 後期旧石器時代末のフランス・ドイツ・チェコの女性像

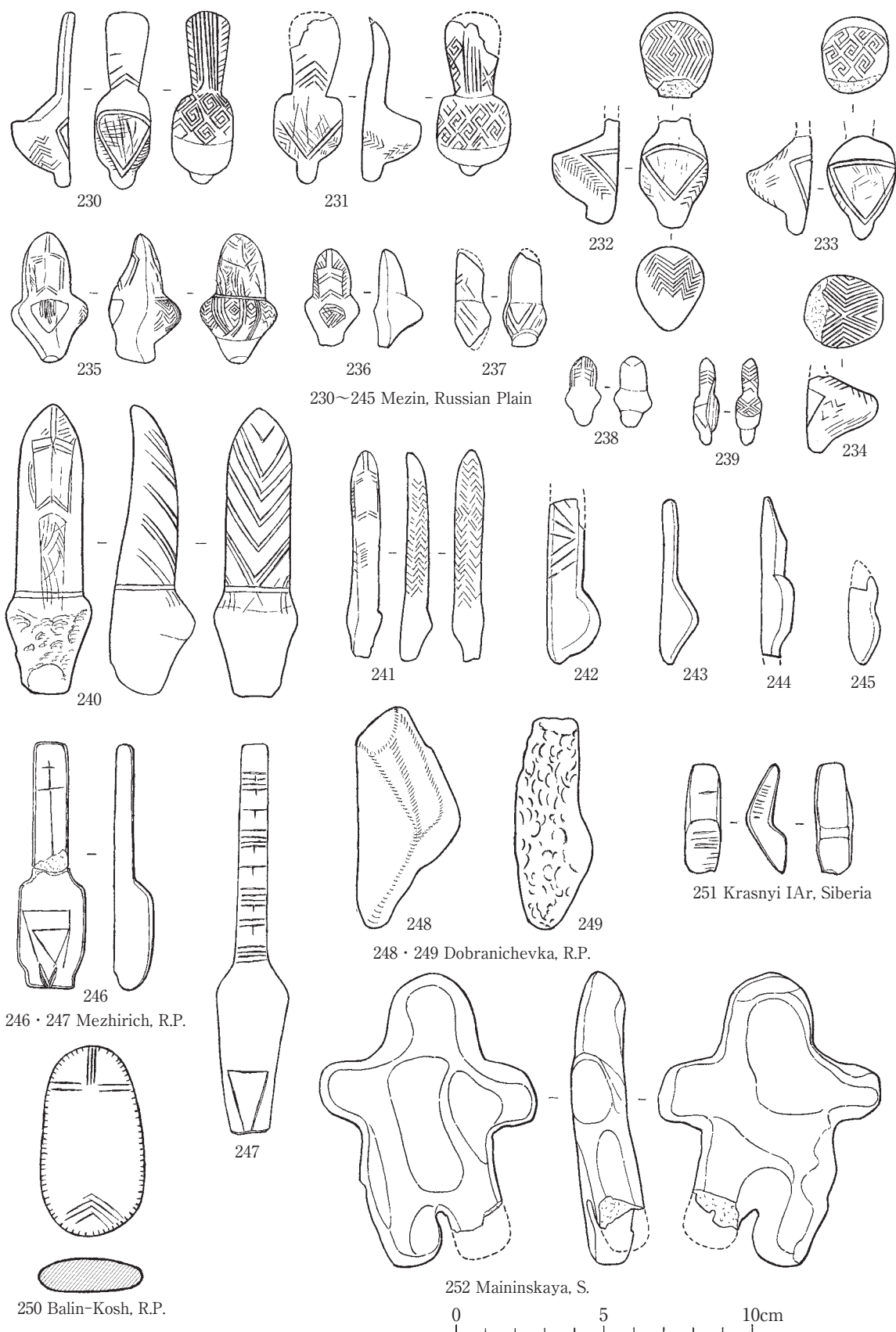
(154 ~ 156・158・162 ~ 166・171 ~ 175 マンモス牙製, 157・159 ~ 161・167 ~ 170・176 石製, 177・178 骨製, 179 粘板岩製)
 154 ロージュリー=バス, 155 アブリ・ドリフ, 156 ファランクール, 157 グールダン, 158 ~ 161 クールベ, 162 フォンタレ,
 163 メガルニ, 164 ~ 166 ネブラ, 167 ~ 172 エルクニッツ, 173 ガルシツ, 174 ホーレンシュタイン, 175 ペカルナ,
 176 ビチ=スカラ, 177 イストリツ, 178 ロージュリー=バス, 179・180 ゲナスドルフ



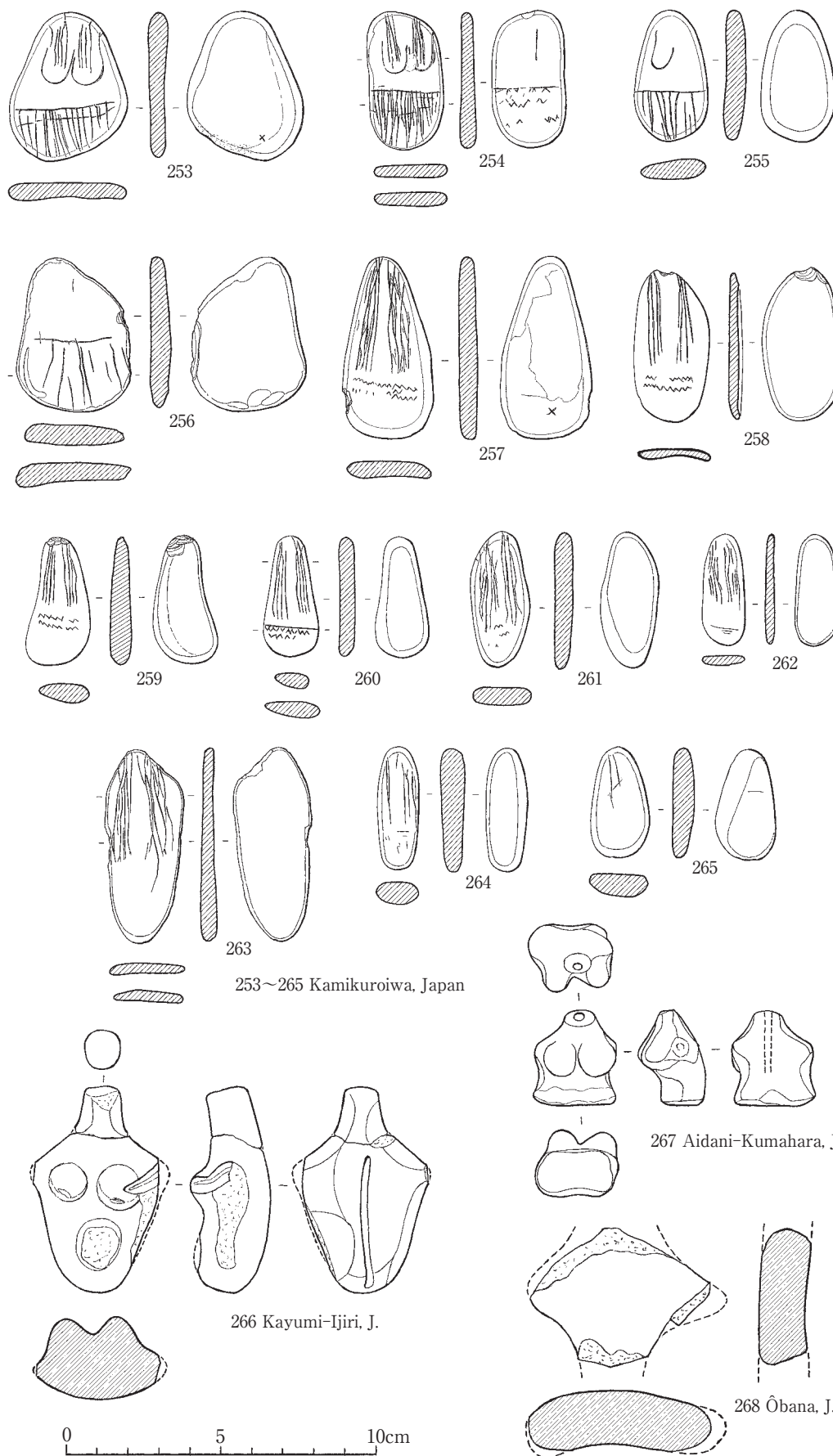
図版13 後期旧石器時代末のドイツの女性像 (181～186 マンモス牙製, 187～189 トナカイ角製, 190～195 粘板岩製)
181～195 ゲナズドルフ



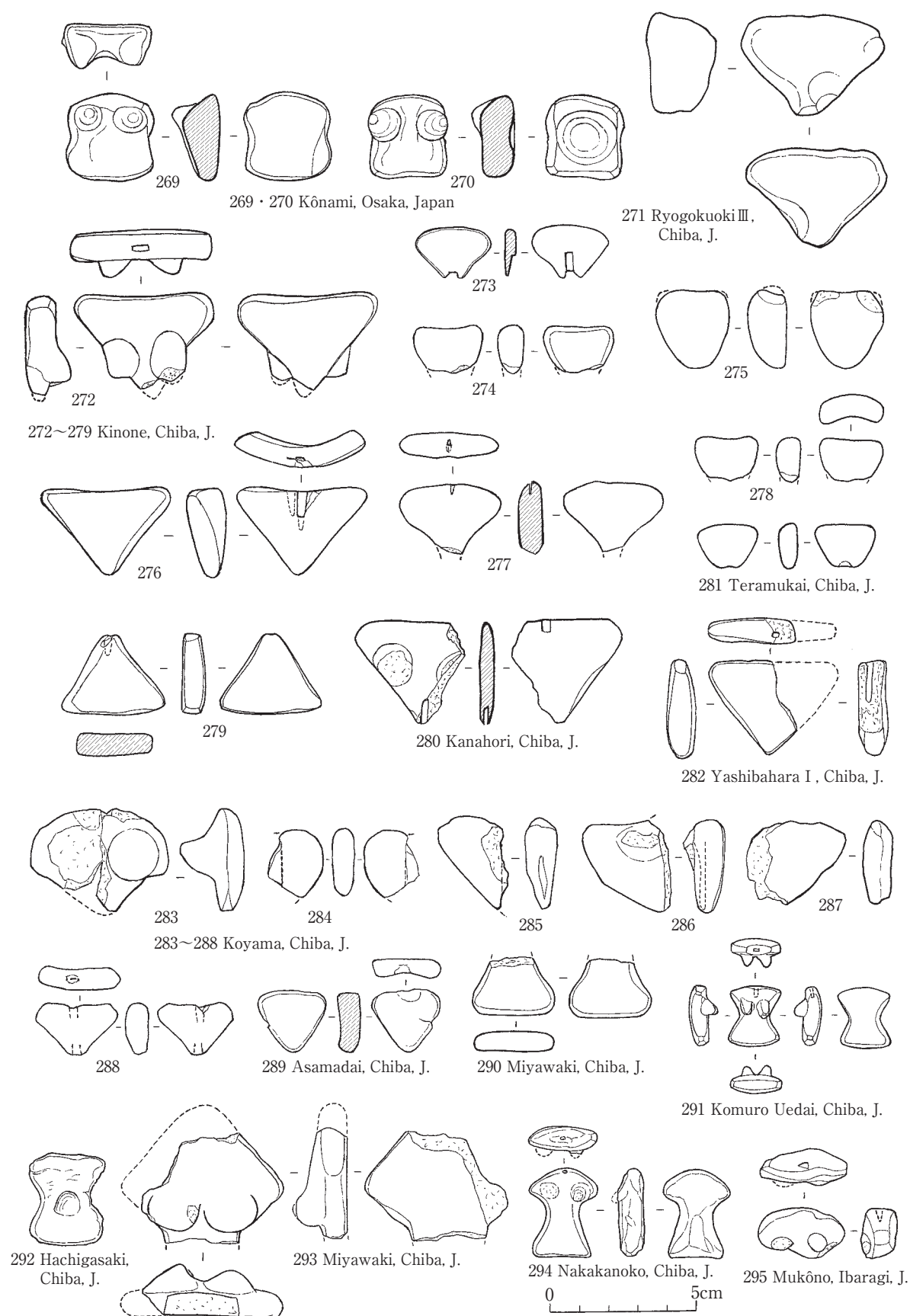
図版14 後期末～晩期旧石器時代のドイツ・スイスの女性像 (196～208 マンモス牙製, 209・212～228 黒玉製, 211 石灰岩製)
196～204 アンデルナハ, 205～225 ピーターズフェルス, 226～229 モンリュウ



図版15 後期旧石器時代末のロシア平原・シベリアの女性像 (229～247・251 マンモス牙製, 248・250 砂岩製, 249 琥珀製, 252 土製)
230～245 メジン, 246・247 メジリチ, 248・249 ドブラニチェフカ, 250 バリン=コシュ, 251 クラスヌイ・アール, 252 マイニンスカヤ

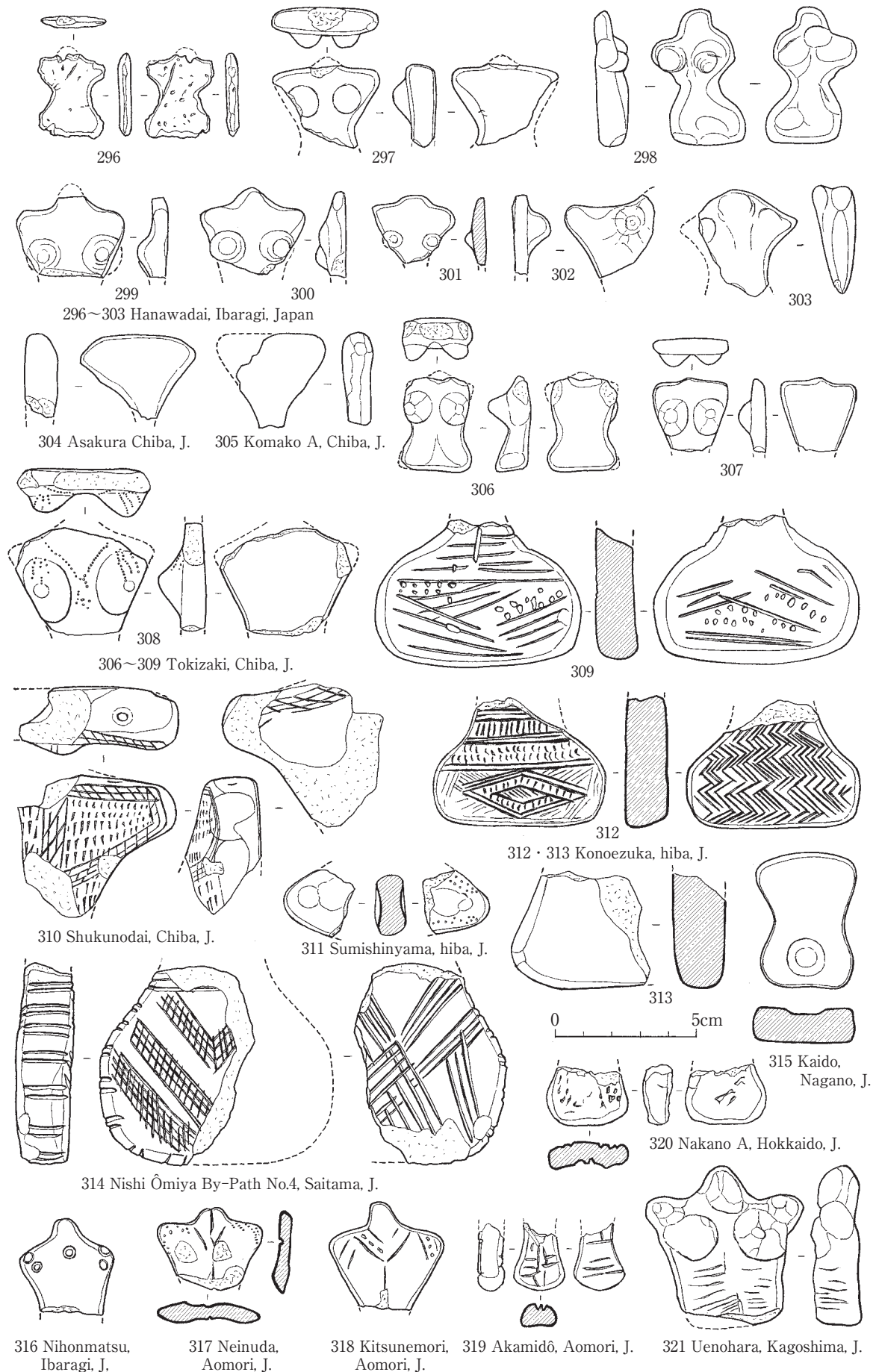


図版16 晩期旧石器時代（縄文時代草創期）の日本の女性像（253～265 緑色片岩製，266～268 土製）
253～265 愛媛・上黒岩，266 三重・粥見井尻，267 滋賀・相谷熊原，268 三重・大鼻



図版17 日本の縄文時代早期の女性像 (269 ~ 295 土製)

269・270 大阪・神並, 271 千葉・両国沖Ⅲ, 272 ~ 279 千葉・木の根, 280 千葉・金堀, 281 千葉・寺向, 282 千葉・矢芝原, 283 ~ 288 千葉・小山, 289 千葉・浅間台, 290・293 千葉・宮脇, 291 千葉・小室上台, 292 千葉・ハヶ崎, 294 千葉・中鹿子第2, 295 茨城・向野



図版18 日本の縄文時代早期の女性像 (296~321 土製)

296~303 茨城・花輪台貝塚, 304 千葉・朝倉, 305 千葉・小間子 A, 306~309 千葉・鶴崎貝塚, 310 千葉・宿の台, 311 千葉・墨新山, 312・313 千葉・庚塚, 314 埼玉・西大宮バイパス No.4, 315 長野・海戸, 316 茨城・二本松, 317 青森・根井沼, 318 青森・狐森, 319 青森・赤御堂, 320 北海道・中野 A, 321 鹿児島・上野原